

五
卷
時
勢
粧

立華時勢粧を読む ①

今月号より、「立華時勢粧」(貞享5年、1688年)について、そこに書かれていることを紹介してゆく。ただし江戸時代前期の木版刷りで、字体は草書体である。間違った読み方や解釈をした時はご指摘をいただきたい。また理解しやすくするために旧字は常用漢字に置き換えることにする。

「立華時勢粧」は富春軒仙溪による8冊からなる花伝書で、その内容は次のようになっている。

卷一 「立花時勢粧 上」

- 立花時勢粧序
- 真行草の図(33図)
- 真の花形(一図)
- 行の花形(一図)
- 草の花形(一図)
- 直心立の内真の花形(一図)
- 直心立の内行の花形(一図)
- 直心立の内草の花形(一図)
- 除心真行草の事
- 除心立の内真の花形(一図)
- 除心の内行の花形請上り立(一図)
- 同 水際除 請上り立(一図)
- 同 流枝持立(一図)
- 同 内副立(一図)
- 同 請流枝立(一図)
- 同 中流枝立(一図)
- 同 左流枝(一図)
- 除真の内草の花形(一図)
- 砂物真行草の事

砂物の内真の花形(一図)

- 同行の花形(一図)
- 同 草の花形(一図)

卷二 「立花時勢粧 中」

秘曲の図(45図)

卷三 「立花時勢粧 下」

秘曲の図(40図)

- 真の対の花(一図)
- 行の対の花(一図)
- 草の対の花(一図)
- 合真(一図)
- 二つ真(一図)
- おもと前置(一図)
- 小しだ前置(一図)
- 松の前置(一図)
- 竹の胴(一図)
- 南天の胴(一図)
- 藤の心(一図)
- 見越竹(一図)
- 牡丹の心(一図)
- 草花(一図)
- 松竹梅(一図)
- 杜若一色(三図)
- 荷葉(蓮)一色(三図)
- 菊の一色(三図)
- 水仙一色(三図)
- 松の一色(三図)
- 紅葉一色(三図)
- 櫻の一色(三図)
- 草花砂の物草(一図)

卷四 「立花秘伝抄 一」

常磐木の部

- 木 枝 気條 株 藥 葉

卷六 「立花秘伝抄 三」

草の部

- 花 蔓 松 檜 柏 枇杷
- 栢樹 梅 榊 かなめ わくら
- しらかし かすおしみ 黄楊
- 棕櫚 杉 うすの木 夏はげ
- ふしくろ 栗の若ばえ
- 檜の葉 まゆみ 猿すべり
- 柞 晒木 若木 柳 河楊
- 紅葉
- 花 桃 海棠 梨の花
- 櫻 梅 杏の花 百日紅
- 辛夷木 木蓮花 椿 山茶花
- 蘇枋花 長春 躑躅
- 石楠花 餅つじ
- 蓮花つじ 五月つじ かうぼけ 馬酔木
- 紫陽花 くちなし 桐の花
- 実の部
- 澤水木 水木 梅もどき
- 七かまど たらよう
- 仙蓼 みむらさき つる水木
- 深山樞 たちばな 燈籠草
- えびついでばら 南天 おもと
- 通用物の部
- 竹 笹 牡丹 藤 南天
- 小しだ 萩 山吹 庭櫻
- 粉団花 小でまり 米柳
- 小米花 黄梅 連翹 種紫
- つる水木 えびついでばら
- 仙蓼 きじの尾 下野 しのぶ
- 矢筈 盤梨 がんそく 白丁花
- 岩檜葉 ひとつ葉 薔薇

卷五 「立花秘伝抄 二」

花の部

- 金盞花 落花 著莪 高麗菊
- 鴨脚花 あやめ 芥子花
- うつぼ草 春菊 銀寶珠
- 杜若 きすげ 姫萱草 石竹
- 薊 花菖蒲 芍薬 早百合草
- 姫百合草 洗百合草
- あたご百合草 為朝百合草
- 鹿子百合草 葦 蒲 つくも
- 蓮 河骨 紫苑 萱草 葵
- 桔梗 女郎花 雁絨
- 松本仙翁花 仙翁花 檜扇
- 薄 唐黍 鶏頭花 旋覆花
- 黄精 蒲公英 紅花
- だんどく花 菊 寒菊
- われもこう 粟 駒つなぎ
- 澤ききよう 犬子草 浜木綿
- 蘭 藤ばかり 鼠尾草 龍膽
- よろいとおし 唐車前 あわ雪
- 花つる 七重草 葱草
- いさざ 野かいどう けまん
- 茜草 莎草 櫻草 虎尾
- つち草 金寶花 にし木
- うつぼ草 仙茨菰 ばれん
- 佛生花 岩芭蕉 水仙花

卷七 「立花秘伝抄 四」

- 七つ枝の事(一図)
- (立花道具の図)
- 対の花真行草の事
- 松竹梅三瓶の事
- 立花陰陽の事
- 十三ヶ條法度の事(一図)
- 古代十ヶ條法度の事
- 立花八徳
- 立花十徳
- 立花十体
- 祝言に嫌うべき事

卷八 「立花秘伝抄 五」

- 立花細工の事(一図)
- 草木水あくる事
- 花瓶の事(一図)
- 込の事(一図)
- 床前の事
- 下指の事
- 立花見様の事
- 立花習いようの事
- 立花名目 訓解
- 心の事
- 正心の事
- 副の事
- 請の事
- 見越の事
- 流枝の事
- 前置の事
- 胴作りの事
- 控枝の事
- 立花腰の事
- 水きわの事
- 谷洞の事
- つや あしらいの事
- 意気の事
- 張弛の事
- 立花色の事
- 貴枝の事

以上のような内容になっている。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ②

「立華時勢粧」は次のような構成になっている。

「立花時勢粧 上・中・下」 (3冊)

「立花秘伝抄 一〜五」 (5冊)

「立花時勢粧 上・中・下」には118の立花図が収められ、花形真行草の説明が添えられている。

「立花秘伝抄 一・二・三」は立花に使われる花材解説だが、立花での扱いが詳しく述べられている。

「立花秘伝抄 四・五」は立花の基本や心得など、最も大切なことが詳しく書かれている。

ではまず「立花時勢粧 上」より「立華時勢粧序」「真行草の図」「除心真行草の事」「砂物真行草の事」に書かれていることを紹介する。(文中の句読点は、読みやすいように筆者が加えた。)

立花時勢粧 上

立華時勢粧序

およそ瓶に花を立て楽しみとなすわざ、もろこしにもありと聞けど、法を定め掟を守りて指す事なし。和朝には昔日 この道に長じ、東山音羽の桜に苔むしをそがせ、西谷や高雄の紅葉には晒木さらきを削らせ、あるは小しだのみどり

を夏ばせに映し、あるはかるかやのおぼつかなく水仙のざれたるもおかしく、おのれおのれが出生直ちにかんがみ、うつり行く自然の気色けしきを瓶にうつして、翫もてあそびたまいしより、代々の樂となりたり。その風景のたえなるにいたりては、春の山の笑る顔あはれに詞の花のこどぶきを立て、あるじの目をよろこばせ、秋の山の愁うれえたる形に、

真之花形



第一図

立花 松直真

真の花形

松竹梅 檜

熊笹 ひさかき 枇杷

柘榴

伊吹

水仙

なき人の作善を追うて仏の道うとからず。されば瓶上に南山の美をつくし、砂鉢に西湖の風色をうつす。ちからをいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む。至らずして千里の外の勝景をみることに、その術諸芸の及ぶところにあらず。いでやこの道に名ある人。くれ竹のよよに絶えず、松が枝のおりおりに出て、形体めづらなる風俗を立て初めしより、瓶の下水を味ふるもの数多になりきて、予も又花に遊ぶこと久しく、且つはたつきなき山路にたどり、かつはしるべなき野辺に迷い、好めるを友とし、優るるを師として、多問多聞を恥じず、それよりこのかた諸師の秘伝と諸書奥義と、鍛錬つくして、新たに風体を指し出せり。然れども古法の格式草木の出生、もとより背くことなし。今ここに図する所の百二十瓶四時の景物に随いて、会をなし、諸人庭に查いれし席の花形なり。これ人の目だつべき色もなく、心とどむべきかもしも侍らねど、よしや笑草。四方にはびこり、根ざしのかれぬよすがともならなむかしと、名付くるに時勢粧の字を仮り用いるものなり。

貞享五年弥生日

真行草の図

儒書に云う、真は人の正しく立つが如く、行は人の行くが如く、草は人の走るが如し。立花なおその意義をもつてこれを名するもの乎。

瓶に花を立るに真行草の三つあり。古書に序発急の花といえり。古人松を切り花を折って瓶



第二図

立花 松除真

行の花形

松 柳 梅 柘植 伊吹 椿 熊笹

枇杷 檜 小柏 嫩

にむかうより、まず真の花形をあらわし、それより真を行にやつし、行より草の花形を出して、七つの枝を定め、またそのほか数多のならいを立つ。万木千草の出生をかんがみ、一草一木に立様あることを伝え、野山水辺おのづからなる景氣を居所に写して樂とす。今ここに三瓶を圖して初学の教とす。立様口伝外にしるすものなり。

真の花形(第一図)

行の花形(第二図)

草の花形(第三図)

右真行草の三瓶、古人の法式を守り、代々指し来る所に、中頃名師鍛錬工夫の妙用よりその一を又三つにわけて、真に三品、行に三品、草に三品、九品の花形を出す。然れども秘して代に伝えず。まれに相伝する人ありて真を立れども行を立てる事かたく、行を指せども草の花形指こと難し。まして九品の花形ことごとく得る人はなかるべし。されば古人のいわく、ある時の花形は如来のごとく、菩薩のごとく、金剛力士のごとくなるべしといえり。花道のみにかぎり

ず、諸道諸芸もかくぞ有るべき。伝え聞く、高野大師は筆の道に通達ましまして、皮肉骨の三筆をふるい給いしによりて、和国第一の筆妙なりと云えり。立花真行草も又かわる所あるまじや。今ここに図する所の九品の花形、秘伝たりといえども世にひろむるものなり。立様口伝外にしるしぬ。

第三図

一株砂物 松真

草の花形

松 蔓梅擬 伊吹 晒 柘植 嫩 檉木 熊笹 菊



立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ③

立花時勢粧 上 (前号の続き)

直心立の内真の花形 (第四図)

直心立の内行の花形 (第五図)

直心立の内草の花形 (第六図)



第四図



第五図



第六図

(ここでは解説文がないので、上の3図は「立花秘伝抄 五」の「極真立」で掲載します。)

除心真行草の事

除心のきしんの内真のまの花形と云うは、直心すくしん立てをやつして、心を横へのき、梢こずえの上へ回かえして、除心とも正心立とも名付けた。副まへおき、請うけ、見越みこし、流枝ながし、前置まへおき、長短高下の出し所、直心立とかわる事なき事は、古来仏前対の花にかならず用い来る花



第七図

立花 木蓮除真
除真立の内真の花形 富春軒
木蓮 伊吹 松 栢植 躑躅 小菊
檜木 枇杷 著我 要

形なるゆへ。卓、香炉、鶴亀の荘厳、定法あるにまかせ、立花もこれに随いて、流枝、前置の長さ、その外寸法式ある事なり。然るに常の花にもその式法を守りて人におしゆるの初めとするより、あまねく立花の風俗となれるものなり。

除心立の内真の花形(第七図)

除真の内行の花と云うは、前の花形をやつして、異曲さまざまにしんをくるはせ。六つの大枝の長短高下、心に随いて、くるいたる時は、花形風流にて、ひときわ花麗に見所おおく、作意も働きて、おのずから珍しき姿も出来るなり。往昔のすき人むつかしくあしらいかたき心をあつめ、鍛錬工夫をなし、いろいろの花形を指し初めて、代のたのしみへとす。所謂水際除のしん、請流枝立、中流枝立、左流枝立、内副立、流枝持の花、これを行の花形という。この心をもつて見る時は、古来花に自由をなして、さまざまの景気をかえ、人の心をなぐさむるの使とするものなり。然るに田舎には定法にかかわりて、自由を指し得る事なし。今ここに

図してその風体を知らしむるものなり。これ私
の作意にはあらず。近來ひとの版行せしむるの
書に多くこれある所なり。

除心の内行の花形 請上り立 (第八図)

同 水際除 請上り立 (第九図)

同 流枝持立 (第十図、第十一図)

同 内副立 (第十二図、第十三図)
同 請流枝立 (第十四図、第十五図)
同 中流枝立 (第十六図、第十七図)
同 左流枝 (第十八図、第十九図)

第八図

立花 松除真

除心の内行の花形請上り立 桑原次郎兵衛
これを立つ

松 梅 柳 栢 檜 樺 木 椿 嫩



注1~6 初版本では次の記述になっている。1 名師 2 おしえ 3 名目の 4 古人 5 近代は 6 名師の

除心のうち草の花形と云うは、行の花形より指出して心の除様定相なく、草木自然の形をそのままに、そのみ細工にかかわらず、或は直ぐ或は斜に、請、副、流枝、前置その外の大枝もまたかくの如く。長短高下の定法を離れ、請なふして請をあしらい、副なふして副をもたせ、六つの枝、ありと思えばなく、なきかとおもえば忽然と有りて、一枝も欠くる事なく、出生に背かず、法度をもれず、花形円満にして、しかも意気あり発生あり艶あり色あるを、草の花形という。これ格を離れて格にあい、習を捨て習にかなう手段なり。されば古代の名師工夫をなし、心をくだきて、自得の妙手より、指し出したる形にして、立花の骨髓これなるべし。近代の人、この花形を指し得んことを願えども、従来の手癖離れがたく、又は七の法式に自縛せられて、いつも同じ花形のみにて、過ぎ行くこと。例えば鑄型をもつて瓶を鑄るに、出来不出来あるといえど、瓶の形は変わる事なきがごとし。名人の花と云うは、十度二十度指すといえども珍しき一手あらずという事なし。されば真行の花は指し得るとも、草の花形にいたりては、指

す人まれなり。師を尋ね域に至らずんば、この妙を得がたかるべし。仮に図をしるして爰に書を略しぬ。

除真の内草の花形（第二十図～第三十図）

※省略した絵図は後の関連項目のところで掲載予定。



第二十図

立花 梅除真

除真の内草の花形 桑原次郎兵衛

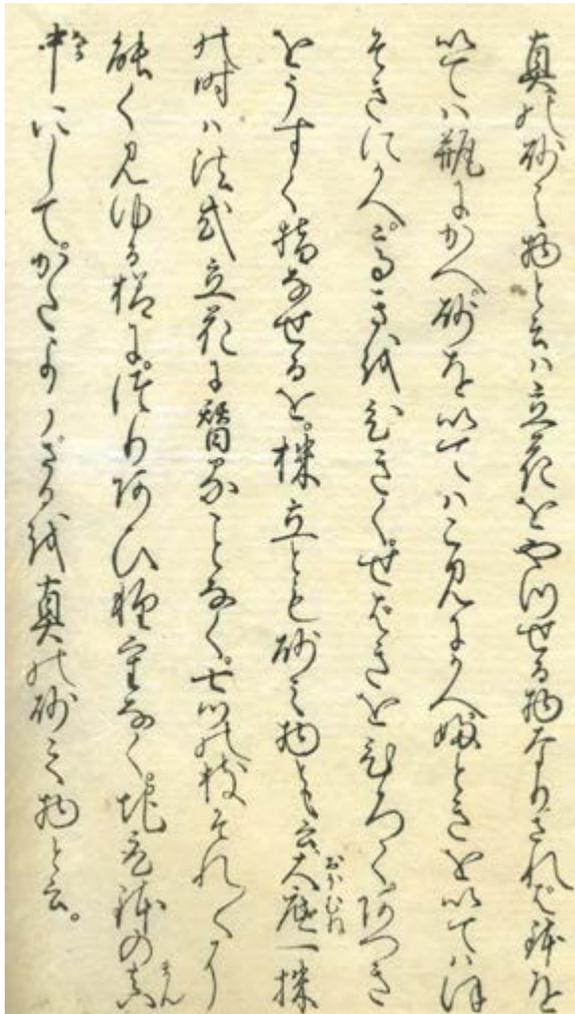
梅 松 柳 椿 水仙 枇杷

「立華時勢粧」の文章

今月号で紹介した「立華時勢粧」の文章が、元の木版刷りではどのよ

うなものかを知っていただくために、初めの段落の部分を転載してお

く。どうぞこの頁をめくりながら、読み進めてみてください。
例えば「を」の字だけ見ても、三つの字を使い分けている。



立華時勢粧りっかいまよすがたを読む ④

立花時勢粧 上 (前号の続き)

砂物真行草の事

真の砂の物と云うは、立花をやつせる物なり。されば鉢をもつては瓶にかえ、砂をもつては込こみにかえ、太きをもつては細きにかえ、高きを低く、狭きを広く、厚きを薄く指しなせるを、株立とも、砂の物とも云う。おおむね一株の時は法式立花に替わることなく、七つの枝それぞれによく見ゆる様に、つりあい軽重なく、地取り鉢の真ん中にして、かたよらざるを真の砂の物と云う。

行の砂物と云うは、元来一株かずなる物を、二つに割わけ、中をあけ、小心二つ、前置二つ、心のかたを男株おかぶといい、請うけの方を女株めかぶという。法式大様前に同じく、両方軽重なき様に、地取り鉢に随したがいて、苔晒木こけしめれ鮮あざやかにして株組かぶぐみ、取り合い、はづみあり、意気あるところを専らにして、景気するどに花形勢力風流なる様に立つべきものなり。取り組み細工等外ほかにするす。

草の砂の物と云うは、一株かず二株、三株はまれなり。二株たりといえども、小心、前置、一方にのみ用いる事なり。但しただ一方はあしらい有りても然るべし。女株軽き時は、男株の方より長き枝をだし、或は心のすえ様にて軽重をはかり、請かと思えば流枝、控かと思えば副にして、或

は大枝をもつて小枝にかえ、小枝をもつて大枝をあしらい、七つの枝一つも欠ける事なく、意気、はづみ第一に、艶びんあり、色あり、異曲風流

第三十一図

一株砂物 芦真
砂の物の内真の花形 専定寺
芦竹 百合 小菊 桔梗 熊笹
仙翁花 杜若 著我



に勢つよく、花形一面に束て見る時、釣り合い片落ちなきを草の砂の物という。たとえば文字の形のごとし。唐よう、日本よう、様々の流を書きやつすといえども、理に叶い、道にいたりぬる人は、読むこと安くして、頓にその理を悟る。立花もまたこれに同じ。

砂の物の内真の花形(第三十一図)

同行の花形(第三十二図)

同 草の花形(第三十三図)

立花時勢粧上の終

ここまでが「立花時勢粧 上」の内容である。続く「中」、「下」には立花図がそれぞれ45図、40図掲載されているが、「下」の最初に秘曲の図の名称が22個書かれているのみで、文章による解説はない。

立花時勢粧中(立華時勢粧 卷二)

雑体の図(45図)

立花時勢粧下(立華時勢粧 卷三)

秘曲の図(40図)

「立花時勢粧 上」の文章を紹介してきたが、ここでその内容を少し振り返ってみよう。

「立華時勢粧 序」は立花の素晴らしさを讃えた名文だと思ふ。立花の技を身につけると同時に、この文章にあるような雄大な心の有り様を大切にしていきたい。



「瓶上に南山の美をつくり」
 「砂鉢に西湖の風色をうつす」
 「ちからをもいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む」
 「至らずして千里の外の勝景をみるごと、その術、諸芸の及ぶところにあらず」
 「古法の格式、草木の出生、もとより背くことなし」
 「今ここに図する所の百二十瓶、四時の景物に随いて、会をなし、諸人庭に香いれし席の花形なり。これ人の目だつべき色もなく、心とむべきふしも侍らねど、よしや突草。四方にはびこり、根ざしのかれぬよすがともならなむかしと

名付くるに時勢粧の字を仮り用いるものなり」

居ながらにして、自然の勝景を味わえる「立花」の術は、諸芸の及ぶところではないと言いつつ切っている。同じ頃活躍

第三十二図

二株砂物 棕櫚真
 砂の物行の花形 西村松庵
 棕櫚 百合 晒木 松 苔 嫩 杜若
 小羊歯 柘植 苔木

した尾形光琳の杜若図屏風なども、「居ながらにして、自然の勝景を味わえる」素晴らしい術だと思いが、「立花」には、実際に山や沢から集めた木や草花でつくる「生の」美しさがある。たしかに鍛錬をつくした人の立てた立花には、諸芸の及ばない「格」がある。

掲載されている百二十瓶（実際は百十八瓶）の立花図については、実際に「会の席」で立てたものだとのこと。目だつ色もなく、心に止めるべきものもないが、「立花」が廃れてしまうことのないように、あえて「時勢粧」の字を用いて記録を残すと書かれている。「立花」の神髄を究める人によって、さらに磨きがかけられてゆくことを懇願されていたのだと思う。

「真行草の図」では、立花には真・行・草の花形があり、またそれぞれに真・行・草があり、すなわち九品の花形があると書かれている。

何が真で、何が行で、何が草だ、とは書かれていないが、図に示されているように、次のように覚えておきたい。

真の花形とは直真のこと。
 行の花形とは除真のこと。
 草の花形とは砂の物のこと。

「真」は人の「立つ」、「行」は人の「行く」、「草」は人の「走る」のと同じだとしている。

「古書に序・発・急の花と云われる」

「昔から、如来のように、菩薩のように、金剛力士のようにと云われるが、花道だけではなく、諸道諸芸もこうあるべき」

「高野大師（弘法大師空海）は筆の道を極められ、『皮・肉・骨』の三筆をふるわれたことで、日本一の書の達人と云われるが、立花の真行草すべてを立てる人こそ、立花の達人である」と述べている。



真の真行草は絵図のみで解説はない。続いて、行の真行草、草の真行草については絵図と共に文章でも述べられている。ここで注意したいのは、九品の花形の解釈については、凡その基準を示すにとどめ、あまり具体的に「こうなったら何の何形」と云っていないことである。

真・行・草のそれぞれの持つ意味合いをよく理解することが大切で、具体的な手がかりを僅かに示すことで、私たちが自身が立てる中で理解しようとするように導いている。これはとても重要なことで、絵図も含めてそのまま鵜呑みにせず、自分自身で真理を得るべき、との教えなのだ。

第三十三図
 二株砂物 晒木真
 砂の物草の花形 桑原次郎兵衛
 晒木 松 芍薬 杜若 要 小菊
 著我 撫子

立華時勢粧を読む ⑤

立花秘傳抄 一〜五

「立花時勢粧 上中下」に続く「立花秘傳抄 一〜五」の五巻は、立花の花材解説の二巻と、立花の基本や心得ほかの解説の二巻からなっている。ここでその内容を紹介してゆくにあたり、膨大な量の花材についての解説は後回しにして、巻の順番を変えて、立花の基本や心得から先に紹介したいと思う。

立花秘傳抄 四

七つ枝の事

往昔、花を指し初むるに法式あり。いわゆる心、正心、副、請、見越、流枝、前置（胴、控枝これを除く）これを七つ枝と名付く。その理に至りては、最上の秘傳にして、世に知る人まれなり。然るに近世、説々まぢまぢなりといえども、正理にかなわず。その詞にいわく、万物皆陰陽五行より、出ずという事なし。まして草木出生、陰陽五行の七つを離れず。さるによつて、七つと極めたりと云うは、天文家の謂なり。或いは遠くこれをいえば、千早振る神国、天の七代を

かたどりて我朝の翫びなりといえるは、神社宮司の詞なり。又易に曰く、七つは少陽、艮の卦にして、万物終わり始まるの数なりと云うは、儒者の譬なり。広くこれをいわば、仏出世して法を説き、浄土を莊嚴し、行をなし、作善を勤め、忌日を弔うに、皆七つの数をもつてす。さ

るによつて、立花は第一の手回けなりと云うは、釈氏の説なり。これ皆諸道の七つをかりて、立花の七つに對用したる物なり。いまだ知らず、別に花道の上に、七つの理あり事あり。能々工

夫をなし、師に尋ねてこれを明きらめずんば、立花に自由を得る事。努々、あるべからざるものなり。



②



③



④
七つ枝が図で示されている。直心の場合、正心とは言わず「心隠」と呼んだ。図②③
立花道具の図。針金や水抜き器(左上)も使われていたのがわかる。

対の花真行草の事

極真ごくしんの対の花は、若松の直心すくしん立てなり。
指し合い法度を選び、祝言の意得せんごう専要せんようなり。
一方、伊吹の胴に椿の前置ならば、一方は
枇杷びわの胴につげの前置などかえるなり。
その他、心、正心、副、請、見越、流枝は、
両瓶ともに同木同草にして、木つき枝ぶり
花形よく似るように指すを、真の対と云う
なり。

行の対と云うは、心は笠松のきじんの除心のきじんなり。
これも胴、前置の二所をかえて、残りの大
枝は、同じように指すべきなり。

草そうの対と云うは、心こころ（一方松の直心、一方竹心、
松と椿、桃と柳、松の一色と竹心、鶏頭と竹心。）
右の外いろいろに心をかえ、正心、副、請、
流枝五つの内にて、三所ばかりにて、対す
るを草と云う。残りの枝、同じからぬよう
に立てるなり。この三対、古来の法式なり。



第八十図

第七十九図

立花時勢粧下 秘曲の図より

第七十九図

左真の対の花 桑原正栄
松 柳 梅 伊吹 椿 柘植
水仙 熊笹 枇杷 檜

第八十図

右真の対の花 富春軒
松 柳 梅 檜 柘植 伊吹
水仙 椿 熊笹 嫩 枇杷 檉木

第八十一図

左行の対の花 中川常意
松 山吹 躑躅 杜若 椿 伊吹
小羊齒 小菊 要 檜扇 柘植

第八十二図

右行の対の花 高橋吉兵衛
松 山吹 躑躅 杜若 柘植
熊笹 小菊 要 柏 檜扇

第八十三図

左草の対の花 寺田八郎兵衛
檜 苔 梅擬 松 菊 小菊
熊笹 柘植 嫩 檜扇

第八十四図

右草の対の花 寺田清兵衛
松 苔 梅擬 鶏頭 夏蘆 菊
小菊 杜若 檉木 枇杷



第八十二図



第八十一図



第八十四図



第八十三図

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑥

立花秘傳抄 四 (つづき)

松竹梅三瓶の事

松竹梅の三瓶は、祝言の花にして、三瓶のな
らべよう古來說々あり。まず一説には

竹中

松上座

梅下

かように並ぶるころは、松に相あいづついで、竹
は目出度めでたきものなれば左に立てる。又云う、松
竹梅の言葉の序をもつて、座をさだむるとい
り。

梅二

松一

竹三

又かように並ぶる心は、梅は諸花の長にして、
春に先だつゆえ、花の兄あにとも云う。さるによつて、
左に立てるとなり。又云う、松竹は四季ともに
用う。梅は当季の珍花なる故、竹の上に立てる

ともいえり。当代多くはこの儀にしたがう。

松竹梅三瓶の時、松竹の方にも、梅をつか
いて苦しからず。中央は直心なり。梅は除心にて
も苦しからず。胴、前置の二色いしうは、三瓶ともに
替えず。一方の花あつき時は、一方かるく立つ
べし。

松竹梅の三瓶を、一瓶によせたる時は、心は
松。請は竹。副、流枝には梅を用ゆ。直心にも
除心にも立てる。然るに予よこの花形かぎようのころを
取て、松のたぐい一色、竹のたぐい一色、梅の
たぐい一色、この三色をもつて外の草木をまじ
えず、あらたに花形を指し出して、図にするす
ものなり。これ古人の指しもらしたる花形にし
て、真の松竹梅とも、名付くべきものか。

棚の上の花は(胴束どうづかという)長たけひくく、横長く、
景気すさまじく、たとえば心しんは大木を見るがごとく、
流枝は千丈の松、岩上によこたわるがごとく、
ちいさき物を大に、景気をうつす。これ

一つの習なり。

立花陰陽の事

夫陰陽わかれて、天地となり、人その中に生
して諸道諸芸を翫あそぶに、陰陽そなわらずと云う
事なし。まして立花において。草木出生の道理
をかながえ、野山藪沢の景気を瓶上びんじやうにうつすに、
陰陽を離る事なし。これ立花第一とする所なり。

土は本陰なり。草木は陽気を請けて、発生し
たる物なり。土をはなれば、必ず枯る。水を
もつて養う時は、陰陽和合して枯れず。然れども、
かりなる物ゆえ、久しからず。又冬の花を、室むろ
へ入れて陽気をかり、夏の花を井に釣りて、陰
気をか。されば陽中の陰花あり。又陰中の陽
花あり。陰ばかりにては咲かざるゆえ、世上に
黒色の花なき物とぞ。

古詩に

化工不隔銅瓶水 一夜芙蓉三四花
かこうはへだてずとうびんのみず いちやふようさんよんか

古歌

立花たてはなの うき世の水に ひたされて

命はきれて きれぬ物かは

居所によってこれをいえば、明かり

の方を陽にとり、珍花残花、主居客居

の立て様あり。理をもってこれをいえ

ば、瓶の内に陰陽ありて、ささぬ草あ

り。形をもってこれをいえば、きおい

てかたきものは陰なり。なびきてやわ

らかなる物は陽にして、花形を調ふる

ところなり。数すうをもっていう時は、調ちよう

は陰、半はんは陽。これ祝言不祝言をわか

つ物なり。赤白しやく円方、長短軽重、左右

高下、みな陰陽にして、一瓶の花を成

就する所なり。

備考

「松竹梅」についての文中の「左」は向かって右。また、「序」とは順序の意味。

「化工」とは造物者のしわざ。天のしわざ。

数の偶数調(陰)、奇数半(陽)。

※文中で「真の松竹梅」と名付けられた立花図。松、竹、梅の類いだけで立てられている。

第九十六図

立花 松除真

松竹梅 富春軒

松 梅 竹 熊笹



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑦

立花秘傳抄 四 (つづき)

十三ヶ條法度の事

大輪なる花のたぐい短く指すこと。

葉のある物を花ばかり指すこと。

花とその葉と添えたる間に、余の物を指す事

同じ物を二所に指す事。但し色替わりては苦

しからず。

草にて木をつつみ、木にて草をつつむ事。

たけくらべの事。(一方除て上るこずえの同じき

は苦しからず。)

枝葉の水につかるようになる事。

切枝とて十文字に見切る事。

本きれの事。

指枝とて面へ長く出る枝の事。

壁枝とて後ろへ長く出る枝葉の事。

後ろより前へまわる枝の事。

瓶の口よりさがる枝葉の事。

以上

古代十ヶ條法度の事

ぬきとをし

主さす枝

ふくめんの枝

なけきの枝

見越の枝

胴ぎりの枝

両頭の枝

いだく枝

かさなる枝

引張枝

以上古き板書に出たり

右の外三十六ヶ條伝授の法度有定名目の法度

共名付く

⑦ 同意にて嫌うべき枝の事 外これを略す



⑦ 同意にて嫌うべき枝の事

外これを略す

立花八戒

花白衣にて指事

庭木みだりに所望の事

他流の花を誹そしる事

主ある花形盗みて指す事

花を指すを後ろに立って見る事

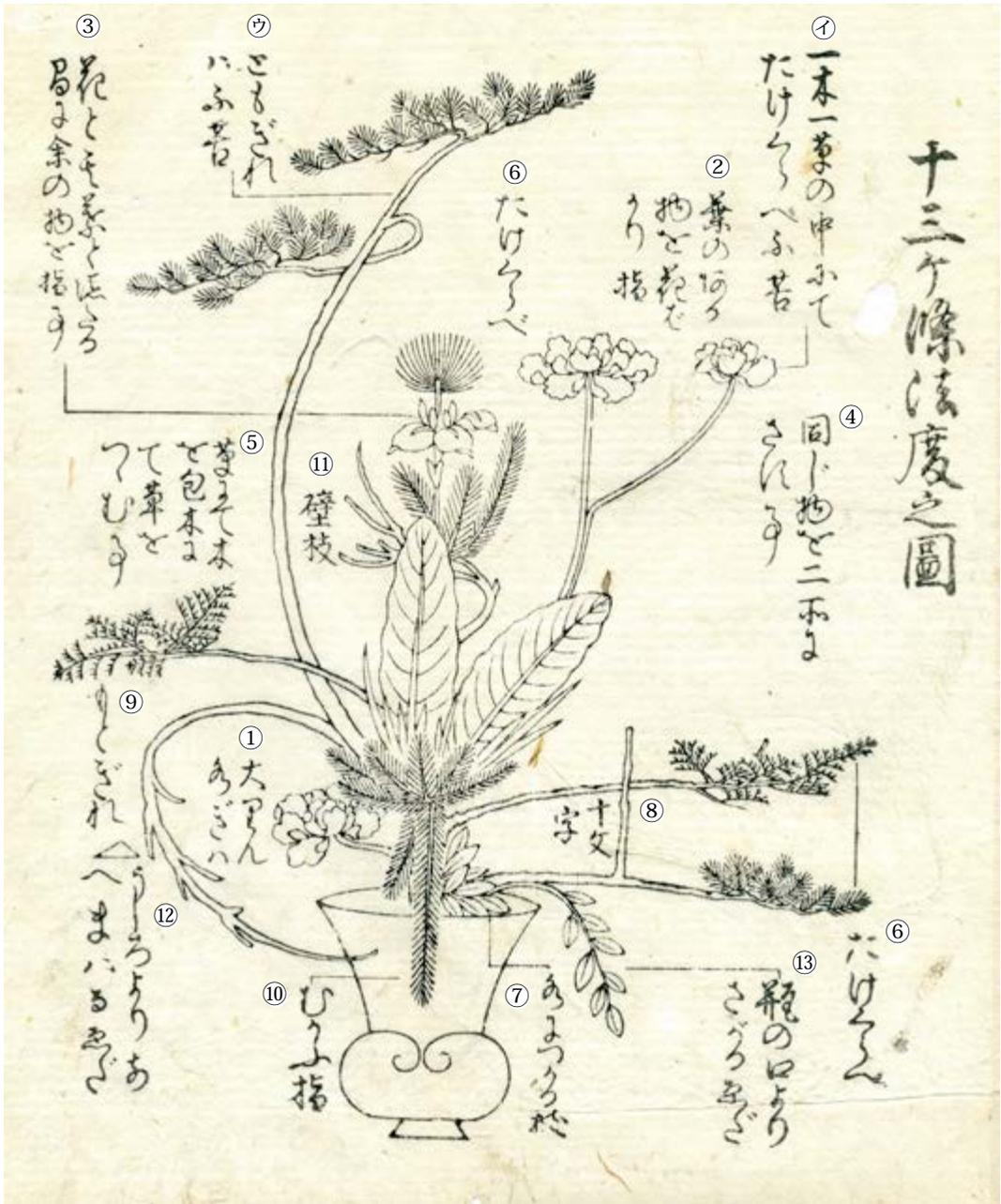
花礼儀なくて見る事

人の花率そつじ爾になおす事

心花にあらざる事

(8 頁へつづく)

十三ヶ條法度之圖



十三ヶ條法度の図

- ①大輪水ぎわ。
- ②葉のある物を花ばかり指す。
- ③花とその葉と添えたる間に、余の物を指す事
- ④同じ物を二所に指す事。
- ⑤草にて木をつつみ、木にて草をつつむ事。
- ⑥たけくらべ。
- ⑦水につかる枝。
- ⑧十文字。
- ⑨もとぎれ。
- ⑩むかふ指し。
- ⑪壁枝。
- ⑫後ろより前へまわる枝。
- ⑬瓶の口よりさがかる枝。
- ① 一木一草の中にてたけくらべへ苦しからず。
- ② も切れば苦しからず。

立花十徳

卑いやしうして高位に交まじる

花に他念たねん無し

衆人愛敬あいきやう

語らずして友と成る

草木の名を知る

席上常に香かばし

朝暮風流

諸惡離別りべつ

精魂養性

事つかえずして仏縁あり

立花十体

正風体 真の花をいう

幽玄体 除真立をいう

景曲体 砂の物をいう

野沢体 草花立をいう

池中体 水草立をいう

山頭有草体

卑交高位
花無他念
衆人愛敬
不語成友
知草木名
席上常香
朝暮風流
諸惡離別
精魂養性
不事有仏縁

山下有竹体

枯木強力体

一色体

乱曲体

右立花八戒、十徳、十体、ある師家秘書を写してこれを記す。

五節句の花、並びに十二月に用うべき花、目錄あるといえど、花の盛り遅速ありて、時節にたがい、又所によりて、まれなる草木もあれば、一応には定めがたし。とかくその時節相應の花、所々の珍しきをもつて立つべきなり。

祝言に嫌うべき事

一草一木。一花一葉。六花六葉。四花四葉。四草四木。末のとまりたる物。枯れたる枝葉。苔晒木。名のおしき物。同釋教の名ある草木を嫌う。

茶会の花ならば、六花六葉、四花四葉、指し

ても苦しからず。又貴人高位より給わる花ならば、一花一葉にても立つべし。花の数多くとも、残さず指すものなり。

寺院の花には、釋教の名ある草、祝儀に嫌わず。雁足などは、古来より嫌う。外これになぞらえて知るべし。

立花にかつて用いざる物。香りのあしき物いばらのたぐい、雑木、雑草、食物の類いなり。わたましの花に、檜ひのきという名あしけれど、又火のくと云う義理をもつてこれを立てる。又あかき花、あかき葉、赤き実のたぐいを、いむといえども、水木ばかりは水と云える名ありとてこれをゆるす。火のくと云うも、水木というも、むつかしければ、ささぎさざざらんにはしかじ。

古き花書に云わく、婚礼の花には、赤き花を賀むかのかたにさし、婦のかたにては、白き花を指すというは、夫婦陰陽の義によるか。蓋し赤きは陽にして未さかえ、白は陰にして不祝儀なり。婚礼の夜も色なおして、赤き衣服を用いる時は、婦の方とて、赤きを用いざるべけんや。

(釋教・釈教、釈迦の教え、仏教。蓋し…まさしく。)

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑧

立花秘傳抄 四 (つづき)

立花細工の事

或人の云、立花は山木野草のおのづからなる景氣を瓶にうつすを至極とす。然るに木をねぢ、草をためて立てる事いかげぞや。されば木をねぢ、草をたむるは、おのづからなるすがたをうつさんがため也。細工をしても細工と見えざるようにする時は、細工にあらず。

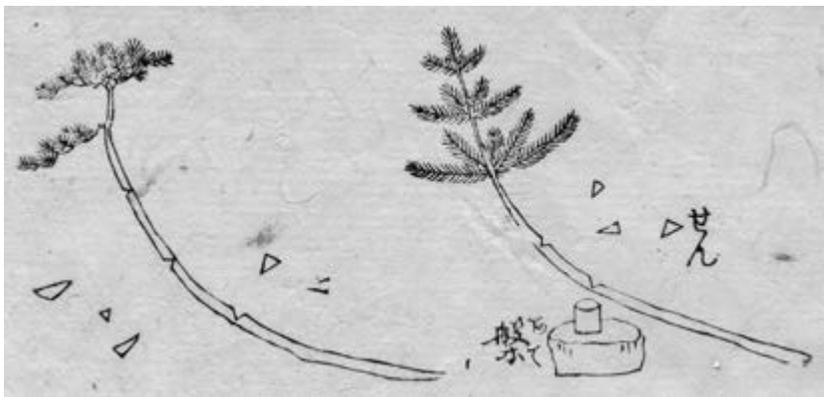
ゆがみたる見木を直になさんと思わば、内より鋸にて七分切り、三分残してくさびをかふ時は、曲がりたるものもすぐになり、すぐなる物も曲がるなり。木のおれやすき物は、火にあぶりてせんをかふべし。

心の除きのきわより込入りまでを、節もゆがみもなきように能くよけづるべし。正心、副請、流枝、控枝、同前に削りて、少しもすぎまなきように立て合わせる時は、花きれいに出来、かこいも入れず、水ぎわもほそくなりて、下草自由につ

かわるる物なり。

松の葉はふのりを引き、わらにてまきて、葉をふせ遣うといえどさのみ好まず。

明日の花ならば、松、いぶき、黄楊、枇杷などは、葉も見木も一夜水につけて用いる時は葉色かわらず。



見木に枯れ枝、節など有るとも、あまりきれいにけづるべからず。出生の景氣うするなり。

万よろずの小枝は油火にてやき、ねぢたためにして水へ入れて能くひやす。あたたまり有る時は、ためもどる也。

草のやわらかにほそきをたむるは、心こころをしづめ手の内にてたむる。心いそぐ時は、かならず折るなり。

晒木、常は瓦の屋根に置くべし。苔は板家の日影に置くべし。少しの間は紙にて巻き置くべし。晒木色のあしくなるは、あくを煎じて洗い、炎天にほすべし。

松のつぎめ見ゆる時は、松やにをもつてつくろい、又蠟にてもつくろう。又松の葉あかくなさんと思わば、すおうをせんじて染めるといえど、さのみ好むべからず。

針金をやわらかになさんとおもわば火に入れてやくべし、それをまたかたくなさんと思わば小刀のむねにてしごくべし。

草木水あぐる事

蓮、こうほね、水あおいは茎を結び置いてその下より切るべし。

紫藤は夜半に切つて水深くいけ置くべし。又藤は切るとそのまま遣うべき葉ばかりをのこし、残りはもぎていくるなり。又根をたたきひしぎて酒につくる。白藤は水あげやすし。花、物にさわれば色あしくなるなり。

竹ほそきは早く枯れる。三年四年竹をよしとす。又切つて根をやくべし。又上の節をぬきて水を入れる。笹しおれたる時は酒を吹く。

竹草は夕に切つてよし。仙翁花、雁緋は日盛ひさかりに切つてよし。水をかくればかえつてしおる。一切の花、充分に開きたらば水をはなして箱に入れてよし。杜若、芍薬、菊など五里十里の遠方へ遣わずに、箱に入れてよし。水木、梅もどきは、切つてはやく葉をとらざれば実しおるなり。室咲きの花のたぐいかならず水をかくべからず。

花瓶の事

瓶は仏在世に舍利仏、土器を二つ取り合わせ、諸花を生けたる故、瓶の字、瓦に併せると書くと云えり。

花瓶図を考えるに、唐に花瓶と名付くる物なし。今日本に用いる所、唐の酒器なり。古代は花形ちいさきゆえに、瓶もちいさく、近代は花おおきなれば瓶も又大きなり。込入りのふときを用ゆれば、水ぎわほそく指しよきなり。

古代より耳口、菱、角花瓶のあしらいとて、角又は耳の上へ下草を出しかくす事を嫌うなり。

草の心には花瓶ちいさく、木の心には大きなるを用うべし。

夏の花には瓶に水うつ事有り。但し地文あるにはうつべからず。

貴人より花瓶出さるる時、焼き物又はから物ならばふとき心、おもき晒木苔を用うべからず。花もかろく立てる。是を花瓶あしらいと云う。耳のなき角花瓶ならば、角を前へ取るべし。



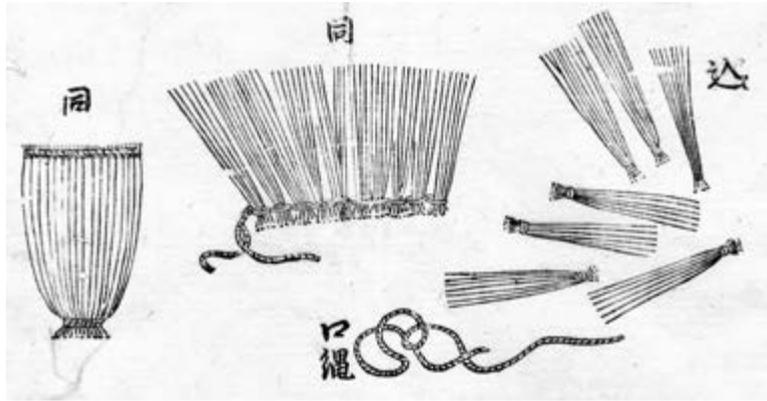
床に花台をなおさば、前後は畳の目をかぞえ、横はたたみの筋を見合う。真中は懸物の折釘を、定法にして花台をなおし、さて花瓶をおくべし。近代は花瓶風流をつくす。古代は瓶に景多き時は、花に心うすしとて地紋あるだに是を嫌う。誠に花に大切なる心、さもあるべき事なり。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑨

立花秘傳抄 四 (つづき)

込の事

込の高さ、冬は瓶の口より二分ひくく切るべし。夏は三分、草花に水をよくあげんがためなり。



ふとき物さす時は、少しやわらかにしめ、ほそき物にはかたく結うべし。緩急の境、よくわきまうべし。

わらのはかまをとり、真中まんなかより二つに切り、切り口を上になし、結び目の上を、つよく打つて、つよくしむべし。

床前の事

立花、初めての方へ立てに行く時は、床見申度よし、兼ねていいつかわし、方丈書院、仏前床の高さ広さ、奥行き左明かり、右あかりを、よく見立て、懸けものかけさせ、いかなる祝儀又は客の名字をも尋ねて、万指よろずし合いなき様に指すべきなり。

床ふち高きは、花台ひくく。おとしかけより、心はひくく。前置、流枝、床ふちより、前へ出すべからず。後ろへ枝葉さわらず。横は張付へかまわず。床ふかくは、花形まろく、床浅くは、花形ひらめに指すべきなり。

掛字、懸絵、よく見ゆる様に、花形取り組むべし。名印の所かくす事大きに嫌う。又懸物あ

しらいがたき時は、砂の物を用うべし。床の張付、人形生類のたぐいならば、同心得有るべし。

掛絵、草木にて風をもちたる気色あらば、立花にも、その風を請けてもたすべしと云えり。

いまだ懸物見ざる方へ行くならば、心を二本こしらえて行くべし。又柳梅もどきなどの、葉のなき物を用意すべし。

大床に、三瓶立てる時は、中は当季の花を、心に用うべし。

掛物、三幅対、四幅対の時、二瓶又三瓶のおきよう有り。

絵を請けて指す花、天神に梅、観音に柳、達磨に芦、龍に松、虎に竹、獅子に牡丹、ほかこれになぞらえて、作意有るべし。

上座の方へ、流枝を出し、請に珍花を指す。古来の法なり。然れども上は心より、下は水ぎわに至るまで、客賞翫と、意得て指す時は、花形風流に、作意多く、あらたなるを、花といふべし。

下指の事

客花ならば、下指したさしよくいたすべし。昼の客ならば、朝に行き、朝の客ならば、夕より指すべし。花おそく、客来るを待つ時節には、亭主氣遣うものなり。

下指は、十の内七八分ほどして、根じめあしらひなどを、残すべし。亭主方、見物ある時、あまり無造作なるも興なきものなり。

客花には、草花に限らず、充分に盛りなるを用いるべからず。前かたより、中びらきを立て置き、客来の時分、よくひろくように心得べし。

立花見様の事

花を見るに、礼儀を以てし、さて床前五尺ばかりに寄せ居て、先ず心、正心、副、請、見越、流枝等の、大枝の取り組みを、能く見て、又左右へ礼儀をのべ、その後床前へ近くより、胴前置、水ぎわの、こまやかなる所を見るべし、かならず、水ぎわ、又はうしろをのぞき見るべからず。

初心の花なりとも、かるがるしく見て立つべからず。指し合い法度有るとも、不審打つべからず。亭主所望するとも、率爾に、直すべからず。上手の花なりといえど、悪しき所なきにあらず。初心の花なれども、又よき所あらずという事なし。そのよき所を見覚え、悪しき所を見過ぐすべし。世人花を見て、あしき所をかたれども、よき所を語らず。その心花にあらざるがゆえなり。

立花習いようの事

花を習うに、先ず直心立をよく指し覚え、又除心、行草九品の花形、次第に修練すべし。凡そ事理じりの二つ有り。初学の時は、事を先にして理を後にすべし、瓶数重ねれば、おのずから指し合い法度を除くのぞべし。中此に至りては、事理両輪のごとくすべし。上手になりては、事を捨て、理を工夫すべし。然る時は、事理不二の境さかいに至りて、花に自由を得べし。

師に花の直しを請ける時は、瓶の水七八分に入れ置き、下草を用意して相待つ時、師来たり

て、褒美する事有れども直しを乞うべし。一手なおる時、今一手として乞うべし。師の法にて、二手よりはなおさず。尋ねる事あらば、人なき所にて問うべし。又は師家にあゆみをはこびて、その執心をあらわさざれば、師おしえざる物なり。

伝授と云うは、道の尊敬、芸の奥義なり。かるがるしく、人に語る事をなさず。金も用いざれば、瓦石に同じ。たとえば伝授したりとも、修行未熟ならば、何の益かあらん。師印可すというは、事理相応の時節を待つて、これをゆるす。初学の時は、下草多く、花形あつく、出物ゆるやかに指すべし。巧者になるほど、花きれいに、小体になるものなり。世人ここに止まりて、よしとおもう。これいまだ上手の位にあらず。必ずきれいになつむべからず。

一瓶の床花は、花形やさしく、手つま細やかに、見所おおきをよしとす。会の花は、花形風流に、目に立つように指すべきなり。上手の花は、下草多からずして景多し。これを薄うて厚しという。下手の花は、下草多く見所なきを、あつうてうすしと名づく。

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑩

立花秘傳抄 五

九品の花形立様の事

極真立

極真の立花は、祝言第一にして、心若松のす
ぐなるに、枝三段五段を用ゆ。心の高さ瓶に二
長半たひ。又は一長半。古来の説同じからず。近代
は三具足みつぐそく、さまざまに替わり、定法なきに似たり。
然れども蝋燭立ろうそく立ての高さに随したがいて、立様口伝あ
り。大かた仏前の様子、三具足の大小にしたが
いて、時よろしく立つべきなり。

心かくしは、かむろ禿松、芍薬、菊などの、かたち
丸き物。心に取りあいて、副を付くるに、たよ
りあり。ほそき物は、心のみきほそきゆへ、取
り合いあしきなり。草木にかぎらず、出生直すくな
る物、皆心かくしに用ゆ。一の枝と、心かくし
との間、一寸二寸、花形の大小によりてあくる

なり。心かくしは心の前を守りて、心に勢いを
あらする役の物なり。

だてたる物なり。右へ出る物、副より長きはあ
るべからず。

副は心かくしの本より、物にたよらせて、し
だれたるもの。又はやわらかなる物を用うべし。
心の松のこわごわしきに、取り合いよろしきが
ためなり。これ花形の右の方を守りて、心をそ

直心立之内真之花形



第四図

立花 松直真
直心立の内真の花形 桑原正栄
松 蔓梅擬 菊 檜 柘植 杜若
檜扇 榿木 小菊 夏はぜ 柏

請は神前にては、影向の枝といい、仏前にては手向という。かならず時の珍花を用い、出生上へきおいたる物を用ゆ。副のしだれたる物との取り合いなり。出し所は、副と流枝とを見合い、その真中ほどより出すなり。左へ出る物、請より長く出る物なし。これ花形の左の上を、よくまもる道具なり。

見越は、心かくしの後ろより、木高く立ちのぼせて、請の方へなびかす。見越は心の後ろを守つて、心の勢をつよくなす物なり。後ろへ出る物、これより長きはあるべからず。

流枝は松にかぎりたる物なり。煙がへしとも、香炉のぞきとも名づく。瓶の口二寸ほど上、後ろ角より一文字に出して、葉先を香炉の真中にとどむるなり。心すぐに、副なびき、請、きほいたるにより、流枝を一文字に指す。これ上の枝の取り合いよろしきがためなり。一瓶の内流枝よりひくく出す物なく、又水ぎわにてこれより長き物あるべからず。

前置の出口、流枝と同前。胴よりのうつりを請けて、左右へかたよらず、真向まむきにたて、瓶の口をかくさず、前へ出る物、これより長きは有るべからず。ただし見越と、前置とは、前後の釣り合いなり。

胴作りとは、心かくしの下より、前置の上ま

でを云う。これ七つの道具の外にして、花形の中央を守り、七つの枝を、よく養いそだつる物なり。

第五図

立花 松直真
直心立の内行の花形 桑原正栄
松 薄 躑躅 杜若 柘植 要 小菊
枇杷



控枝は、七つの枝の外なり。出し所は、請と流枝との真中より出す。請の方おもき時は、おもきものを用い、かるき時は、かるきを用ゆ。これ左右の軽重をはかる物なり。

直心立は、祝言第一の花なる故、仏前に立てるといへど、六花六葉、四花四葉、四草四木、雑木雑草、その外祝言にあらざる法度を守り、花形の格式すこしも背かず、草木きれいにすなおなるを用い、長高く、幽玄に指すを本意とするなり。古人曰く、真の花形と云うは、たとえば人の面のごとし。目の有る所に目有り、鼻有る所にはなのつきたるのように、いつもかわらぬ様にさすべしといえり。

直心立の花には、後ろに草を遣わず。草どめを流枝控枝の後ろにてとむることなし。これを山後に野を見るとき、嫌うなり。

直心立、行の花形と云うは、心は笠松なり。流枝は松を用ゆ。七つの枝の出所、前に同じ。

胴前置は、すこしくるわせてもくるしからず。

同草の花形というは、心に梅、海棠、梅もどき、水木、檜、鶏頭などの直なるを用ゆ。七つの枝、出し所前に同じ。草の心の時は、見越、流枝、前置草にても苦しからず。惣て心松ならざるを、草の花形と名付く。

【注記】

極真立とは直真立のうち真の花形のこと。ここでの七つ道具の解説は、極真立に限っての約束事が含まれている点に注意。

第六図

立花 鶏頭直真
直心立の内草の花形 桑原正栄（初版は富春軒仙溪）
鶏頭 柳 梅擬 菊 夏はぜ 擬宝珠
檜木 檜扇 伊吹



立華時勢粧を讀む ①

立花秘傳抄 五 (つぎ)

除心真の花形立よの事

除真の真の花形と云うは、心のゆがみたる計

りにて、大枝の出し所、さのみ直心立と替わる事なし。図にしるしてここに略す。先ず、心を立て、その次に正心を立て、副を付け、見越、請、流枝、胴、前置、控枝と、次第に指すべし。行草の花形に至りては前後有り。

(除心真の花形図はテキスト613号6頁参照)

除心行の花形立様の事

左流枝の立様と云うは、心の梢、請の方へ行き過ぎたる時は、副の方かるきにより、その時は左の方へ流枝を付けかえ、心と張り合いますなり。又心に草などのかるき物を立て、請にお



左流枝

第十八図

立花 松除真

除心の内行の花形 左流枝 筑摩九郎右衛門

松 晒 要 柏 杜若 百合 栢植

榎木 野春菊 著我



流枝持立

第十図

立花 松除真

除心の内行の花形 流枝持立 富春軒

松 苔 百合 仙翁花 著我 木槿

栢植 嫩 小羊齒 桔梗

もき物を立てる時も、左へ流枝を取りて、請と張り合わせて、軽重なきように立てるなり。

いするなり。但し心より流枝へのうつり、心得あり。

あしらい口伝有り。

流枝持の立様と云うは、心の梢、瓶にのせず、副のかたをおもくなし、請にかかるき物を立て、扱流枝は長く、おもき物を用いて、心と張り合

中流枝立と云うは、請の出所高く、流枝との間遠き時は中より流すなり。又心の除、副の出所、控枝のふりによりて、中よりもながすなり。

請流枝立は、心しだれ物か、又は心の枝、請の上へさがり、請を高く出す事ならざる時は、請をひくく指し、その下枝を長く出して、流枝をかねるなり。されば一本を以て、請と流枝を



同行之花之内 中流枝立

寺田清左衛門



同行之花之内 請流枝立

西村松庵

中流枝立

第十六図

立花 萱草除真
除心の内行の花形 中流枝立 寺田清左衛門
萱草 苔 松 桔梗 榿木 小菊
紫苑 著我 要

請流枝立

第十四図

立花 梅除真
除心の内行の花形 請流枝立 西村松庵
梅 苔 檜 水仙 千両 伊吹 榿木
枇杷 嫩

もたするゆえ、請流枝立と名づく。あしらいに口伝。

り副を付けるなり。あしらい口伝。

内副立と云うは、副の付くべき所に枝有り、或いは自然と副を持ちたる心有り、或いはみき異曲に狂いて、副のつかざる心には、心の内よ

請あがり立と云うは、心の除ひくく、水ぎわより五六寸上にてのけたる時は、請にはしだれたる物を用いて、正心のもとより出すべし。柳薄花つる、連翹のたぐいなり。あしらい口伝。

請正心立と云うは、心水ぎわより除たる時は、請あがりとて竹を立て、笹にて請をもたせ、竹にて正心をあしらう故、請正心立と名づく。しかれども、請あしらい有り、正心あしらい有るべし。笹のしだれながき時は、流枝に心得有り。



内副立

第十二図

立花 松除真
除心の内行の花形 内副立 中野小左衛門
松 菊 小菊 梅擬 晒 檜木 嫩
沢楮梗



水際除

第九図

請上り立
立花 松除真
除心の内行の花形 水際除・請上り立(請正心立)
松 梅 竹 水仙 柘植 ひさかき 檜木 枇杷
(請正心立)

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑫

立花秘傳抄 五 (つづき)

除心行の花形立様の事 (つづき)



左流枝立

第十九図

立花 薄除真

除心の内行の花形 左流枝立 林昌

薄菊 松 梅擬 熊笹 柘植 小菊

夏はぜ 小柏 著我

左流枝ひだりながし

真まことの梢こずえが請まねの方へゆきすぎた場合、副かたがわの方が軽くなるため、左の方ひだり(真・副の方)へ流枝をつけかえて、真と張り合いをもたせる。

また、真に草などの軽いものを立てて、請に重いものを立てる時も、左に流枝を出して請と張り合わせる。

前号の第十八図では松の真が中心よりも右へ伸びていて、さらに見越、請ともに右へ大きく出ているため、流枝は松を

先に紹介した七つの除真(除心)行の花形図(テキスト 613号、622号)は「立花時勢粧 上」から引用している。「立花秘傳抄 五」の文章にあわせて絵図を紹介してきたが、「立花時勢粧 上」にはさらに五点の除真行の花形図があるのでここに掲載しておく。



流枝持立

第十一図

立花 梅除真

除心の内行の花形 流枝持立 兼原次郎兵衛

梅 枇杷 松 柳 柘植 千両 椿

水仙 嫩 狗子柳

左に低く長く出すことでバランスをとっている。

今号の第十九図は逆勝手で、右に立ち上がった薄の真すずめに対して、請には重みのある松を立てている。請の松は枝先が中心近くへもどって真の軽さに配慮しているが、さらに流枝の松を真側（逆勝手なので右方）へ長く出して左右のバランスをとっている。

文章には左流枝にした場合の控枝の扱いについて書かれていない。流枝と交換で請の下に出すのが一般的な考え方だが、

もともと控枝は七つ道具（七つの役枝）からは外れており、

控枝の無い花形もあつてよいとも書かれている（後に紹介する立花名目の解説より）ことからしても、臨機応変に考えればいいだろう。

流枝持立ながしもちたて

真の梢を花瓶の真上にのせない（中心へもどさない）ために、副の方が重くなって請に軽いものを立てた場合、流枝に

重いものを長く出して真と張り合いを持たせる。

前号の第十図では松の真に対して松と吾木の流枝、今号の第十一図では梅の真に対して流枝には梅を伸ばし、さらに栢と松を添わせている。

中流枝立なかながしだて

中流枝立とは、請の出口が高い時に、流枝を中程なかなほどから出す花形で、真まきの除、副の出所、控枝のふりによつても中程から



中流枝立

第十七図

立花 松除真

除心の内行の花形 中流枝立 寺田八郎兵衛

松 晒 百合 枇杷 栢植 紫陽花

要 小菊 檜扇



請流枝立

第十五図

立花 柳除真

除心の内行の花形 請流枝立 谷久兵衛

柳 梅 松 千両 栢植 嫩 枇杷

水仙 狗子柳

流枝を出す。

前号第十六図ではおそろしく色彩的な考慮がなされて、萱草の真と見越に対して、請の枯梗を高いところから出して、請の下が大きく空くので、流枝の松を胴の中程から出して枝先を下けている。

今号第十七図では、真の形と、水際からうけるように出た控枝にあわせて、控枝の出口よりも高く、請のすぐ下から流枝を出している。

請流枝立

真が枝垂れるものだったり、真の枝が請の上へ下がって、請を高く出せない時、請を低くして、その下枝を長く出すことで流枝も兼ねさせる。これを請流枝立と云う。

前号第十四図では、今号第十五図では松がそれぞれ請と流枝を兼ねている。そしてその下に晒木や水仙の葉を水際からあしらいとして加えている点にも注目したい。

内副立

本来の副の位置に副を出すのが困難な時、真の内側に副をつける。

前号第十二図では真の松が一度外側へ下がってから立ち上っているため、副は真の内側に梅擬を出している。

今号第十三図では真の松の分かれ枝が前へ枝垂れているので、それを生かすために副は内側に出されている。この内副は大きく中心を越えて請の外側へなびかせた特徴ある形で面白い。

水際除

真が水際近くから除く。(文中に特に説明はない。)

請上り立

真が低い位置から除く時、請には枝垂れるものを正心の元から出す。

613号に掲載した八図も請上り立である。真の出所は高いが、梢が請の方へ張り出しているので、請に枝垂れるものを立てている。逆に副は上へはねあげてある。

請正心立

水際除の真で、請上りとして竹を立てた場合には、中心に立てた竹を正心と見なし、請正心立と呼ぶ。

前号の九図がこれにあたる。竹の前に正心あしらいとして水仙が入っている。大きく垂れた笹の内側に流枝がうまくおさまり、副の梅が立ち上り、控枝は省略されている。本来の請の位置に梅のあしらいがぞく。



内副立

第十三図

立花 松除真

除心の内行の花形 内副立 中野宗左衛門

松 苔 梅擬 菊 伊吹 柘植 小菊

檜扇 榿木 狗子柳

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む

⑬

立花秘傳抄 五 (つづき)

(除真) 草の花形立様の事

草の花の立ようと云うは、前の六つの花形を、よくよく修練して後、かれこれをかよわしまじ

えて、或は直心立にして、流枝立あり、或は請あがり立にして、左流枝あり、内副にして、流枝持あり、水際除にして、中流枝立と、さまざまに作意をめぐらし、日々に新たに、瓶ごとにあらたにして、七つの枝よくそなえ、法度指し合い、古法を背かず立てるなり。

初心の内は、花形かゆること成しがたし。こ

れを名付けて、いろは立、板木花とて嫌うなり。たとえば古歌を吟じて、楽とせんよりは、秀歌を詠むにはしかじ。

(・・しかじ・・に及ぶまい。・・にまざるものはあるまい。)

立花時勢粧上には11作の除真草の花形図がある(すでにテキスト613号で1作を掲載。その内ここでは富春軒作の2作を掲載する。枝や花、葉や実の絶妙なバランス感覚を読み取ってほしい。)



第二十一図

立花 松除真

除心の内草の花形 富春軒

松 梅 苔 椿 柘植 水仙 伊吹

晒木 枇杷 嫩 著我



第三十図

立花 梅擬除真

除心の内草の花形 富春軒

梅擬 柏 菊 小菊 椿 熊笹 伊吹

嫩 榎木

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑭

立花秘傳抄 五 (つづき)

砂の物真行草

株立を真の砂の物と名づく。心ふときをよしとす。苔晒木、異曲に、景気すさまじく、七つの枝、意気はづみありて、勢いつよく、株よく見ゆるを、第一とする故、株立とも名づく。生を後より付け、前置をかるく、胴作りを用いざるも、皆これ株をよく見せんがためなり。

同じく軽き心は高く、重き心は低く、請は苔晒木のふときを短く、流枝は長く出して、心と張り合い、控枝は請の勢いを請けて、はづみ面白く、下草しげきは、花形はづまず、さるによつて、軽きを賞翫す。株立は下木下草に至るまで一風ある物をえらび、花形するどに見ゆるを専らとす。或師古詩を引いて、

連峰 天を去ること 尺に盈たず

枯松 倒しまに掛つて 絶壁に倚る

この句の心をもって、花形趣向すべしと云えり。

〔出典〕李白「蜀道難」

心の高さ三尺ある時は、横のひろさ六尺。或は心の高さに二長半、又は鉢に双倍とも云えり。鉢の大きさ、一尺より一尺五寸までを、小砂の物といい、一間床に用ゆ。一尺五寸より二尺五寸までを、中砂と云いて、二間床に相応す。これより次第に大きなるを大砂と云う。

真の砂の物

一株砂物 松真
中野小左衛門
松 晒木 杜若 薄 夏はぜ 栢植
檜木 檜扇

この「砂の物真行草」の文に添えられている図については、テキスト614号「立花時勢粧・上、砂物真行草の事」ですでに掲載しているもので、ここでは「立花時勢粧・中」より三つの砂物図を選んで紹介する。

第六十一図



砂摺すなずりの株（水たたきとも云う）と云うは、水より二三分ほど出るように、上を一文字に切り、請の方おもき時は、副の方にすえ、副の方おもき時は、請の方に置いて、一瓶の軽重をはかる物なり。二株砂同前。但し本株に縁をはなれず、うつりおもしろく立てるを習いとす。

前置の水ぎわは、幹を一所によせ、ばらばらにならぬように、株に引き付けて立てるを、能く寄ると名付けて、古代より専らにする所なり。

立花は遠山の気色、株立は目前の景気にて、枝葉つくろわず、みきけらず、自然の奇麗を用ゆ。古人云う、松の古葉、梅の枯枝、そのまま見るこそ面白きに、初心の人は、切りとりつくろいなどするは、無下の事なりとぞ。

行の砂の物立てようは、二株にして、一方へは心、正心、見越、副、前置、これを男株という。一方へは請、流枝、正心、前置、これを女株と云う。株二つ立てる時は、正心二つ、前置二つ用うべし。これ二つ真の格式になぞらえたる物

なり。然る時は両方の株、軽重なきように立てるを専らとす。

圓方曲直と、同意ならざるように取り組むべし。

同一方の株若ならば、一方は晒木を用ゆ。一方直に立たらば、一方は斜になし、一方自然どまりならば、一方は一文字に切るべし。長短高下、

行の砂の物

第六十七図

二株砂物 伊吹真

中野五郎左衛門

伊吹 晒木 松 苔 杜若 百合

小羊齒 柘植 要 檜扇



前置一方木ならば、一方草を用い、一方あざやかなる物ならば、一方はこまやかなる物、やわらかなる物にはかたき物、白き物には赤き物と、心得て指すべし。正心も又かくのごとし口伝。

草の砂と云うは、株二つなれども、正心ひとつ、前置ひとつなり。これ常の立花の法式、七つ枝の名目にしたがう故なり。女株男株、さのみ軽重にかかわらず、心の方かるき時は、請の方よりあしらい、請の方かるき時は、心の方よりあしらい、花形一面につかねて見る時、釣り合いよく、片落ちなきを、草の砂の物と云う。古来用いるの花形にして、近代板行の図に、あまたしるす所なり。

株立は、異曲風流に、意気はづみを第一と立てるといへど、とりわけ、草にかぎりて、一手珍しき作意なくては叶わざるものか。ある師古詩を引きて云う

江^{じろがえ}翻り石走りて雲気流る

幹は雷雨を排して猶^なお力争す

この句の心をよく味わって取り組むべし。一瓶の内に一枝風流なれば、ほかこれにあらそいて働きあり。さればむつかしくあしらいがたき枝にこそ、初心巧者のわかちも知れ、又は珍しき花形も指し出して、人の手本ともなるべきと云えり。

草の砂の物

第二十六図

二株砂物 太蘭真

富春軒

太蘭 芍薬 松 晒木 杜若 小菊
茗莪 嫩



〔出典〕杜甫「楠樹為風雨所拔嘆」(楠樹風雨の抜く所と為るの嘆き)

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑮

立花秘傳抄 五 (つづき)

地取の事

一株の地取は左右かたよりなく、前を広く後をせまく取るべし。一株の鉢あまりというは花形の図にこれあり。

二株は鉢の足の外つらを定法にして、株を立てべきと云えり。然れども鉢に替わりある時は、一応にさだめがたし。

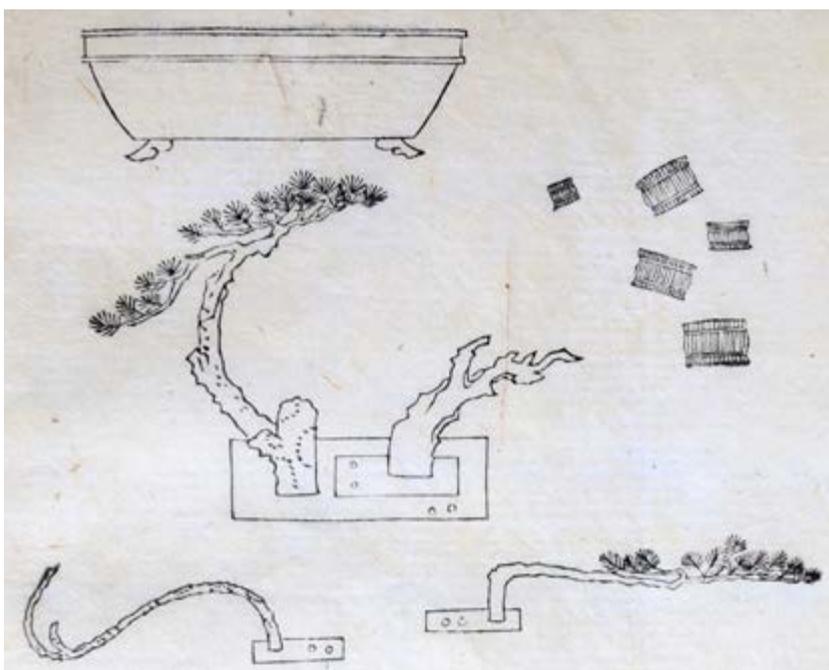
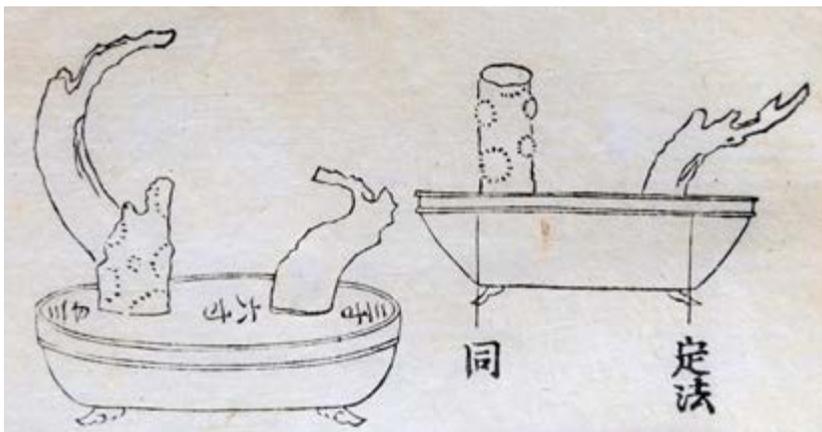
鉢の横ふちより、株までの間、両方三寸あける時は、中のみき六寸あけてよし。株大小ありて、中のみき片せば有時は、水ぎわのあしらいにて等分に立てなおすべし。かならず両方のみき不同なきように立てるをよしとす。

床正面あかりならば、流枝の方を少し奥へ入れて株を立てつべし。口伝。

床横あかりならば、いづれにても明かりの方の株を奥へ入れて立つべし。口伝。

古代の地取は、下子板げすいた一枚、両株共に、上よ

りかすがいにて打ち付けるにより、地取自由ならず。このごろは鉢の底の広さ二尺ある時は、下子板一尺七八寸などに切り、男株を立てんとおもう所に墨打をして株をすえ、板のうらより釘を二所ばかり打ち付けるなり。女株はまた別



の板の小さきに右の如く打ちつけ、男株の板の上へ女株の板を重ね、自由自在にゆづり合い、地取り片よりなきように取り組み、さて上の板より下の板へ釘を二所ばかり打つなり。流枝、控枝も同所なり。また株へそのまま打ちつけてもよし。

およそ^{こみ}込の高さは鉢の口より、六分ほど下に、並ぶべし。砂の厚さ三分、水の深さ三分ばかり。さりながら水の深きは涼しげなし。

込は鉢中に高低^{たかびく}なく、一面に押し合わせ、すこしもすきまなく、さて砂を入れ水を入れて、下木下草をさすべきなり。

株の前後、草木しげくさす所は、大きな込の堅からず柔らかならざるを、株へ引き付けておくべし。又砂の物に盆石を立てまぜる事。古^{はつと}来よりの法度なり。

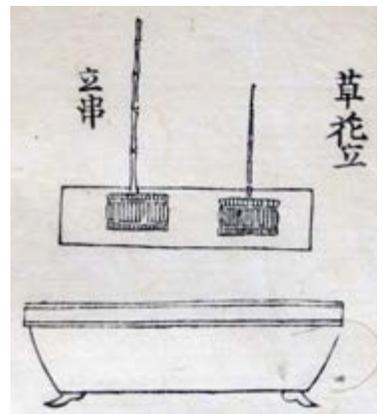
草花の砂の物は、地取りを能くして、込を大

(法度：禁じられていること)

きに結び、その真ん中に立串を強く立て、重き草は串に結びつけ、軽き草は込に指すなり。

違棚の下の砂の物は棚のくみようにしたが、心の梢を棚下の間あきの方へ入れ、棚板の角へ枝葉さわらざるようによけて指すべし。上下左右前後物にあたらす、ゆるやかなるをよしとす。

大砂の物、三間四間は、松、檜、柏樹、梅、水木などの大木を用ゆといえど、五間七間に至りては松の一色ならでは成しがたし。取り組みよう図のごとし。小道具は心、請の幹へ打ちつける。砂は板を敷いてその上に蒔^まくなり。



立華時勢粧りっつかいまようすがたを読む ⑩

立花秘傳抄 五 (つづき)

立花名目 並びに 訓解

心の事

一瓶の内、高く直なるを心と名付けることは
 儒家の中心、仏者の花心と云うより出たり。さ
 るによつて極真立には、心直にかたよらざるを本
 意とす。それより相生心、合心、二つ真、直心
 除心、右五ヶの心を定めて、この外心の名目なし。

心は君のごとく。六の枝は臣のごとし。心は
 位有りて、幽玄なるを用うべし。六の枝は勢い
 つよく、働きあるを専らとす。これ君臣合体の
 意なり。

古人の云く。心はことたらぬ様なるをよしと
 す。たとえば上の句、鶯の聲なかりせば雪きえ
 ぬ、下の句、山さといかに春をしまし、と読
 むるが如く、下句にて上の句をよくことはり、



(心 = 真)

一首のすがたよろしきように、立花も意得て指
 すべきと云えり。又云う、たとえば猿樂の能を
 するに、笛、鼓、太鼓をもつて、大夫一人をお
 もしろう見するように、はやすといえど、つつ
 みは鼓、笛はふえ、一ぶん一ぶんの面白所をな
 すがごとく、立花六の枝も、よく心を生立て、
 おのれおのれが働きあるべし。

心のみきふとく、葉あつきは賤し。枝左右へ
 長きは、請副はたらかず、苔、晒木の重きは低
 く立て、梅、柳のかるきは高く、枝なき心は瓶
 にもらでも苦しからず。除高きは、胴長くて古
 流なり。遠くより見る心は、葉の茂りたるを用
 うべし。

梅は冬の内は心に立てず。柳は初冬より立て
 初る。一本立てても苦しからずといえど、河柳を
 あしらう。河柳の心はかならず水際へぬくべし。
 藤の心は、松のみき狂い、老いたる風情よし。
 南天には風をもたせ、薄は陰陽の葉を見せ、緑
 松には古葉をのこし、竹の心は葉先床の角へな
 びかせ、水際にて節を見する。ほか之を略す。
 口伝。

直心は成る程真直なるをよしとす。除心は梢
 正心の上へもどして立てる。常の事なり。行草
 の花形に至りては、梢瓶にのらでも苦しからず。
 或いはみき異曲に、すわりがたき心ならば、ま
 ず瓶に立て置き、さて立ちのきて真横から見
 るに、梢正心のとおりにあたらば、必ずすわるべし。

方丈、客殿、書院、仏前の広き所にては、ま
 ず心を立て置き、二三間後へよりて、心のすわ
 りを見るべし。近く居て立ると、遠くより見る
 とは、ちがいあるものなり。さて大枝を取り組
 みて、又前のごとく、立ちのきて見るべし。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑩

立花秘傳抄 五 (つづき)

立花名目 並びに 訓解 (つづき)

正心の事

直心すくじんだて立の時たては、心の前に立つるにより、心かくしと名付く。除心のまじんの時ときは直なるもの一瓶のうちこれより外にあらざるにより、正心と名付く。また小心しやうしんとかく時は直心だいていの大にかわりてすなおなるを立つる心こころなり。

正心の高さは、松じん四尺ある時は、禿松かむらまつ二尺に立つべし。これ定法なり。梅、柳などの細き物ならば、高く指すべし。また心に梅、柳などを立つる時は、右の格を以て、正心よろしく立つべきなり。

除心のまじんの正心は心の前より立つる流もあり。また後ろより立つる流もあり。前より立つる時は、花形丸く、後ろより立つる時は、花形ひらめなり。

されば花形にしたがい、時よろしく立つべきなり。

心少し除のまたらば正心ほそきものを用ゆべし。広くのきたらば、大輪なるものを用ゆべし。心の幹ふときには柔らかなるもの、草の心には草を用い、水仙、杜若かきつばたは花より葉を高く、紫苑しおん、萱草かんぞうは下に葉をあしらう。南天、わくら、かなめの正心には口伝あり。つづじは下へつかいさげ、引き松は正心に用いず。檜ひのきは地生ぢまえを用い、薄は穂を用ゆ。草木にかぎらず出生の直なるもの、みな正心に用ゆべし。

副そえの事

副そえを古代は露請つゆかけと名づく。云うところは外の枝より高く、心の葉陰はかげにのぼせて、松の葉を請うけると云う心なり。然るに中頃より副と云う。心にしたしく副のぼすと云う義なり。たとえば大將軍に副將軍たしやうぐんかへうぐんあるが如く、一方の花形を守り、心に勢いあらすは、副そえの役やくなるべし。

副はやわらかに、しだれるものをよしとす。心すこしのきたらば、直すくなるものを立て副そえべし。広くのきたらば、なびきたるもの、葉のなきものには茂しげりたるもの、水ぎわのきにはきおいたるもの、幹くさ狂くるいたるには内副うちそえに立つべし。松の副は細くやわらかなるを用ゆべし。或は大葉一枚にて副をあしらうもあり。

上手の副を付ると云うは、心にそうべき枝葉をよく見定め、出生のかたちにまかせ、念慮ねんりょを入れずして、そのまま副そえる時は、自然の景氣うつりておもしろし。初心の人は草をため、木をゆがめ、執着のころを以て、強いて副そえうるに、立てて後まで、思慮しりょ分別ぶんべつのところ花にあられて、つたなく覚ゆるなり。巧者こうしやはこの域さかいをよくよく工夫すべし。

師語を作りて、副を付ることを教ゆ。副そえうて副そえわされ、除いて除かざれ。誠にこれ中庸の道理にして、添そいすぎたる時はいやしく、除すぎきたる時は、うつりあしきなり。

請の事

請と名の事、心の勢いを請持つという義なり。心おもき時は請おもく、心かろき時は請かろし。副しだれたるものならば、請はきおいたるもの、副きおいたる物ならば、請はしだれたるもの。心、副、直なるものならば、請は風流に狂いたるもの。竹の請には習いあり。

請は心に次いでの大枝にて、専ら賞翫する枝なれば時の珍花を用ゆべし。

見越の事

見越と名付くるは、山を見越して高木の梢を眺める心なり。されば庭前に山を作るに、見越あるが如し。さるによつて、小木高草を用いず。

見越と前置は前後の釣り合いにて、前置おもき時は見越おもく、前置短く出る時は、見越もまた心にそえて立つべし。

除心の見越は、さのみ左右高下をきらはず。正心こはきものならば見越やわからかに、正心色なく細きものならば見越は花やかに、大手なるものを指すべし。

藤、南天などのしだれたるもの、見越に用いる時は、兼ねて見越所を広くあげ置き、幽玄体になびかして指すべし。梅、水木の細きものは、正心より高く立つべし。

流枝の事

流枝と云うは、水ぎわ低く横へ長く流るる景色あるゆえ、流枝と名づく。また長枝とも書くべし。一瓶の内ひくく出すもの、流枝を定法として立てる。これ水ぎわの習いなり。

草木の横へはえ出るもの、いづれも流枝に用ゆ。しかれども葉先勢いなきものは用いず。広葉のたぐいならず。梅のずわひ心得あり。苔晒木の流枝は、いかにも細きを用ゆ。

流枝の出口、きつくりと出すべからず。本にできおい、中にて沈み、すえにてあがる様に指すべし。出口は花葉を以てあしらいかけ、いやしからぬ様に出すべし。

流枝は心と見合わせ、副と見合わせ、控枝と見合わせて、胴前よりのうつりを第一とす。

流枝は瓶の後ろ隅より出して、梢を前へふらす。然れども前置より前へは出すべからず。瓶の口より梢さがる事を嫌う。請と流枝の梢、同じきを嫌う。



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑩

立花秘傳抄 五 (つづき)

立花名目 並びに 訓解 (つづき)

前置まえおきの事

前置は一瓶の内、これより前へ長く出る物なき故、前置と名付く。前は先という心なり。古代、胴作りと前置をひとつに立のぼせて前置という。中頃より胴、前置と二つに分かれたり。さるによつて胴は七つの枝の外なり。

前置になる物、出生ひくくして横へ生える物皆前置なり。著莪、水仙、わくら、かなめ、これらの類、前置にならず。このほかなぞらえて知るべし。

ある師の曰く、ぎぼうし、河骨、前置にならずと云えり。その道理いかにと尋ぬるに、立花七つの枝という時は、枝なき物は前置にならずと言えり。おぼつかなし。蓮花、芦、蒲がま、鶏頭

水仙、これ皆枝なき物といえど、古来より七つの枝に用ゆ。もしまた茎と葉と分かれたるを枝なりと云わば、車を横におさんとするの類たぐひなるべし。

前置に古来より説々あり。一つには木末横こずえへふりたりとも、前へ長く出たる物、前置になると云えり。一説には長く出されども、正面にある物を前置と見るべしと云えり。さにはあらず。前へ長く左右へかたよらざるは真の前置なり。かたよりにて長く出るは行の前置なり。引つ込みて正面に立るは草の前置なり。この理をよくわきまえて花を見物する時は、その惑いあるべからず。

除心立の前置は、胴のうつりを請けて左右へはづませ、前へ長く出して谷洞をかまえ、美化美葉をもつて幾重も景をとるを弥立やよと名付け、巧者のなす所なり。

胴あざやかなる物ならば、前置はこまやかなる物、柔らかなる物ならばかたき物。草くさの心に

は前置かるく、木の心には前置おもく。ぎぼうしは陰陽をつかいわけ、笹は剣先をわきへふらせ、高き所の花ならば前置の先低くかたむかせ、対の花には同じ物を用いず。松、おもと、小しだを三ヶの前置と云う。相生心、二つ真、あわせ心、これ皆伝授の前置なり。そのほか常の花にも口伝これ多し。

前置は花形のかなめ、草木の根じめなり。前置浮く時は花形すわらず、たとえば人のつま立てて立つるがごとく見にくき物なり。これ一つの習なり。

胴作りの事

胴と名付けしことは花書に云く。立花の形は天上天下唯我独尊ゆいがとくそんの御容みかたちをうつせり、といえるより胴と云うなるべし。これ瓶上の景所、花中の手所にして、縦横たてよこ左右前後の大枝を育てる所なり。されば初心巧者によらず、精魂をくだくはこの所なり。

胴作り、祝言不祝言の立てようあり（口伝）。
 胴は丸く景多きを専らとす。下手の胴には景少
 なし。丸きものには細き物。かたき物にはやわ
 らかなる物。こまやかなる物にはあざやかなる
 物。白き物には赤き物。紫なる物には黄なる物
 と花葉のうつりよく心得てさす時は、一瓶のす
 がたあざやかにて見所多きなり。

控枝の事

控枝は七つの枝の外にして、真の花には出す
 ことを嫌うといえど、草の花形に至りては心の
 ふりによりて長く出し、請の木つきによりて風
 流をつくす。これ花の一体なり。そうじて花形
 珍しく指し出さんと思わば、長かるべき物を短
 く出し、短き物を長く出し、副下控枝の間あき
 に心を付、一作珍しき景を取るべし。又控枝な
 き花形も面白きものなり。

立花腰の事

流枝、控枝の後ろを腰と名付く。心おもき物

なれば、腰を松、檜などのつよき物にてあしら
 うべし。腰よわければ倒れるように見えるもの
 なり。初心の内は前にばかり心つきて、後ろを
 かならず仕残すにより花形すわらず、古人の云
 う、花形は衣冠束帯して座するがごとく立つべ
 しといえり。

水ぎわの事

水ぎわ夏は高く、冬は低く、草の両どめは口
 伝あり。一方茂りたらば一方軽く、一方木なら
 ば一方草にてとむべし。笹、小しだは少しひら
 めに遣い、みやまは草の方に指さず。苔は水ぎ
 わにて見せ、晒木は見せず。竹は一節を見せる。
 外を略す。

水ぎわの差込は矢篠を結いたるがごとく、大
 小出入りなく美しく繕いたるを大きに嫌うな
 り。幹太きあり細きあり、出入りところどころ
 ありて、又つかねてふつつかならざる様に立つ
 べし。これ故実なり。

水ぎわに三師の流々あり。まず一流には草木
 自然体を専らとして下草つくろわず、花はその
 ままの枝を用い、葉はおのがはたらきにまかせ、
 あつく無造作なるようなれども学びがたきとこ
 ろあり。又ある師の流には水ぎわ軽きを好んで
 下草うすく、たとえば名人の生花を一種一種よ
 せたるがごとく、景気やわらかに一花一葉に心
 を付て、はたらきあらずという事なし。誠に及
 びがたきわざなるべし。又ある流には、しいて
 花葉の綺麗を好み、花をならべ葉をそろえて、
 水ぎわ結いしめたるがごとし。十人に八九はこ
 れを好み、巧者は大に笑う。この三流、よくよ
 くわきまうべし。



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑩

立花秘傳抄 五 (つづき)

立花名目 並びに 訓解 (つづき)

かこいの事

立花のかこいと云うは、たとえば屏風障子にて見苦しき所をかこえば、そのまま花やかになるがごとし。さるによりて上手は松、ひおうぎを好まずして、美花美葉をもってかこつ時は、かこい則ち美景すまわとなりて、花あつく見所多し。然るに初心の内は、間あきをふさぎかね、かこいたい意こころばかりにて景をとるの修練なし。上手になりては、わざと間あきを好みて一景を指し出す。よくよく意をつくべし。

前にてかこつ花あり。後ろにてかこつ花あり。前にてかこつと云うは、まず胴、前置を前へはらせ、美花美葉のあぎやかなるをもって、胴の左右、請、控枝の前にしげく立てる時は、花丸く、胴あつくなりておのづから後ろにかこいいらざ

るなり。また後ろにてかこつと云うは、前に下草すくなく、花葉左右へ出いでず、胴作り立てばそなる時は、後ろにて下草しげく遣いて、景をとるといへども見所すくなし。

谷洞たにほらの事

立花の谷と云うは胴作りの後ろ、正心の前くつろぎて、奥深きところあるをいうなり。谷はうつろと読ませて、木陰くらく幽なる所を云うなれば、美花美葉のあぎやかなるを少し沈ませ、遠くかまえて見込みしおらしく立てるなり。

洞というは、流枝と前置の間ゆるやかに、上より下草なびき、奥もの深きところなり。水きわ一方せまりたる時は、一方かならず洞をかまえ、しおらしき花などかすかなる様に立てるなり。

つや 並びに あしらいの事

つやと云うは、幹太くこわごわしき物には美

花美葉のやわらかなる物を外よりそえ、又は内よりたよらせて立てる時は、するどなるものもやわらかに見え、けやけきものもいやしからず見ゆるなり。これ立花第一の教えなり。あしらいと云うは、葉のなきものには葉ある物を取り合い、丸きものにはほそきもの、かるきものにはおもき物、かたき物にはやわらかなる物、きおいたる物にはなびきたる物、すぐなる物にはまがりたるもの、この外あまたあるべし。

古代は七つの枝の外を皆あしらいと名付く。初心は一草をもつてつやとし、一木をもつてあしらいとす。巧者にいたりては、一草をもつてつやあしらいの二つをかね用いるなり。

意気いけの事 並びに うつりの事

意気と云うは、心を勢いあるように立て、そのうつりを請によくうつし、両方へ楽に張り合ひ、竜虎の如くなるを云う。これ上は心請より、下は水ぎわに至るまで、この心得をもつて指す

なり。師語をもつて教う。意気あるは則ち意気に添う。うつりと云うは、一方に曲がりたる物を立て、一方にはそのうつりを請けて直なる物を立てる。意気うつり同じ意なり。

張弛の事

張弛とは、草木地より発生して、勢いつよき姿を云うなり。一草一木、一花一葉の上にてこれを云わば、魚の池に躍るがごとし。草木花葉対用してこれをいわば、波岸に当て立てるがごとし、よくよく修練してこの位を指し得るを名人と云うべし。

立花色の事

師に問う。立花色と云うはいかなる所を云うや。師の曰く、これ花道の奥義、出生玄妙体を瓶にうつすを仮に名付けて色と云う。その玄妙体とはいかなる所を云うや。師の曰く、柳は緑、花は紅。問うて曰く、いかがして指し得べきや。師語りて曰く、草木我が心にまかする時は工に

貪著するゆえ、必ず出生の景气得がたし。また我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは植に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体、顕なるべし。藁駝曰く、古文「以能順木之天以致其性焉爾（以て能く木の天に順ひて、

以て其の性を致すのみ）」この語花道の奥義によく相叶えり。誠に微細の教導、向上の一路なり。この境をよくよく工夫して修練止まざるときは、覚えずして色あるべし。



藁駝 植木屋 庭師。古文は柳宗元の「種樹郭橐駝傳」の引用。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑳

立花秘傳抄 五 (つづき)

立花名目 並びに 訓解 (つづき)

貫枝ぬきえの事

高木高草は左右へぬくべし。小木小草は水ぎわたりといえども、後ろよりぬくべからず。また高木たりといえど、副、請と両方に遣う時はその中につたいの枝を指してよし。

心の後ろより幾色もぬく時は、もぢれ枝とて縁のきれる事あり。古人云う、重山重山とぬくべしと云えり。たとえば扇をひろげて重ねたるがごとく、一とおり一とおりもぢれざるように立つべきなり。

除真の時は後ろより草をぬくもあり。又ぬかざる流もあり。草の心の時はぬくべき事勿論なり。木の心にもぬきて苦しからず、立て様あるべし。されば山峡に池あるあり、林辺に野を見るあり、その体数多くあり。

語りて曰く、

「雖為沢辺千丈松 不似嶺頭一寸草」

古歌

夏山の 草葉のたけそ しられけり

去年見し小松 ひとしなけれは

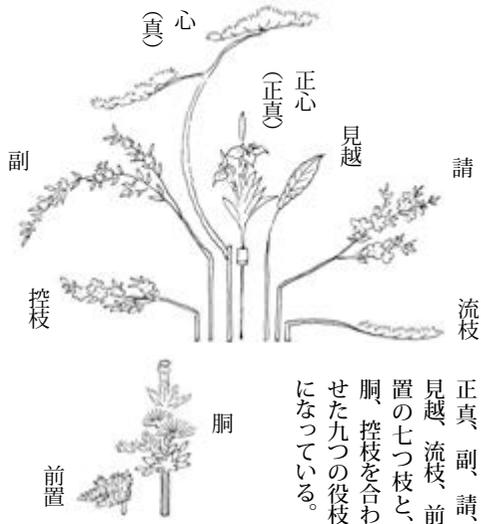
立花秘傳抄の五 終

立花の名目めいもく (役所やくどころの呼び名)



第八十二回 除真立の内真の花形 高橋吉兵衛
松 山吹 躑躅 杜若 柘植 熊笹 小菊
要 柏 檜扇

役枝の分解図 (器の口から上)



現在では、真、正真、副、請、見越、流枝、前置の七つ枝と、胴、控枝を合わせた九つの役枝になっている。

「立花秘傳抄五」の後半には「立花名目並びに訓解」という、立花を實際に立てる上での役枝の考え方が書かれている。すでに掲載した立花図の一つで、骨格となる役枝がどのようになっているのか図解してみる。

橐駝たくだについて 前号「立花色の事」にある「橐駝」について書かれた中国古書「種樹郭橐駝傳」は誠に興味深い内容なのでここに紹介します。

小林益夫氏の「風幡亭雜記帳」より転載。原文は「新釈漢文大系 7 1 唐宋八大家文説本 (二) 星川清孝著 明治書院」

「種樹郭橐駝傳」

柳宗元 (773~819)

通釈

郭橐駝は、そのはじめは何という名であったか分からない。背の曲がる病気で、背がもり上がってうつぶしになつて歩くのが、駱駝らくだに似ているところがあるのだ、それゆえ郷の人は駝と呼んだのである。駝はこれを聞いていった、甚だ善い。私を名づけてまことに当たっている、と。それによつて彼は自分の名を捨てて、彼もまた自分で橐駝たくだといったということである。その郷を豊樂郷という。長安の西にある。駝は樹を植えることを仕事としていた。およそ長安の豪族や金持ちで物見遊山の庭を作る者や、果実を売る者などは、皆争つて駝を迎えて彼の培養と視察とを請うのであった。駝が植えた所の樹は、遷し易かえることがあつてもよく根がつき活きて、大きくなり茂つて、早く実がなり殖ふえないものはなかつた。ほかの植木をする者が、うかがい見て見習い慕つても、それに及ぶことのできるものがなかつた。これを探ねるものがあると、彼は答えていう、橐駝は木を生

命長く、その上茂らせることができるのではない。木の天然自然に従つて、その生まれもつた生きる働きを導くことができるだけである。およそ樹木の性は、その根本はまっすぐに伸びるようにと欲し、その土をかけ養うことは平均していることを欲し、その土壤はもと植えてあつたものであることを欲し、その根本の土を固めるには密でずき間のないことを欲するのである。すでにそうしてしまうと、あとは動かしではならない。心配もしてはならない。そこから立ち去つてあとは二度と振り返り見ないがよい。その植える時は子を育てるときのように大事にし、植えて手放すときは棄てるようにすれば、その木の天性はそこなわれず完全で、その生きる働きが、適切に行われるのである。それゆえに私はその成長を害しないだけであつて、それを大きくし茂らせふやすことができる力があるのではない。そのなる実を抑えへらすことをしないでだけであつて、それを早く実らせ多く殖やすことができる力があるのではないのである。

ほかの樹を植える人はそうではない。

根は拳のようにかがまつて土は前と変わり、その土を寄せ養分をやるのに、もし度を過ぎるのでなければ足りない。かりそめにも是に反して良くやつていても、また木を可愛がつていつくしまが過ぎ、心配して熱心が過ぎて、朝に良く見れば暮れに撫で、もはや立ち去つてからまた振り返り見る。甚だしいのはその木肌に爪を立てて生きているか枯れたかを験あして、その根元をゆり動かして土にすぎがあるか密につまっているかを調べてみる。そうして木の生きる働きは毎日離れて行つてしまふ。これを愛しているというけれども、その実はこれを害している。これを心配するといふけれども、その実はこれをいじめているのである。それゆえに私には及ばないのである。私はその上何ができようか。何もできないのである、と。

問うものはいつた、お前のやり方を、役所の政治に移して行うことができるだろうか、と。駝はいつた、私は植木のことを知つているだけである。政治は私の仕事ではない。しかし私は村里に住んで人の長であるものを見ると、

好んでその法令を面倒にして、大愛人民を憐あれんでいようでありながら、結局人民に禍わざはひをしている。朝に晩に役人が来てさげんでいう、役所の命令で、お前たちの耕すことをうながし、お前たちの作物を植えることをはげまし、お前たちの收穫を監督する。早くお前たちの糸を繰れ、早くお前たちの糸を織れ、お前たちの幼児を育て、お前たちの鶏や豚を十分に成長させよ、と。鼓を鳴らして人民を聚あめ、拍子木を撃つて呼びつけるのである。私たち農民は食事をやめて、それで以つて役人をねぎらひもてなすのですらも、また暇がないのである。その上どうして自分たちの生活を繁昌させて、自分たちの生きるための心の働きを安全に保とうか。とてもできるものではない。それゆえ、病んでその上仕事を怠つてしまふ。このようであれば、政治も私の仕事と、それこそ似ているところがあるのであるだろうか、と。問うものは喜んでいつた、それも善いではないか。私は樹を養うことを尋ねて、人を養う術がわかつた、と。このことを書き伝えて、それを役人のいましめとするのである。

(橐駝袋のこと。橐駝たくだはラクダの正名。)

立華時勢粧を読む ②①

「立花名目並びに訓解」解説

「立花名目並びに訓解」では、立花の構成について誠に詳しく述べられている。実際には主になる九つの役枝（元は七つ）とそれ以外の部分について、経験を積みながら理解を深めてゆくことになる。
役枝その他の役割を簡単に説明する。

心（真） は一番高く立つ。除心は梢を正心の上に戻すのが常で、戻さない時もある。

正心（正真） は直心立では心の前に立て、心隠とも呼ぶ。除心立では中心に直立する。

副 は高く心に添い上り、心に勢いを持たせる役目。

請 は心の勢いを受け持つ役目。副とは対照的につくる。

見越 は遠くの高木を眺める心で。前置との釣り合い、正心との映りを考えて作る。除心の見越は左右高下を自由に作つてよい。

流枝 は水際低く横へ（長く）流れるように。

瓶の後ろ隅より出し、前置より前へ出ない。

前置 は花形の要、草木の根締め。水際の正面に長く出すのが真の前置。行草の前置もある。ここまでが七つ枝。

胴 は瓶上の景所。縦横左右前後の大枝を育てる所。

控枝 は副の下。他との釣り合い。無しも可。

腰 は流枝、控枝の後ろ。心との釣り合い。

水際 は夏高く、冬低く。

かこい で見苦しい所を囲い、景色も作る。

谷洞 谷は胴の後ろ、正心の前。洞は流枝と前置の間。

つや は外より添え、内より頼らせて立てて、強々しいものを柔らかに見せる。

あしらい は役枝に足りない要素を補う役目。

絵図を参考にして、直真立、除真立、一株砂物で、主な役枝とそれ以外の部分がどのように作られているのか見てみよう。



第一図

真の花形の主な役枝の図解（器の口から上）



胴作りと前置
その他（水際、かこい、谷洞、つや、あしらい）



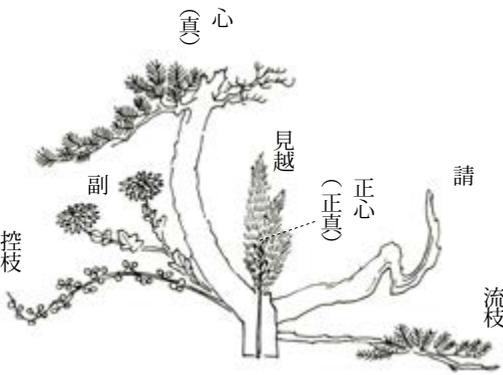
行の花形の主な役枝 (器の口から上)
 請を際立たせるために見越を左後ろに出している



桐作りと前置
 その他 (水際、かこい、谷洞、
 つや、あしらい)



第二図



草の花形の主な役枝 (器の口から上)



桐作りと前置
 その他 (水際、かこい、谷洞、
 つや、あしらい)



第三図

三つの立花図の花材名は「テキスト612号」に掲載しています。

立華時勢粧を読む ②

ここまで巻一、巻七、巻八の記述を紹介してきた。巻二、巻三は絵図のみなので、残る巻四〜六にあたる「立花秘傳抄一〜三」に書かれた花材解説について紹介してゆく。

立花秘傳抄 一

常磐木之部

木

説文に曰く、木は冒なり、地を冒して生ず。以て上は中、下はその根を象る。又曰く、木の性、上の枝左右へはびこること二丈なれば、下の根も又土中にはびこること一丈。これ故に文字に書く時も上下同じくはびこるかたちなり。



枝

音は支、則ち四支なり。誠に人の手足あるが如くなり。柯は大枝を云い、朶・條は小枝なり。日本記には末をえたと云えり。



気条

唐詩に見る。

株

土の中に入るを根と云い、土の上を株と云う。砂物にこれを用いる。



葉

纂要曰く、切つて又生ずるをひこばえと云い、俗に云うわかばえなり。

葉

字彙に云う、奕葉また累葉などと続く字なり。皆世を重ねる心なり。また上艸に、下木にして、中に世の字をもつは、草木の葉が春は生じて冬落ち、或いは枯れてまた生ず。累年止むことなし。その理、世の春秋を重ねるに同じ。和訓に云う、葉は齒なり。人の齒有るがごとし。草木初めて生ずるに二葉を生じ、それよりまた気を出して枝葉花となるなり。



説文||説文解字。後漢の許慎による漢字の字書。

中||草木の芽生え。

四支||四肢。

纂要||要点を抜き書きした書物。

字彙||中国の漢字辞典。

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ②③

立花秘傳抄 一 (つづき)

常磐木之部 (つづき)

花

花の字、上艸にして下化を用いる。化は造化なり。天地、寒暑、陰陽、草木、皆造化の作す所なり。されば草木四季に花咲き、青黄赤白、八重一重、一草一木の花の内にも二色三色あり。赤き花も白く変じ、紫なるも色を変え、四季咲き、帰り花、皆これ変化の理なり。又曰く、無よりして有を造ぞうといひ、有よりして無を化かとい



う。誠なるかな。冬枯れの草木も春は芽を出し、

夏は茂り、秋紅くれなゐにして葉落ちることわり目前

なり。和訓に云う、花は鼻なり。鼻は端なり。

草木の端に咲くによりて花と云うなり。

蔓

草のつるを蔓まという。木のつるを藤ふじと云う。



木の王は松、花の王は牡丹。

異名 十八公、龍枝りゆうし、青牛せいぎゆう、蒼鬣そうせん、爰こゝに略す。

和名 千枝草ちえくさ、深見草ふかみ、十かえり花、百草はく、

都草。

蔵玉集

大内や百敷山はくしきの初代草いくとし人のなれて

そゆらん

同

春の野や雪けの沢の延喜草ひきまぐさ花咲きにけり雪

におわれて

神山のふもとに植える千世見草うえおきて

こそ御調物なれ

松の葉を松毛しょうもうと云い、松の花を黄松花おうしょうか、また

松蕊しょうずい、松の笠を松毬きゅう、三針なるを括子松かっし、五針

なるを松子松。

立花に用いる名 男松、女松、若松、緑松、

禿松、岡松、五葉の松、引松、茶釜松、枯松(あ

か松とも云う)、こけ松(葉青くして先赤きを

云う)、しらが松(枝松の白きをいう)、かこい松、

根じめ松。

松

祝言第一の木なり。

上段中段下段に用いる。

苔晒かき共に付く。

王安石おうあんせきの字説じせつに曰く、松は百木の長たり、松

は公こうのごとし。故に松は公に従う。古語に云う、

若松 わかまつ

相生いしん、合わせしん、二つしん、直しん
又は除心にも用いる。

祝言第一の松なり。



笠松 かさまつ

直心除心に専ら用いる。みきのくるいように
て花形さまざまに替わりあり。若松に次ぎて目
出度き松なり。風を持つ枝とて口伝あり。



みどりまつ
緑松

直心除心に用いる。下に必ず松をあしらいて

その松よりみどり立ちたる景気かんようなり。

又下の古葉すきともぐべからず。古葉なくて緑
立つことなし。あるいは請副にも木ぶりにより
て用いる時は、まず直なる緑を立て置いて、そ
の横へも出すべし。出生直なる道理を瓶にあら
わすものなり。



ひきまつ
引松

出生小木にて漸く下より遣い上せて中までは
苦しからず。近代正心、請、副に用いるといえ
ども、巧者の好まざる所にして景気あしきなり。

引松



胴作り、前置に用いるに口伝あり。

まつかき
松笠

外の松に松笠を養い用いるに、枯葉枯枝にた
より松の葉のいろいろに随いて、景気げにもら
しきように持ちうべき。一色物同前。



かむらまつ
禿松

大きなは心にも用いる。中は正心、小はか
こいによるし。水際には用捨すべし。この松い



つも替わらざる姿にて、正心よりほか作意なしとて、近代さのみ不用といえど、花形無量なり。工夫を以て立てるに珍しき一手なきにあらず。

かこい松

小松の葉のこみたる、又はみどり松のちいさき、かぶる松などをわらにてまき、或いはふのりでかため葉をふせ、きれいにして出生すぐなるを豎につかい、横なるをわきへ遣うべし。

かこい松といえば見苦しき所をふせぐ物とばかり思ひては、花名人になりがたし。たとえば心の後ろをかこうては松の縁をつづけ、或いは間あきをふさぎては松のうつりを取る。皆これ景にあらずと云う事なし。



根じめ松

小松枝松の葉のよくこみてきれいなるを水際に用いる。古来松、檜の二本は峰よりふもとまで二面に生える物とて、その気色をうつす。又心、請におもき物指す時は、下に必ず松檜などのおもき物にて根をしめざれば花形よくすわらざるなり。



松は祝言第一の物なるに、松斗(?) えんを切りて指しても苦しからずと云えり。縁の切と云うるは不吉の言葉にして、尤も嫌うべきに心

得がたき事なり。その道理如何にと尋ねるに、その返答種々あるといえども一つとして道理に叶わず。されば近代名師の中に松ノ縁を切りて指すこと大きに嫌うあり。それ松は百木の長たり。松は公のごとく、公は摂政関白の位にして天子に替わりて国を治める官なり。然るに百木の長たる松、立花の法式をみだして万民の下草おさまるべけんや。

男松、女松、五葉、引松、そのほか品替わりたる松は、一種一種縁を切りて指しわけること古来の法式なり。これを以て同種の松も縁の切りて苦しからずといえるか、名師に会うてこの理を尋ぬべし。

松の前置は三ヶの前置のその一つなり。相伝と手練なくては立てるべからず。たとえ見覚え、聞き覚えたりと云えども、似たる事の似ぬ事なるべし。

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ②③

立花秘傳抄 一 (つつぎ)

常磐木之部 (つつぎ)

松の一色は祝言第一の花にして、又一色のその一つなり。移徒わたましの時かならずこの花を指す。近代初心の人、相伝よくしてみだりにこれを指す大きにおそるべし。たとい少々伝授したりとも、年来の巧者にあらずは松の景氣の妙なるところ瓶上にうつしがたし。たとえば筆道をよく相伝したりとも、手習いの鍊磨なき時は文字のかたち悪しきがごとし。松の一色は四季ともに立てるといへど、菊漸よすがく終わるより紅梅やや咲くころまでこそ松の一色は面白けれ。されば神無月時雨にそめぬ松とはいへど、かつは葉もきばみ霜にいたみ雪にうづもれて、替わりたる葉色もいづるは、山もあらわに峰もさびしきころなるべし。いでやこのころの人の春の末より秋の半ばまで変わらぬ色の松一木瓶にあつめて一色となす、何の面白きことかあらん。松は一色どり第一にしてむつかしき物なりと古人も云え

いでやいやはや(不満の氣持がこめられている)

松に苔晒木を付ける時は、体用よく和合して一木の氣色をうつすべし。これ立花の肝要とする所なり。晒木は高山の物なれば、松の氣色も年ふり枝たれて、陰かげたかき心を指すべし。若松みどり松には用捨ようしやあるべし。



松の一色真の花形

第百九図

立花 松一色

桑原治郎兵衛(初版では富春軒)
松 苔

同



五長形

松の一色行の花形

第百十図

立花 松一色

富春軒

松 苔 松毬

松の一色砂の物

第百十一図

二株砂物 松一色

(初版では富春軒)

松 晒 苔 松毬

「立花秘傳抄」の花材解説部分は、「木」の字の成り立ちの説明から始まる。これは立花を立てる心得として、草木の目に見える姿だけでなく、自然の生い立ちそのものに思いを致すことの大切さを説いていると思う。そして先ずは「松」。全118図のうちの85図に松が使われていることから、いかに松が大事なものがわかる。

ここに松一色立花、砂の物の図を載せておくが、木版刷りに手彩色で様々な色が松葉に塗り分けられている。ただ同じ緑の松だけで立てたのでは何も面白くないのだよと、文中にも書かれている。立花の奥深さを感じるところである。

同砂之物



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ②

立花秘傳抄 一 (つづき)

常磐木之部 (つづき)

檜

祝言に用いる。苔晒共に付く。上にはばかり、中にばかり、下ばかりも使う。これより奥上中下と有るは請、副、見越、流枝、控に立てるなり。前置には大木の類は用いず。訓蒙図彙に檜を図してこれ栢と名づく。本草綱目に云う、栢は側栢なり。数種有ると云々。順和名集の側栢日本の白檀と云々。未だ詳らかにあらず。

和名 さひ 富草とみ 幸草さいわい

天智天皇花尽異名

大内や名もむらさきのみつま草家作りえのかけそ久しき

蔵玉集

此時は四方も八角もおさまりて四ツま草にも花は咲けり

古今

この殿はむへも富けりさき草のみつは四ツはに殿作りして

地はえ檜と云うは実植にして漸くようや五尺にたらず。出生直なるゆえ、正心に用いるはこの檜なり。



板檜これも小木にして葉のうらおもてなくひらめにかさなりありて、葉先丸く白檀の葉のごとくなり。自然に立ちたる木末こぎすえあらば正心にも用うべき。かこい、つや、ねじめなどに当代専ら之を用いる。



しよろ檜と云うは、若木の小枝なるゆえ、横へは遣えども正心に用いず。これ立花第一の賞木にて、副、見越、つや、あしらいに指して叶わざるようにいまも古風にはこれを用いる。当代は初心の物にしてさのみ好まず。さりながら上手の檜つかいは下手の美花にはまさるべし。よくよく心を付て新たに指すべきなり。



檜しんは大木の枝を切りて葉つきよく、木つき面白を用いるなり。小木にはまれなる物なり。まずしんにはたらきある時はその勢いを流枝、或いは請にもたせ、板檜、しよろ檜なんどの小枝をもつて水際へあしらいくだし、一所一所にはたらきを付け、又一瓶の内の檜をつかねて一木となして見る時、たがいに和合して景気面白ように指すべきなり。檜は花も咲かず葉も見事ならずといえど、立花の上にては第一の景物とす。初心巧者のわかちは檜にてよくあらわるる物なり。

かしわ
柏

祝言に用いる。

上段中段苔付けず。

晒木は成る程ほそきを用いる。

心、請、副、控枝。

流枝にならず。

葉は水際までさげず。

本草綱目に云う、櫛かい 唐韻云柏

藻塩草、ならの広葉 葉広柏 青柏

秋柏

わくら葉祝言に嫌う。

病葉とかきて、赤きはの虫のきしりて朽ちたるを云う。

柏は大木なりといえど、これ古法なり。然るに近代あまねく太きを用いるは出生を知らざる故なり。ある師の云う、柏の晒木は細き枝のところどころ皮の残りたるこそ、同木の景気もうつりて面白き物なりと云えり。

広葉の類一瓶に一色ならずでは指さず。柏、枇杷、紫苑、ぎぼうし、だんとく、うこん草、朴の葉のような類なり。

柏の大葉水打つ時は、葉しだれて花のぐあいちがう物なり。茎を枝に結びつけて遣うべし。またよく水をあげさせんとならば、枝の皮目を一方削つて水へ入るべし。



左草之對之花

寺田八郎兵衛

テキスト615号で掲載した立花図の一つに檜を真に使った立花があったので、再び紹介しておく。

第八十三図

立花 檜除真

左草の對の花 寺田八郎兵衛

檜 苔 梅擬 松 菊 小菊

熊笹 柘植 嫩 檜扇

立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ②⑤

立花秘傳抄 一 (つづき)

常磐木之部 (つづき)

枇杷びわ

祝言上中。

苔晒用いず。

心、副、見越、請、控枝。

若木の直なるに葉の付けるは正心にも用う

べし。

流枝にならず。

本草綱目ほんそうこうもくに云う、その葉の形琵琶びわに似たり、

故ゆえに名付く。

草木によらず陰陽を指しわくるといへど、大

葉にかぎりて陰陽を第一とす。易曰えきいひく、万物生成

陰を負い陽を抱く、されば草木の発あひわれ出する時は

表を内にして裏を外にす、これなり。葉ひらけ

て後、表はやわらかにして天にむかい、裏はこ

わごわしくして地にむかう。されば葉の表は陽

葉の裏は陰なり。

枇杷、柏かしわをもぎ葉として三枚にても五枚にても遣う時、一枚にても二枚にてもかならず裏を見すべし。或いは葉先そりかえり、又は横ざまより裏すこしなりとも見ゆる時は、陰陽備わるとして是をゆるすなり。

三枚五枚遣うとも、ちいさき葉は中に遣い、大きな葉にて外よりいだかせて立つべし。これ出生の当然の理なるもの歟か。もし大小内外乱れる時は、かならず見にくき物なり。大葉四枚

六枚遣うこと嫌うといへど苦しからず。口伝。陰ばかり陽ばかりに遣いて苦しからず。口伝。おもとに立合て苦しからず。口伝。花形によりて大葉水ぎわに遣うて苦しからぬ事あり。

枇杷、柏をもぎ葉にて遣う事むつかしき物なり。しまりたる時は働かず、ゆるやかなる時はくだけやすし。ある師曰く、除いてのかざれ傍そばてそわざれ。この語を覚えて指すべしと云えり。広葉は五、七、九枚遣うとも残らずよく見えるように指すべし。一枚の内半分なりともかくれる事を嫌う。師云う、広葉は名を指すべしと。前枇杷、前柏とて胴作りに立てる時は、まず一枚葉先すぐなるを裏を見せて立て置く。それよりうつりを請けて三枚、五、七枚、あるいは



歟か||疑問・反語・詠嘆(くだなあ)で使う。ここでは詠嘆として使われている。

九枚ごとごとく働きありて、陰陽よろしく、又つかねて一木に見る時、景気面白様に立つなり。

古来より大葉遣いは枝を付けずにして葉ばかりつかい来る。これをもぎ葉立てと云つて、今様さのみ好まず。旨趣しじゆいかになれば、枝ある物を葉ばかりに遣う時は、出生の景気うつらずしてしかも働きなし。五枚三枚遣うとも一枚は

かならず枝を付けて遣うべし。

柏は葉と葉との間縁遠くても苦しからず。枇杷は縁近く指すべし。これはもぎ葉立ての時の事なり。

大葉遣い初心の時は、縁のきれる事ままだし。或いは正心の後ろより流枝の上を前へとおして

請にて縁をきり、或いは副の下を前へくぐらせては、控枝にて道をきる、前後友に同断なり。

大葉は中のしべを見て遣うべし。下へなびき



たるは生葉なり。さかさまに遣うは死葉なり。

枇杷、柏、心に立てる時は、一本は立てず。請副、控枝などへ指し下げるべし。又はもぎ葉にて下をあしらうべし。或いは副の付きにくき心

には、大葉一枚にて副をもたする事あり。流枝の方おもき時は大葉一枚にて請をあしらう事あり。別て大葉遣いには伝授あまたある事なり。

前号から柏と枇杷の解説が続いたが、これら広葉の類は一
瓶に一種類のみを使うのが望ましいと書かれている。
特に枇杷は立花図の多くに使われている。どの絵図でも役
枝とのバランスが見事である。今は正真の受筒を隠すために
使うことが多いが、枇杷の葉によって立花に躍動感を加えら
れることを見直したい。
ここに枇杷を使った立花図を二つ再掲載しておく。



第八十一図

左行の對の花 中川常意

松 山吹 躑躅 杜若 椿 伊吹
小羊齒 小菊 要 檜扇 柘植



第十七図

立花 松除真

除心の内行の花形 中流枝立 寺田八郎兵衛
松 晒 百合 枇杷 柘植 紫陽花
要 小菊 檜扇

立華時勢粧りっけいまいようすがたを読む ②⑥

立花秘傳抄 一 (つづぎ)

常磐木之部 (つづぎ)

栢樹いしがき

祝言上中下。

苔、晒木付。

心、副、請、正心、胴、控枝。

(前置に用いず。)

穩栢、圓栢。

禪家に謂、庭前の栢樹子とはこれなるべし。

胴に用いる時、一本は立てず。しかれども景

気二本に見える栢樹ならば苦しからず。



胴栢樹いしがきとて古来より専ら用い來たるといへど

も、初学の物にして巧者の好まざるものなり。

しかれども花形により珍しき作意も指し出すべし。

玉たま

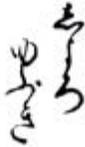


これを玉栢樹という。胴作りに専ら用い、そ

の形種々替わりありて面白き物なり。好んでつ

かうべし。

しよろいぶき



栢樹＝栢樹、栢横、伊吹のこと。

しよろいぶきと名付く、横に出すには細く軽

くして、しかも木末きおいてよろしきなり。副

請、正真、つやあしらいなどに専ら用うべし。

栢樹は高山の物なるゆえ、晒木を用いるに、

よく晒て白く、するどなるを用いれば、体用和

合して景気殊更に面白く、図に多くしるすなり。

よくよく工夫有るべし。

梅うめ

非祝言 上中下

梅はよく苔の付く物なりといへど、古来より

苔木をやといて付ける事なし。さりながら心に

ても請にても自然と苔の付きたる木ならば、又

外の苔木をやといあしらいても苦しからず。

梅のかれほ流枝、控枝などに面白い物なり。

体の付よう専一なり。つかいよう檜と同前なり。

非祝言古歌

いささらは茂りあいたる梅の木のとかとか

しきを立て過さん

榊さかき

祝言 中段

古来より祈禱の花、神前の立花に必ず用いる。

祝言の歌

神代より色もかわらぬ榊葉はさかへとき

はにむかふなりけり

かなめ

祝言 中段

正心に用いるに心得あり。榊 かなめ、わくら、しらかしは大木ありといえど、皆若芽



第五十一図
立花 伊吹除真 大橋源七
伊吹 苔木 芍薬 要 栢植
杜若 檉木 小菊 著我



第五十四図
立花 伊吹除真 澤重左衛門
伊吹 栢 桔梗 仙翁花 栢植
木槿 夏はげ 檜扇

を用いるゆえ、請、副に用いず。他これになぞらえて知るべし。

わくら

非祝言

中段に用いる。正心にも立てる。この外右に同じ。

しらかし

祝言

中下に用いる。同作り、前置によろし。

かすおしみ

非祝言。仮名を嫌うか。中下。大木ありといえども若木を用いるゆえ、たかく指さず。梅のずわい、さし合いなり。

黄楊

祝言。控枝。流枝にも用いる。水ぎわより遣い上げば、胴までも上る。前置に専ら用いる。つげにほそき苔を用いる。つつじの枝の

苔をかり用いるなり。

和名、豆計。

本草に曰く、黄楊その性、長じ難し、年毎に長ずること一寸。又閏歳は長ぜざるのみ。

東坡の詩に云う。園中草木春無数、只黄楊の閏年に厄するあり。

つげ種々あり。伊勢、浅間につげあり。針なく葉の表に艶ありて、裏に筋あり。秋より紅葉して、四季凋まず、これを女つげという。本草綱目の柘は又外にあるべし。(未勘)

黄楊一本は立てず。景気二本に見える時は苦しからず。

近代はつげの葉先を美しくはさみ、様々の形に作りて指す人多し。いったんはきれいなようなれども、よく見るに至りては、出生の景気にそむき、またはたくみに執著したる作者の心もあらわれ、後は興ざめて見にくき物なり。ただ自ずからなるきれいを好みて、きれいをたくむ事なかれと古人も云えり。これは上手になり

ての一重の上の教えなり。

黄楊は立花第一の景物にして、初心巧者のわかちなく指し得がたき物なり。まずその形、円方、長平、木裏、木表、左右、高下、それぞれの出生にしたがいて、よく取り合い、木すえ立ちたるは高くのぼせ、横にひらめな類は下に遣い、軽きは上に、重きは下に立て、縁遠きは下草をもつてあしらいかけ、近きは色をきりて遠く見せ、景気あり、はづみ有り、浮かず沈まざるようにと、心がけ肝要なり。

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑳

立花秘傳抄 一 (つづき)

常磐木とぎわぎ之部 (つづき)

今月号では一旦、文章の転載をお休みして、常磐木の

部に出てきた花材について、「立花時勢粧」の立花図の中
からいくつか紹介してみよう。

檜ひのき (文：テキスト637号)

「立花時勢粧」の絵図の中に、檜の真まことの立花は四図あ
る。一つはテキスト615号と637号ですすでに二度掲
載している。寺田八郎兵衛が立てた「左草之对之花」で、

右に松の真まこと(寺田清兵衛)、左に檜の真まことという「対の立花」
の左側(向かって右側)。檜に松、菊、小菊、梅擬、など
がとり合わせられた秋の立花である。

あとの三つは春と夏と冬。常緑樹なので季節を問わな
い。その内二つは富春軒が立てていることからして、檜
は扱いが難しいことが想像できる。文中でも「初心巧者
のわかちは檜にてよくあらわるる物なり」と述べている。



第三十五図

立花 檜除真 富春軒
檜 晒木 芍薬 松 要 小菊



第二十四図

立花 柏除真 松本氏
柏 菊 小菊 梅擬 松 椿
柘植 著莪

今号では春の芍薬との対比が見事な一瓶を掲載しておく。真の下がり枝と請の上り枝の形が絶妙なバランスだ。ちなみにこの絵図は「立花時勢粧・中」の二番目に登場する。富春軒にとつても特に思い入れの深い一作と思われる。

柏かしわ
 (文…テキスト637号〜638号)

「立花時勢粧」の絵図の中に、柏が真に使われた立花は二作。

松本氏(初版では松本近江)の柏真立花は除真の内草の花形として「立花時勢粧・上」にある。柏の葉を左右二カ所で見せて、その間を梅擬や菊が繊細に伸びている。面と線の対比だ。また、花器の形が変わっている。釣り鐘形で、立花瓶には大抵あるくびれが無い。おそらく柏

の形が際立つようにとの配慮だと思っ。

弁秀の柏真立花は「雑体之図」が集められた「立花時勢粧・中」にある。こちらの柏は片側に集められ、立ち上る松とのバランスが見所となっている。

どちらも季節は秋で、柏の葉先が一部黄色くなったものを使っているのが彩色によってわかる。共通して菊と椿が取り合わされている。



第七十四図

立花 柏除真 弁秀
 柏 松 苔 菊 小菊 椿 柘植



第四十二図

立花 松除真 濱崎丸左衛門
 松 晒木 百合 柏 夏はぜ
 柘植 小菊 小羊齒 杜若 蒼莪

弁秀の立花は、前掲の富春軒の檜真立花と花形に共通したところを感じる。偶然の発見だが、富春軒仙溪が好んだ花形の一つだろう。

もう一作、正真に柏を使った立花を掲載しておく。濱崎九左衛門の松真立花で、百合、杜若と取り合わせ

ている。量感のある柏の正真は、常の立花の常識を覆すほどだが、下段から勢いよく立ち上る真の松と、左前方へ中段から下がる胴の晒木が花形に動きを与え、他の花材もそれに呼応するように伸びつつ不思議なバランスを作っている。柏の塊かたまりを正真に使うという発想にも、そこ

に動きを与える役枝の働はたらきにも、自由闊達な精神と技量を感じる一作である。花器の形も花形に呼応している。

梅うめ
(文：テキスト639号)

「立花時勢粧」の絵図の中に、梅真しんの立花は寺内長三郎の一図のみで、他の絵図にも梅らしきものは見当たらない。簡単には集められない貴重な花材だったのか。

この梅真立花は曲まがが少なく、静かで厳かな印象を受ける。右下の水際に梅の苔木が見え、正真、副そえの菊と、胴の紅葉した夏櫨が彩りを与え、枇杷の大葉がメリハリをつけている。請の晒木は短めに、流枝の梅と控枝の松を目立たせている。



第七十五図

立花 梅除真 寺内長三郎

梅 菊 小菊 松 晒木 苔 柂木

熊笹 夏はぜ 檜木 柏 檜扇

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑳

立花秘傳抄 一 (つづき)

常磐木之部 (つづき)

棕櫚しゆろ

非祝言。上。

正心、副、請。

朝鮮棕櫚は胴にも用いる。

棕櫚竹また面白き物なり。さりながら客花

には用捨すべし。

詩に曰う。棕櫚の葉散しゆろじて夜叉の頭かさ。

古歌

朝またき梢はるかに音つれてすろの葉過

るむら時雨かな

杉

非祝言。上中。苔、晒木用いず。

古歌

いつしかに神さひにけりかく山の銚杉か

もと苔のむすまひ

苔を遣いても苦しからざる證歌ありといえ

ど、古来より苔を付けて立てる木、法式の外は

これを許さず。然れども自然と苔の付きたる心

あらば、外の苔木を借り用いてもくるしからず。

古代は賀茂かの神杉とて、若木の色よき、葉の

茂りたるをもとめて多くさされしと師の云え

り。然るに近頃は杉は魔のすむ木なりとて立て

ざるもおかし。詩に作り、歌に読みてやさしき

物なれば、今様にこれを用いる。されども客花

には用捨すべき物か。

うすの木 夏ばせ

祝言。

胴、流枝、控枝、前置。

幹太きは請にも用いる。

この二木、春の暮れより秋のなかば半まで紅葉

するゆえ、照葉てりばと名付けて瓶毎に用いるなり。

かならず葉先をつくろい、葉を重ねて見事

に見せんとすることなかれ。照葉はやわらか

に軽く立てるをよしとす。

ふしくろ

非祝言。下段。

栗の若はへ

祝言。下段。

檜の葉

祝言。下段。

まゆみ

祝言。中下。

衛矛まゆみ、鬼箭まゆみ。

猿すべり 猿滑

非祝言。中下。祝言に用いず。

證歌

足引の山のかげちの猿なめりそれらかに

ても世を渡らばや

柞

祝言。中下。

木ふときは請にも遣う。

櫛木ははそ（多識）。

四聲字苑しおんに云う。梳くしを作る。藻塩草そうしんそうにこな

ら栢かしわこれ柞なり。

今回出てきた棕櫚しゅろを使っているのは二図あり、第

三十二図・棕櫚しゅろしん真砂の物は以前掲載したが再び載せておく。雄株に棕櫚の古い株を立て、そこから若木が生まれた姿。棕櫚の素直な広がり、雌株の屈曲した晒木でバランスをとっている。

第四十一図では棕櫚が見越と副に大きく使われ、請にさらりと夏櫨を出している。竹型の器が目を引く。

同行之花歌



第三十二図

二株砂物 棕櫚真
砂の物行の花形 西村松庵
棕櫚 百合 晒木 松 苔 嫩 杜若
小羊齒 栢植 苔木



第四十一図

立花 松除真 高橋吉兵衛
松 棕櫚 夏はぜ 杜若 檜木
躑躅 著我 下野 嫩 晒木

柞さく、なら、ははそ、いすのきき 原文にルビが無いので読み方不明。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑳

立花秘傳抄 一 (つづき)

常磐木之部 (つづき)

晒木しゃれ

非祝言。上中下。

晒木を用いる木八つあり。楓かえで、柳、松、檜

梅擬ほそき晒しゃれを用いる、柏かしわ(同上)、梅(口伝)、円栢いんがき。

晒木は高山の大木、しかもその性かたくよび齡久いしき物は、かならず木よずえ晒木となるなり。凡おほそ晒木に生を付けんと思わば、必ずまず出生を見立て、それぞれに能く相応したるを專一とす。

楓かえで、松、檜、円栢、右の四木は高山出生の物なれば、白くよく晒しゃれて景氣異曲にするよどなるを用うべきなり。

梅擬、柏はさのみ高山の物ならねば、白く晒しゃれするよどなるはうつらず。枝ほそくすなおなるを

用うべき。此のさかいよくよく工夫なして立つべきものなり。

柳は幽谷岸上ゆうこくがんじやうに生える物なるゆえ、白くきれいに枝くるいたるはうつらず。朽木くちきの柳といえは、やわからに朽ちたるごとくなるをよしとす(口伝)。

梅のしゃれは太きを嫌す。ところどころ苔の付てやわらかなるは景氣よくうつる物なり。是一つの習いなり。

晒木は古法に水際にて見する事を嫌うといえども、立て様にてくるしからず。

苔

非祝言。上中下。多識に云う、百蕊草ななきこけ、艾よつ納こけ。日本私記、蘿こけ、蘚こけ。和名、日影草(木のひかげ、ひかげ)

堀川百首

よこね島下葉におふるさかり苔露かからね

ばかわくまもなし

新千冬

みどりなる苔のむす木も白妙の雪ふりにけり天のかぐ山

古来祝言の花に苔を遣うといえど今様に是を用いず。自然と葉の付きたる木に苔の付たるは用うべきか。枯れて葉もなく朽ちて枝もなき木に、苔の付たるを祝言とはいいがたし。立花制法の言葉にいう、祝言の花に嫌うべき物、すえのとまりたる物、枯れたる枝、この言葉けんぜん顯然なり。和名に日陰草とあれば目出度き物なりと云えり。大に笑うべし。さざれ石いわおの巖いわおとなりて苔のむすまでと読めるはあれども、木に付たる苔を祝儀に読める証歌ありや覚束なし。されば極真立の花に苔を用いざること、是祝言にあらざる道理必然なり。

苔こけ木祝言にあらざるといえず、松の一色には遣うて苦しからざる、口伝あり。ある師の云う、たとえば貴人高位の御祝に饗膳きやうぜんを奉るに干したる魚、死したる鳥、そのかたちながらも奉たてまつると

いへど、御祝いの大本たいほんにひかれて不祝儀とは云いがたし。松の一色もかくのごとし。松は祝言第一の物、その上余木をまじえず立てる時はこれ極々の祝儀なる故、苔をまじえても苦しからずと云えり。しかれどもすこしづつのあしらいに遣いて七つの大枝に遣うことなし。この説の外口伝あり。

追善の立花に苔晒木を立てざる流もあり。又立てる流もあり。その立てざると云う道理いかにと尋ねるに、返答まちまちなれども正理に叶わざるによりて爰こゝに略す。師伝に云わく、百年ないし二、三百年の追善の立花には、必ず松などの老いたる苔晒木の年ふりたる気色を瓶につすべしと云えり。然るにこの教えの心を取りちがえて新仏の追善には苔晒木を立てざると心得たるものか。苔晒木は立花第一の荘厳と見る時はさのみ嫌うべきにあらず。

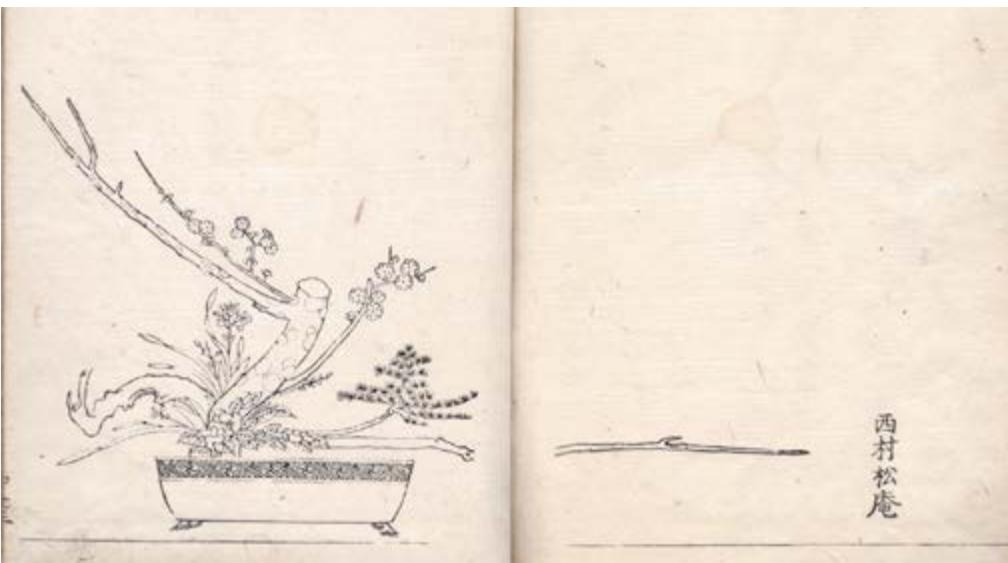
苔晒木を遣うに習いあり。たとえば人の子を養つて我が子と見るように育てる心をもつて指

すべしと云えり。されば鎌倉の栢樹いばきに熊野の晒木、その生所万里へだつといへど瓶上に立て合あわするに体用和合して一木の景氣をなす。これ立花の妙にあらずや。初心巧者によらずこのさかいをよくよく工夫して上手になるべし。花道の楽たのしみとするところこれより外はなし。

「御祝いの席では、生きた木に自然に苔がついているものは良いが、枯木の苔は相応しくない。極真立にも苔木は用いない。又、松一色にはあしらいに使つてよい。」と書かれている。今はあまりこだわらずに使うが、心得ておきたい。

鎌倉の伊吹に、遠く離れた熊野の晒木を立て合わせて一木の景色をつくる。そんなところに花道の楽しさがあるとも述べている。

この後、苔木晒木の解説はまだ続くが、「立花時勢粧・中」より一株砂物の図を紹介しておく。初版では富春軒作となっている。梅の苔と松の晒が花形の要かたになっている。



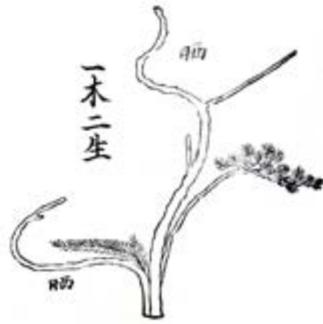
第七十七図
一株砂物 西村松庵(初版では富春軒)
梅 苔 松 晒 水仙 椿 著我 嫩

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ③〇

立花秘傳抄 一 (つづぎ)

常磐木之部 (つづぎ)

一木二生と云うは晒木を一本遣つて、一方は松、一方は伊吹と付け分ける事を嫌う。松ばかりか、伊吹一色ばかりにてはよし。



一生二木と云うは苔木と晒木とを両方に遣つて、伊吹一色にて生を付けるを嫌う。一方はまた松なれば苦しからず。



苔木晒木に生を付けるに真行草の三段あり。前より付けるを真と云い、後より付けるを真と云い、脇より付けるを草と云う。

前に円栢いづがきあり、後に松あり。中に晒木をはさむ時は、前の円栢の晒木になるなり。生木は体なり、晒は用なり、体用と次第するゆえなり。是を真の付けようと云う。又後の松の晒木なさんとと思わば、円栢と晒木との間を草にて立きるべし。



前に黄楊わうやうてり葉などの苔晒木の付かぬ物ある時は、後の松の苔になるなり。是を行の付けようと云う。



請に松を立て、控枝ひかええだに晒木をつかうに、正心に晒木の付くべき物なく、又ほかにうばうべき木なき時は、請の晒木となるなり。是古来の法式なり。



苔木晒木をうばうと云うは、苔木にても晒木にてもあれ、一本立てる時、松にも縁ちかく、

いふきにも縁ちかき時は、この晒木を両方より
うばうとて大きに嫌うなり。松ならば松、栢樹
ならば栢樹と、よく立て分けるをよしとす。



立花に苔木晒木のふときを好まず。細きは長
く、太きは短く遣いて、いやしからぬを専らとす。
水際にきれいに、細工見えぬをよしとす。



第六十七回

二株砂物 伊吹真
中野五郎左衛門
伊吹 晒 松 苔 杜若 百合
小羊菌 栢植 要 檜扇

立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ③1

立花秘傳抄 一 (つづき)

常磐木之部 (つづき)

柳

祝言。上中。晒木用い、苔用いず。

本草に時珍じちん曰く、柳枝弱りゅうじらかにして垂流すいりゅうす、故ゆえにこれを柳と謂いう。

崔豹さいひょうが古今註に曰く、微風なれども大に揺らつく、故に独揺どくようと謂いう。

説文、青柳、垂糸柳、人柳。

漢の武帝苑中に柳あり、一月に二度臥ふして帝を拜まじむ、非情心あり、よつて人柳と名付く。

和名 糸柳、八千代草、河高草、風無草。

古歌

あづさ弓春の柳に風見草のどけき色に打なびくらん

ふる雨の露に乱るる春薄梢に秋のかぜを見るかな

柳の心、初冬朔日より用うべし。初秋に葉落ちて初冬に芽ぐむものなり。名付けて芽張柳と云う。

柳の心立てる時は正心に葉あるものを用うべし。古来かぶる松用いるは柳に葉のなきゆえなり。請、副の心得同前なり。

柳は心に立てるに一本立ててもくるしからざること、しだれ左右へ長く前後へなびきたる物なれば、数枝の景気移る故なり。然れども祝言の花などには河柳一本下へあしらうべし。又請副には片なびきに遣い来るといへども、法度にあたらざる時は、もろなびきにても苦しからず。

柳はしだれ物なる故に、草木のしだれたる物さし合あひなり。南天、冬薄、紫げんじ、つる水木、黄梅、連翹、竹。

柳の心ためようは、鋸にて七分きり、三分き

りのこし、炭火にてよくあたためて、せんをかいてよし。細ほそき柳はそのままあぶりて花巾かきんをまきてねじためにして立てるなり。

河楊かわやなぎ

祝言。水際より指し上て中上までに用いる。本草曰く、楊枝硬ようじこわくして揚あげ起おこす、故にこれを楊と謂う。

俗にエノコヤナギと云う。白えのこぎき狗子いぬこに似たるゆえか。

柳花杜詩に、顛狂柳絮風てんきやうりゅうじよに随したががつて舞う。藻塩はこやなぎ云う白楊樹。

心、請、副に立てる時は、かならず水際まで下げるなり。水辺出生の物なれば上にばかりは景気うつりがたし。

白梅と立てまじえる事を嫌う。同色をにくむ心なり。

川柳九月ころは葉の下に白くめぐみである

を、上の皮を一重むけば、白き花出るなり。こぶ柳またおなじ。

河柳しだけ物にあらず。心に立てる時は葉ある物たかくあしらうべし。南天などよく取り合う物なり。

立花時勢粧の118ある立花図のうち、柳（枝垂柳）は12図、河楊は2図に見られる。

真に枝垂柳を使った立花は3図で、3図とも梅があり、草花のとり合わせでは水仙が2図、万年青が1図。描かれた柳はどんな枝だったか、立体を想像するのも楽しい。一方、河楊かやなぎはおもに「つや」として加えられている。白い花穂の柔らかな優しい枝が添うと、親しみが増すように思う。第72図では流枝にも使われて、軽やかな枝の

流れが花型に動きを与えている。



第五十二図

立花 柳除真

西川和泉

柳 梅 松 水仙 柘植 千両

ひさかき 枇杷 嫩



第七十二図

立花 松除真

寺田八郎兵衛

松 菊 小菊 狗子柳 椿 柘植

熊笹 小羊齒 柏

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ③②

立花秘傳抄 一 (つづき)

常磐木之部 (つづき)

紅葉

一色物。祝言。

鶏冠木けいかんぼく。順和名、紅楓こうふう。

唐詩

停車坐愛楓林晚

霜葉紅於二月花

諸書に載する所、楓葉を愛する事多し。但

し和朝の紅葉とは少しかわりあるものか。

順徳院御歌

秋もはや時雨のころの色見草ちらまくお

しき山風ぞかく

蔵玉集

立田山秋はたてなる錦草時雨てめぐる峯

のよこ雲

同

小倉山しぐるるころは鳴鹿のつま恋草の

いろものいひけり

紅葉一色



唐詩：杜牧の「山行」より 車を停めて坐に愛す楓林の晩。霜葉は二月の花よりも紅なり。

第百十二図
立花 紅葉一色真
(初版では富春軒)
楓 晒木

楓の紅葉は本朝詩歌第一の景物にして、名を
かえて いわずしてもみぢとばかり云うは楓の紅葉な
もみぢ り。されば桜をもつては諸花のかしらとし、楓
しゅうよう をもつては紅葉の長とす。これ立花の賞翫極々
の秘伝なり。されば一色物と定めて外の木草を
まぜずして、楓ばかりをもつて一瓶を成就す。
名付けて真の一色と云う。

草の一色というのは、心、正心、副、請、流枝、
控枝等の長く用いる枝は紅葉を遣い、胴、前置、
根じめ、擁、艶、あしらいなどには生得紅葉す
かこい つや しよくともみぢ
ることなき草木を用いる。菊も白きを用いて色
有るを嫌うなり。これ紅葉を尊敬したる心なり。

立てまげて苦しからざる物、松、いぶき、黄楊、
枇杷、檜、白かし、かた檜、くまごさ、小しだ、
白菊、著我、かよふの類なり。外これを略す。

楓は葉付ひらめなる故、胴、正心に立てる枝
まれなる物なり。出生すぐなるを見立て用うべ
し。



第百十三図
立花 紅葉一色
(初版では甞春軒)
楓 晒木 伊吹 栢植
檉木 菊

紅葉は瓶上に高雄山をうつして峰より染め、
桜は瓶上に吉野山をうつして麓より咲くといえ
ど、伝授おおくこれある事なり。初心のうちこ
れを立つべからず。

立花秘傳抄一の終

ここまでが「常磐木の部」である。一般に常磐木は常
緑樹のことだが、立花秘傳抄の「常磐木の部」には落葉
樹の夏櫨、栗、檀、百日紅、柳や紅葉が入られている
のは、おそらく花木もの以外の樹木全般という意味合い
だろうか。この後の「花の部」に桜、桃、梅といった花
木が入られている。花材解説のはじめに「常磐木」が
納められていることも意味のあることだと思ふ。

今号では紅葉一色を3図紹介する。彩色された絵図を
見ると、他の花材を混ぜて立てた立花と砂物は山の麓か
ら峰へと続く景色を表現していることがわかる。すなわ
ち紅葉した枝とまだ青い枝を巧みに使いわけている。そ
れに対して楓ばかりで立てた真の一色はまさに一本の楓
の姿だ。全体が見事に紅葉し、日影に青葉が使われている。
晒木を見え隠れさせて、楓の風格と幽玄を感じさせる。



第一百四十四図

一株砂物 紅葉一色
(初版では量春軒)
楓 晒木 伊吹 柘植
苔

立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ③③

立花秘傳抄 二

花之部

桜

祝言。一色。

桜は和朝第一の花にして、名をいわずして花といはは桜なり。唐には牡丹を花という。蜀の国にては海棠を花という。本朝、桜を愛するの始めは、人皇四十五代、聖武天皇桜を求め給う時、やまどのくにかすがのうしろ大和国春日後三笠山に八重桜あり。是をえいらん勸覧ありて、則四言詩作り光明皇后へ送り給う。詩に曰く、昌春季 山山美花 不見玉女 多恋歌

この詩、一句三字なり。句ごとに上の一字を二度読むなり。或人詩の心を歌に読む、日にそえてとり社こそまされ山桜いもに見せばや夜こそねられね。天皇みかど還御かえりまへの後、后きさきこの桜を見度よし仰せらるるゆえ、帝則奈良へ移し植はえられ侍り、その後今の都へもこの花うつし来きたせしなり。百人一首伊勢が歌に、いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬる哉、これよりして後、上うへ一人より、下万民しもにいたるまで、詩を詠じ、うたを読む。連俳共れんはいどもに研精覃思けんせいたんしは、皆この花を賞美しょうびしたる物なり。況いはんや

研精覃思 入念な調査、深い思考

聖武天皇 (701 ~ 756) の詩の読み方

「春季日々に昌はるのすえなり」

美花を山々に出さかんす

玉女ぎんねいを覓もとむるに見みず

恋歌ゆうべ夕夕ゆうべに多おほし」



第百十五図
立花 桜一色真
(初版では富春軒)
桜 苔 万年青
小羊齒

花道においてをや。余木余草よぼくよそうに立てまぜずして一瓶を成就じょうじゆす。これを真のまの一色と、皆桜ともいいて、大きに秘伝とする所なり。たとえ又余木余草を立てまじゆるというも、花の咲くことなき草木をあしらいばかりに用いるなり。皆これ桜を、第一の花と尊美そんびしたる心なり。

本草綱目に図する所の桜、日本の桜にあらず。唐の詩文を勘ふるに、王荊公わうけいこうが山櫻さんおうの詩一首のみ有り。

山櫻抱石映松枝

比並余花発最遅

頼有春風嫌寂寞

吹香渡水報人知

和名、吉野草。夢見草。尋源草。かさし草。人丸草。

雲見草。曙草。あだな草。手回草。

藏玉集

尋ね行く吉野の山の尋源草花より上にかかるし
らくも

植え置きて見る人やある夢見草明日をもしらぬ
けふの命を

齋宮花尽異名

雲は猶立田なほの山の手向草ゆめの昔のあとのゆふ
くれ



王荊公 王安石 (1021 ~ 1086) 北宋の政治家、詩人。

第一百六図
立花 桜一色
(初版では眞春軒)
桜 苔 伊吹
榿木 柘植
小羊齒

桜の立てまぜて苦しからざる物、松、いぶぎ、檜、梅、
黄楊、檜木、白檜、小しだ、わくら、くまごさ、かなめ、
外これになぞらうべし。

桜真の一色の時、前置におもとを用いる事、常の事
なり。ある人の曰く、皆桜という時は前置までに桜を
用うべきに、何とおもとを用いて皆桜といい、又は
一瓶に伝受の一色と、伝受の前置と、二つ有る事は相
うばうに似たり。いづれを賞翫とすべきや。答えて曰く、
口伝あり。

桜に晒木用いぬ事は、桜は高山の物なれど松檜にか
わりて木の性かたからず。よわいも久しからざる物ゆえ、
晒木とはならず。古人これをかんがみて法式を定めたり。

世上まれなる初桜などは一色ならずとも立ててく
るしからず、といえる流儀ありとも、ゆめゆめ用いべ
からざる事なり。



同砂之物

第百十七図
二株砂物 桜一色
(初版では富春軒)
桜 苔 伊吹
柘植 万年青
檜木

立華時勢粧の
「紅葉一色と桜一色」

先月と今月で紅葉と桜の「一色立花」を6図掲載した。

「桜は諸花の頭、楓は紅葉の長」と書かれているように、極めて大切な立花図が連続で登場したことになる。百十八図のほぼ最後に登場し、それらすべてが見開きの図版であることから、力の入れようが伺える。

「紅葉を尊敬する心」「桜を尊美する心」から、ほかの草木をとり合わせる場合、紅葉には「紅葉しない草木」や「色有るを嫌って菊も白花」、桜には「花の咲くことのない草木をあしらひだけに」用いるようにし、あくまでも紅葉を引き立て、あくまでも桜が主役となるような配慮をもとめている。自然の美に対する敬意が強く感じられる部分だ。

「高雄山の紅葉のように峰より染め」「吉野山の桜のように麓より咲く」ように立てよとは言うけれど、「伝授多くある」ので初心のうちはこのことを立てないようにとも書いている。この部分を私なりに解釈するなら、高雄山や吉野山のようにしないといけないなどと囚われるよりも、まず手にした枝をのびのび生かすことの方が大事なんだよと言っているように思う。

実際の立花図を見てみると、紅葉については2つの図で峰より染まっているように感じられ、紅葉だけ



立てた真の一色にはそれは感じられない。先月号でも述べたが、一本の楓の大樹のようである。

一方、桜の立花図を見てみると、一見どの枝も少しの蕾がのぞくものの、ほぼ満開のように見える。桜はこだわりなく自由に立てているのだなと思つたが、よくよく見ると「砂の物」の控枝と流枝には蕾が極めて少なく、真や請の梢には蕾が多めであるように感じる。麓から咲き上げる様子をさりげなく写し取っている。

また、紅葉と桜の図を見比べると、楓には晒木、桜には苔木がそれぞれ効果的に使われている点にも注目したい。肝心なのは自然を手本にするということ。

そして又、桜を詠んだ聖武天皇の詩が面白い。一つの漢字を一度はそのまま読み、もう一度は二つの字に分けて読むというユニークさに驚かされる。他にも中国の杜牧や王安石の詩を引用しながら花の知識を深めさせてくれるなど、豊かな教養に加えて、読む側を花の世界へ引き込むような文章の力を感じる。

立花時勢粧の中でも特別な6つの図を掲載したことで、この連載の責任の重みのようなものを改めて感じている。流祖の技や思いや心といったもの、選ばれた詩や言葉たち、そして絵図から読み解く様々な教え、それらを一つでも多く手に入れるための手がかりとして、内容の紹介を続け、深めてゆきたい。

「梅古文作呆 象子在木上之形 梅乃杏類 故反杏為呆」
立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ③4

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

梅

祝言。上中下。

又作呆象子在木上也

梅乃杏類 故反杏為呆

唐名 氷肌ひよつぎ 玉骨ぎよつこ 花兄かけい 花儒者かじゆしゃ

和名 初名草 香栄草かほえぐさ 風見草 春つげ草

緑の花

古歌

万代に咲るなかにも初見草春をまたてや

花を見るらん

深山には見雪ふるらし難波人浦風しほる

香はへ草かな

山里の軒端にさける風見草色をも香をも

誰見はやさん

冬の内は心に立つべからず。冬至梅の白梅に

先立ちて、枝短く立たるはにほいふかく、白き

梅の苔木に立て合わせてほのかなるは、時節相應の気色にて目もとどまり、珍花のあしらいとも名付くるなり。

梅は木つき風流に、枝ふりはたらき有るをよしとす。絵師の云う、桜は花を画き、梅は木をえがく。又曰く、松に三景あり、梅に八景あり。又詩にも疎影横斜そえいおうしやとあれば、この心をもつて瓶上にその姿をうつすべきなり。

紅梅と白梅と二瓶に指合さしあう時、盛りさかの花の方を上に指し、残花をば下に指すべし。紅梅は紅梅、白梅は白梅と、おのれおのれのはたらき有りて、混乱せざるように指すべきなり。又請の方へ白梅ばかり、控枝の方へ紅梅ばかり、一方つ指す手もあり。梅のずわいをつかう時はたとえその縁遠くとも本木より出たるように、うつり面白く指すべきなり。本木なくては、ずわい遣うべからず。

梅の心は下へ遣いさげ、上の勢いを下の梅に

うけさせ、請の梅は控枝にうつし、副の花は流枝に見合せて働きあるように指して、又一瓶の梅、合て一木の気色に立つべきなり。

紅梅を遣う時は白き椿を用い、白梅を指す時は赤き椿を用いる。

白梅に狗子柳えのこやなぎ、ずわいにかすおしみ嫌うなり。

白梅に水仙を立合する時は、赤き物にて色を切り、又梅に遠ざけて立つべきなり。

ある人問う。それ梅は諸木の兄、百花の長たるに、何とて一色には立てざるや。答えて曰く、松桜楓は高山の物にしてさらに余木をまじえず。一面のけしきあるゆえなり。梅は林園の物にて、類木をもって、一面に生えることなし。故にその景気よろしからず。大庾嶺たいゆれい万株まんしゆの梅ともいえず、それは我が朝の景気ならねば瓶上にはうつしがたし。

疎影横斜そえいおうしや 林逋の詩「山園小梅」の一文。大庾嶺たいゆれい 中国、南嶺山脈東端の山。和漢朗詠集にも読まれる梅の名所。

立花秘傳抄・花の部では、桜の次に梅が登場する。「立花時勢粧」の百十八ある図のうち、梅は約4分の1の30図に描かれている。ちなみに前号までに紹介した中ですでに14の図に梅が描かれていた。

真に梅を使った立花は5図ある。その一つ、第25図では垂直に立ち上る真、さらに請のつやとして白梅が使われている。梅の垂直の幹が、左右の松の特徴ある枝の動

きを際立たせている。とり合わせの水仙は白梅と隔てて使われ、赤い葉の小枝と赤椿で色が添えられている。

もう一作よく似た構成の第62図を紹介しておく。こちらは松の直線と紅梅の曲線の対比が見事だ。左に大きく立ち上る紅梅の枝。この枝を生かすために、極めて自由に花形を工夫している。細い枝の動きと、大きく空いた空間の枇杷の葉が絶妙なバランスを作っている。



第二十五図
立花 梅直真
竹葉軒治兵衛
梅 松 晒木 熊笹 柘植 椿
水仙 枇杷 嫩



第六十二図
立花 松除真
中野宗左衛門
松 水仙 梅 枇杷 柘植 嫩

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ③⑤

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

桃

祝言。上中下。苔晒木つけず。

時珍じちん曰く。桃の性、花早く、子繁みしげし、故ゆえに字木兆じもくしょうに従う、十億じゅういっぴやくを兆ちようと曰いう、その多きを言いう。

異名 仙木せんぼく 招客しょうきゃく 不言ふごん

和名 八千代草 八重桃 緋桃ひとう 白桃 源

平桃 西王母。

古歌

人来り来やとまやの軒端のきの柴のがきに立ちかく

れたる姫のものはな

のむ人や千代のをかくらん御酒みき古草こくさ叶あは齡いの

こころなりせば

あかねさす色のこそまかへ日本ひのこのむろふの

けもも花のさかりかも

桃のの木こつき、枝のぶりすなおにしてはたらきな

く、挫くに苔晒木のを付けざる古法のなる故、替かわりたる花形のも出来まざる物のなれど、松檜まつひのの風流のなるをあしらうべし。立てよう梅のに同じ。

海棠かいどう

祝言。上中下。苔晒木つけず。

李贄り皇集にに曰く。花木の、海かいを以もつて名なと為する者の悉ことごとく従したがう、海上かいじよう来きたり 海棠のこれなり。立て様梅のに同じ。

異名 海紅花 海棠梨かいどうり

梨の花

祝言。上中下。苔晒木つけず。

異名 玉乳ぎよくにゆう 鵝梨がかり 和名 詳つまびらならず。

辛夷木こぶし

非祝言。上中下。苔晒木つけず。

木筆こふし。

非祝言証歌

打ち捨てて手をにぎりたるこぶしの木心

せばきをなげくころ哉。

杏あんずの花からもの

祝言。上中下。苔晒木用いず。

異名 金杏花きんきょうか 甜梅花てんばいか

古歌

いかにしてにほひそめけん日ののもの我
が国のならぬからももの花
もろこしの吉野のの山のに咲さきもせておのが
名のしらぬからももの花

百日紅さるすべり

祝言。上中下。苔晒木用いず。

異名 紫薇花しびか 猴刺脱こさしたつ

蘇枋花すおうのはな

祝言。上中下。苔晒木用いず。

右のの五木の立て様梅のに同じ。

木蓮花もくれんげ

非祝言。上中。

異名 鬼饅頭きまんじゆう。

桜、梅と続いて次は桃。桃の木は枝ぶりが素直なので、松や檜の風流なものをあしらうといいと書かれている。桃は第四十九図に見られ、真と請に使われているが、どちらにも素直に伸び上がる姿なので、変化のある伊吹を流枝にすることで、花形に面白みを加えている。桃の桃色と山吹の黄色に、春の華やきを感じる。

立花図には他に第七図で白木蓮が使われているので、再掲載となるが紹介しておく。赤い躑躅が白い木蓮に華やきを与え、非常に大きな枇杷の葉をあしらいに使うことで、整然とした花形に躍動感を与えている。この大きな枇杷の葉先は黄色く彩色されていて、花形の要かたちとしての風格を感じる。



第四十九図

立花 桃除真
山本四郎左衛門
桃 山吹 伊吹 晒木 柘植
馬酔木 枇杷 蒼莪



第七図

立花 木蓮除真
除真立の内真の花形 富春軒
木蓮 伊吹 松 柘植 躑躅 小菊
檜木 枇杷 著我 要

勝^あげて計^かつて計^からさずい^いちい^ち教^ええ上^げることはとてもできない。ケ様のい^いこのよ^ような。

立^り華^っ時^ま勢^よ粧^うを^が読^まむ ③⑥

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

椿

祝言。下段。

海石榴。

本草綱木(目のまぢがい)に山茶花といえる日本^かの椿^こなり。格古論^{かくころん}に曰^いく。一稔紅千葉紅千葉^か白^せ。この外^{ほか}勝^あげて計^かつて計^からさず。

古歌

川上のつらつら椿つらつらに見れともあかぬとせの春かな
かぎりなきはこやの山は幾とせかしら玉椿
しらす行くすえ。

椿古方に城中、又得道の祝いに立てず。そのゆえは、花おちやすき物なれば、落ちるといふ言葉^{ことば}をいむ故なり。すべて草木の花、ちる、しぼむ、落花、皆不吉の言葉ある時は、椿に限りたるも覚束なし。但し幾日ありても落ちざる様

に細工して、立てるときは、苦しがるまじ。

然れども三輪遣う時、一輪かくれるは苦しからず。二輪かくるるを嫌^{きら}う。

椿は大木にしてしかも大輪なる花、水ぎわに指すこと法度に背き、出生にたがうことはいかにぞや。一説に云う。椿は近代はやり出て、一輪二輪だにも大切の花なる故、木をおしみて長く切ることなし。故に水ぎわばかりに、遣いならわせりと云えり。然れども椿のみに限らず、木^む樅^け、長春、花^は栢^{くわ}榴^{りゅう}、ケ様のたぐい古来より水ぎわに指す時は、前の説^{せつ}用^{よう}いがたし。或る師の曰^いく。惣じて草木の景気高木といえど、高く指してあしきあり。大輪といえどひくく指して面白くあり。椿、長春、木樅などは前置、水ぎわに谷をかまえ、洞^{ほら}を作りて、二三花ほのかに立てたるこそ、気色^{けしき}もおかしく勢い有るといえり。誠に古人花道を鍛錬して、法をさため給う、その道理^{もつと}尤^も奇^きなるかな。

椿は早咲き、冬の内、春、残花、四色の指し様あり。又花五輪三輪指すとも、花ごとごとくはたらき有りて、よくみゆる用に指すべきなり。

椿は葉をもぎて、外の葉の見事なるを、借りて立てるなり。若ばえへは、胴^{たう}まであげても苦しからず。

赤き椿、白き椿、一瓶に遣う時は、二所にわけて指すべきなり。もし一所に立てることあらば、白きは白き、赤きは赤きと、花の縁、混乱せざるように立つべし。

椿は前置にかぎらず、三輪、又は五輪とも指す時は、胴^{たう}作り、前置、ゆるやかに、或いは、流枝、控枝の前をくつろげ置き、松、黄楊^{わうやう}の木陰より、物にさわりなく、ありありと、見えるように指すべきなり。初学の時は、花形くつろがず、水ぎわせまるゆえ、大輪なる花遣うに、自由ならず。よくよく、工夫をなして指すべきなり。

椿を前置に用いるに、浮沈うきしんの二つあり。花うく時はよわく、しづむ時は、幽玄うくしんむならず。且つ外の草木をも、前置に遣う時、この事あれども、椿に至りては、専ら肝要とす。

椿の葉に檉木の葉を借り用いる時、二三枚はくるしからず。花と借り葉とよく景気うつるよ
うに指すべきなり。

むくげの花に、椿の葉をかりて、椿の花と見る人もあり、木槿の花と云う人もあり、古来その論あるといえど、立花に借葉と云うことあれど、借り花と云う名目なし。古昔いにしへはおもとに、ほうづきを借り、天南星てんなんしやうの実を借るといえど、当代これを大きに嫌う。むくげは、葉しおれやすきゆえ、椿の葉を仮り来たれり。むくげは、夏の景物なるを、しいて椿と見なさんは無下の事なり。

山茶花さざんか

椿に同じ。

椿（もしくは山茶花）は33の絵図に見られるが、すべて前置など、いわゆる下段の扱いである。そしてどの絵図の椿も存在感があり、窮屈な感じはしない。

第二十二図では前置に赤椿が使われている。梅は紅梅

で、その楚（すわえ・ずわえ）が真になっている。水仙の白い花がのぞき、副には黄花の枝垂れ枝が春の兆しを感じさせているが、山吹では季が合わないし、連翹でも早すぎる。黄梅おうばいもしくは雲南黄梅うんなんおうばいであろうか。



第二十二図

立花 梅除真

除真の内草の花形 桑原半兵衛

梅 苔 黄梅 松 檜 椿

柘植 枇杷 伊吹 水仙

頭風 頭痛

長春 中国原産の四季咲きバラ。至孝 この上もない孝行。

躑躅

躑躅 少し歩いては止まること。中比 なかごろ。そう遠くない昔

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑶

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

石南花しやくなんげ

祝言。中。

本草綱目に曰う、千石の間あいた 陽に向かう処ところに生ず、故に石南と名づく。

一名、風藥。よく頭風を治す、故に名づく。順和名、ともら木、くさなむさ。

石南花、葉あしき物ゆえ、楊梅やまももの葉をかりて用いる。

長春

祝言。下段。

花の常に絶えざるを以て、長春と名づく。

異名、月季花げつきか、月々紅げつげつこう、鬪雪紅とうせつこう。

又曰く、この花四時にある、故に日月花と云う。

躑躅

祝言。上中下。

陶隱居本草の註に云う、羊誤ひつじつてこれを食すれば、躑躅しちぢくして死す、故にこれを以つて名づく。世俗に云う、羊の性至孝しじょうなり、この花蕾ひざんで赤きを見て、母の乳となす、躑躅しちぢくして膝ひざを折り、これを飲まんと欲す、故に名づく云々。

古歌

花さけば秋かとおもふ火とり草見るに紅葉の色もまかへば
浅からぬおもひを人にそめしより泪にいろは小つつじの花

姥うばつつじ

同前

姥うばつつじは葉のなきをいう。

山つつじと云うは、花葉ともに、ちいさく高くはえる故、心に用いる。むらさきつつじ、同前。心に立てる時は、請、副、控枝、流枝など、つたいおもしろく、あしらい花やかに、下

はもちつつじ、小つつじ、琉球つつじなどにて、色取りよく、誠に春の山を、見るごとく立つべきなり。

蓮花つつじ

非祝言。上中下。

羊不喫草れんげつつじ、黄躑躅わつてきぢくという。

餅もちつつじ

祝言。水ぎわ。

羊躑躅てきぢくという。

五月さつきつつじ

祝言。水ぎわ。

本草に、茵芋きつき、杜鵑花とけんくさ。

段のつつじと云て、いろいろのつつじをあつめて胴、前置、流枝、或いは控枝などへつつけて立てるなり。これは賀茂山の檀のつつじと云、名所の風景を、中比の名師瓶上にうつして花形となす。これ相伝の花なり。

つつじは苔の付やすき物なれば、立花にもほそきを用いる。

かうぼけ 榎櫃（めいさ）

非祝言。控枝、流枝、中段まで用いる。

常のぼけは水ぎわばかりに用うべし。

あせほのはな
馬酔草花

非祝言。花は中下。

葉ばかりは水ぎわに用いる。

和名、あせみの花、あしひの花。

祝言にあらざる歌

おそろしやあせみの花を折たきて雨にむ

かひて祈るいのりは

池水に影さへ見えて咲香ふあしひの花を

袖にこき入れ

あせほの花は、葉の下より咲き出て花うつむきたれば、高く指して見あぐる気色面白し。また松の奥、つげの陰よりかたき物に取り合わせ、ゆるやかに立つべし。

ツツジは13の絵図に見られ、真に使われている立花が一瓶ある。第五十五図がそれで、二種類のツツジと山吹が伸びやかに生かされた、いかにも春らしい立花だ。立花瓶の大きな手の丸みが、ツツジや山吹の柔らかな動き

と呼応している。

立花時勢粧の絵図にはいろんな立花瓶が描かれているが、花材の特徴や季節感にあわせて使い分けられている。どんな器に立てられているかも、是非味わって見てほしい。



小川源右衛門

第五十五図

立花 躑躅除真

小川源右衛門

躑躅 山吹 苔 松 杜若

柘植 熊笹 小菊 著我

めいさ
榎櫃 花梨の別名。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑳

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

紫楊花あじさい

祝言。中にはかり遣う。

異名、繡毬花しゅうきゅうけ、紫綉毬ししゅうきゅうけ、紅綉毬こうしゅうきゅうけ。

夫木集

あぢさいの下葉にすたくほたるをばよひ
らの数のそふかとぞ見る

あぢさい種々あり。順の和名集には草の部に入
りたり。本草綱目には木の部に入りたり。然
るに通用物と云う人あれども、詳らかならざる
物か。後人尚これを勘かんえるべし。

あぢさい枝長きは水あげがたく、たむればし
おれやすし。茎みぢかきは筒に入れて遣う。

あぢさい大輪なる物なれば、胴作り、前へは
り出し、兼ねて座所ざどころをこしらえ、花ゆるやかに

順の和名集みななはのしななが 源 順が編纂した和名類聚抄わななづらぎのことか。和名類聚抄に、日本で最初の紫陽花の漢字表記がある。



おしつからざるように指すべきなり。大輪なる
花たぐいの類、いづれもこの意得あるべきことなり。

中唐の詩人・白楽天に紫陽花と題する詩があるが、日
本のアジサイとは別の花ではないかとされている。

立花時勢粧に紫陽花は1図のみ。すでに2度紹介した
が再度掲載しておく。細く風雅な松の真と流枝。請うけには

枇杷びわ。黄色い百合と青紫色の紫陽花が、枝物と対等なパ
ランスで配されている。要かなめ(要綱)の赤い小葉があしら
われて全体が色鮮やかになっている。器の形も優しい。

第十七図 (9頁)

立花 松除真

除心の内行の花形 中流枝立 寺田八郎兵衛

松 晒 百合 枇杷 柘植 紫陽花 要 小菊 檜扇

中比なかにちなかくろ。そう遠くない昔。さるべけんやさるべけんやしないでいられようか。

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ③⑧

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

くちなし

非祝言。水ぎわ。

梔子。一名、越桃。禪友。

桐の花

祝言。心、請、副。

一名、泡桐。栄桐。ひとは草(蔵玉集)。

桐の花、心に立てて面白き物なり。中比なかにちの人、立てることを知らざるゆえ、これを用いず。古人の花形略はながたりやくあり。今様これに随したがいて用いる。惣じて立花に嫌うべき物は、雑木、雑草、香のあしきもの、針のあるもの、食物の類、これを楽しう。然るに近代は朝鮮国その外遠境ほかより、珍しき草木多く出せり。花伝書に載らざる花なりとて、指ささるべけんや。



第三十四図

立花 梅擬除真

富春軒

梅擬 晒木 菊 松 椿 栢 植 熊笹 小菊 柏

菊薫る秋の立花。「立花時勢粧・中」の最初の図。富春軒作で堂々としている。枝垂れた梅擬によって球体を感じる。左下水際から出た枯れ枝が、控枝の松と前後で重なり輪のように見えている。この枯れ枝が、花形の丸みを完成させているようにも見える。富春軒の創意を感じる立花である。

実之部

沢水木

祝言上中より遣い、下る時は下にも遣うべし。

晒木、苔木を付けず。立て様梅花に同じ。

水木

祝言。右に同じ。立花大全に晒木付くと有るは非なり。立てよう梅に同じ。

梅もどぎ

祝言。晒木用いる。苔木用いず。立て様梅に同じ。

右三木は葉有るといえども、葉をもぎて用うべき。葉もがざれば早く実しおれるなり。又見事ならず。

七かまど

祝言。上中段。

苔木、晒木を用いず。大木有るといえども、木まれなるゆえ、大形は讀、添、胴、控枝ま

第六十四図

立花 梅擬除真
筑摩九朗右衛門
梅擬 薄 松 松笠 菊 椿 柏 水仙 嫩



菊から水仙へと移る晩秋の立花。薄の葉が大きく弧を描いて下がり、天を突く真の梅擬との対比が見事。大きな松笠のようなものが使われているのも特徴的である。

でに用い來たり。大枝あらば心に用うべし。

今号で「花の部」から「実の部」に変わる。

ウメモドキのような赤い実の枝は21の図に見られ、内5作で真に使われている。また15の図で菊が合せてある。梅擬と菊は確かによく似合う。

解説の沢水木が現在の何にあたるか調べたが分からない。「水木」にしても、ミズキの実は黒いので別の木を指すのかも。赤い実が集まって描かれているのはウメモドキと同じモチノキ科のアオハダの実か。もしくは濃赤色のタマミズキのようにも見える。これが沢水木のことだろうか。今後も調べてみたいと思う。

第六十九図

立花 沢水木(？) 除真

富田屋甚左衛門

沢水木(？) 松 柳 椿 伊吹 小羊齒 石路 水仙

著我 躑躅の紅葉(？)



初冬の立花。赤い実が小枝に集まっているのは梅擬ではなく、青膚、もしくは玉水木ではないかと思われる。右下の菊に見える花は石路つわみきか。その上にのぞく紅葉した輪生葉がよく効いている。左後ろに垂れる柳と、右後ろから前へと出た松の対比が特徴的。

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ③

立花秘傳抄 二

実之部 (つづき)

たらよう

非祝言。上中。

苔、晒木を用いず。

仙蓼せんりょう

祝言

古代は中までに用いる。今は水際に遣う。

みむらさき

非祝言。通用なり。上中。

一名、紫荊珠しけいしゅ、紫荊花しけいか。江戸にては紫式部

といえり。

つる水木

祝言。通用。上中。

近代、遣い始めたる物なり。本名たし慥かならず。指し様、藤と同前なり。

第七十三図

立花 松除真

丸屋勘助

松 梅擬 鶏頭

苔 小菊 蒼莪

杜若 雪柳(?) 椿 伊吹



下段から立ち上る真の松に、赤い実が景色をつくっている。内側と外側に寄り添いながら、弧を描いて伸びる枝には躍動感がある。花は鶏頭、秋の杜若、椿、小菊。色鮮やかな立花だ。大きく左に除いた真の松が、正真の空間をゆったりと作っている。

深山みやましきみ櫛

非祝言。非通用。水際に用いる。

深山は名を指すとて、水際の奥深く、又は前にも木かげに立つべきなり。草留の方に指さず。草は野なり。みやまにあらず。又景気もうつらぬものなり。

たちばな

祝言。非通用。水際。

燈籠草ほうちつき

祝言。水際。

異名、洛神珠らくしんしゆ、紅姑娘こうこうらう。

和名、ぬかづき、少人女中の客に必ず用いる。

えびついでばら

非祝言。水際は控とらに宜しい。

南天

通用の部に詳らかなり。



第七十八図
立花 松除真
富春軒
松 柳 梅 水仙 柘植 椿 多羅葉たらよう 伊吹 著我

「立花時勢粧・中」の最後を飾る富春軒の立花。立ち上る松の真は七十三図に似るが、こちらは真の出口が高く除きも浅い。左右の枝垂柳と松の形の対称が見事だ。その間の赤い実は「たらよう」だと思いたい。タラヨウはモチノキ科の常緑樹。別名ハガキノキで葉裏に文字が書ける。立花の魅力を伝え続けてほしい、との思いが込められているのでは。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

実之部 (つづき)

藜蘆おもと

祝言。葱苒そうぜん、葱炎そうえん、老母草おもと (藻塩もじに有り)。

老母草おもとは前置ばかりに用いて、外に遣うことなし。花道第一の秘伝の物なり。

おもとに指し合わせぬ物。草木の実のたぐい。

同広葉のたぐい。著莪、水仙、くまざさ。

葉数七枚九枚、もしくは十一枚、半はんに遣う。

常のことなり。又六枚八枚十枚、調ちように遣うても苦しからず。口伝。

おもとの実一つを二株立てという。二つを二株と云う。葉つかいその外、秘伝あり。師範なくては立つべからず。凡およそその姿ばかりを云う時は、葉組しまりたるは幽玄ならず。ゆるやか

半〓奇数。 調〓偶数。

執行〓修行。

いかでかうつさんや〓どのようにしてうつせるだらう(いや、うつせるはずがなら)。

なる時は、くだけて勢いなし。緩ゆるからず急ならず。そのさかいに至りては、輪扁りんぺんか輪たるべし。たとえまた伝受したりとも、執行未熟の人ならば、出生玄妙の所、瓶上にいかでかうつさんや。

第八十七図

立花 柳除真
おもと前置 富春軒
柳 梅 柘植 苔 嫩 檜 万年青



ある師の云う。古代はおもとの前置、翹望度々におよびて立てるといへど、座席をえらび、床にあらざれば指さず。立てる所へ人の来る事をゆるさず。花立てしまい水打ちて、あるいは客亭主より外、見することなし。その後前置をあげて花台の上におき、花形ばかりを残して、扱あまねく見する、これ古法なり。誠に花道を重んじ、そのつたえの大切なることこの如し。近代は茶会の花ともいわず、相伝なき人も妄りにこれをさす。道おろそかにするのいたり、なげかしき事なり。

通用物之部 附目録

竹	笹	牡丹
藤	小しだ	萩
酴・ <small>やまかき</small>	庭桜	粉団花 <small>てまりのはな</small>
小てまり	米柳	小米花
黄梅 <small>おうばい</small>	連翹 <small>れんぎょう</small>	種紫 <small>むらさき</small>
つる水木	えびついでばら	仙蓼 <small>せんりょう</small>
きじの尾	下野	葱 <small>しのか</small>
矢筈 <small>やはづ</small>	磐磬梨 <small>いはなし</small>	がんそく

白丁花はくちやうげ 薔薇しょうげい 磐檜葉
 ひとつ葉 荔枝れいし

通用物とは出生木にあらず、草にあらざる物なり。竹まず通用の第一なり。藤これに次ぐ。(本草につるの部に入り、歌事に草の部に入る)。つる水木、連翹のたぐいも又同じ。その莖、木にして木にあらざるは南天、牡丹のたぐいなり。莖草のごとくして冬枯れせざるは山吹、庭桜の類なり。常に山木さんぼくに生え混じりて、野に生えざるは小羊歯こしだ、一つ葉のたぐいなり。たとい末代すえのよに珍しき草木出たりとも、右の理をもつて立花に用いるものなり。

立花の上には木を山と見なし、草を野と詠め、木は木につづき、草は草につづきて、縁の切れざるを第一とす。十三ヶ条法度に云う。草にて木を包み、木にて草をつつむと。然るに通用の徳たること、木と木との間あいに立てる時は木となり、草と草との中に立てれば草となる。これ重宝の物なり。

「実の部」の最後は花道第一の秘伝のもの、万年青について書かれている。万年青のある立花図は3つあり、そのうち2つは桜一色の前置になっている。もう1つは「立花時勢粧・下・秘曲の図」の中の「おもと前置」と名がついた第八十七図である。

万年青には実の類、広葉の類を一緒に使わないこと。著莪、水仙、熊笹もだめと書かれているが、これらは万年青に対する敬意の表れである。桜一色のところにも同じようなことが書かれていて、桜や万年青を扱う時の心構えとして知っておきたい。

第八十七図では枝垂柳、紅白の梅、柘植つげで主な役枝をつくり、正真とあしらいに紅い若葉と檜葉が見える。落ちついた風格の中にも命の鼓動を感じる。その命の大本おもとのように万年青が水際に座っている。そんな印象の立花である。

ここでは藜蘆れいろうの字が使われているが、中国名の万年青が使われるのはもう少し後になる。老母草もなるほどと思う名前だ。

さて花材解説は次に「通用物の部」に入る。

「立花の上には木を山と見なし、草を野と詠め」

「木は木につづき、草は草につづきて、縁の切れざるを第一とす」とあるように、木と草によって山と野の景色をつくるようにするのが、山の景色にも、野の景色にも使うことができる花材が「通用物」であり、ある時は木になり、ある時は草となって、どちらにも使える重宝なものである。

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

竹

祝言。上中。

竹の字、形かたちに象かたどりてこれを作る。

本草綱目に云う、竹葉必ず三つあり。枝必ず二つあり。その根好んで東南に行く。

戴凱たいき之の竹譜たけふに云う、植物しょくぶつ(うゆるもの)の中、名あり、竹という。剛こわからず、柔やわらかからず、草にあらず、木にあらず、云々、これ通用の證文しょうもんなり。

通用の證歌

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはし
に我が身は成りぬべきなり

異名 石母草せきもそう 此君しくん 吾友ごゆう 不秋草ふしゅう

和名 千色草 小枝草 河玉草 夕玉草ゆうたまぐさ

古歌

秋風はまどなる竹にかよふなり河玉草を



寺田清左衛門

第六十八図
立花 竹直眞
寺田清左衛門
竹 梅 松 水仙 柘植 椿 熊笹 枇杷

なにといふべき

月にきく夕玉草の秋風に音はいつ頃寢覚

めとはまし

竹ただけ黄。また云う、天竺てんじく黄。天竺てんじく国に生じ、

天竹と名付くは淡竹はちく。

竹は心、請、副にかぎらず、葉を床の後ろ角へなびかせ、上の節より四五分の中にて一文字に切りて、そぐべからず。下は水ぎわより四五分にて、必ず節を見せる。古語に、松に古今の色無く、竹に上下の節あり。この心をもつなり。

竹は古来、上より下までよく見えるように立てるを専らにすといえど、花形によりて、胴、前置にてかくれる事あり。竹を見せんとて花形の悪しきは、却かえつて竹の賞翫にあらず。

竹の前に苔、晒木の太く直なるを立てること、古来より嫌う。竹をかくすのみならず、竹の直なると同意にて悪しし。



第二十三図

立花 竹除真

除真の内草の花形 菱屋六兵衛

竹 枇杷 松 梅 晒木 柘植 椿 熊笹 檜木

水仙 伊吹

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

竹は心のみにかぎらず、二本遣つかう常のことなり。竹の林と見る時は、三本五本くるしからず。又三本遣う時、一本ゆがみたるは苦しからず。二本ゆがみたるは許さず。

添え竹とて、細き竹を心にあしらう。葉のある竹ならば上を一文字に切るべし。祝言なり。枯れたる竹ならば、先をそぎても苦しからず。不祝言なり。立て様口伝あり。

竹は自ずから正心をかねたりといえど、わくら、水仙などの細く柔らかなる物を、正心にあしらう。常のことなり。然るに玉林の門流には、竹の後ろに松、鶏頭を立て、正心あしらいと見て、前にはあしらいなし。これ竹をよく見するを賞翫しょうくわんとしたる、道理おもしろし。しかれども

花道本一家より出て、末両義に別れたることいぶかし。今様には前に立てるを真のあしらいとし、後ろに立てるを草とす。

竹を片なびきに遣う、常のことなり。両なびきの時は笹なびの靡なびき、意得あり。

第九十図

立花 竹除真
竹の胴 桑原次郎兵衛
竹 梅 伊吹 晒木 柘植 熊世 小菊 水仙
嫩 櫻木



竹の請には流枝に意得あり。竹の胴、見越竹、口伝。

三つ具足立ての花の添え竹は、上の節より四五分置いて一文字に切る。さて心の枝と、竹の留まりとの間を一寸ばかりあけるなり。花形の大小によりて変わるべし。

竹の心・請、の見越には大葉、或いは大輪なる花を用いるべし。竹ほそき物ゆえ取り合いよし。

竹の子は砂の物によるし。立花に立てる時は竹の心より高く立てのぼすべし。

七本竹と云うこと古来よりなき事なるを当意即妙の一曲、誠に名師の修練なり。世人これを^{ゆめゆめ}努々学ぶことなかれ。竹は一色に立てざる道理分明なり。

砂の物には大竹を賞翫とす。太き竹に葉の付

きたるなき時は、生竹にても枯竹にても太きを立て置き、さて細き竹の葉茂りたるを立て添えて心に用うべきなり。三本遣う時はさび竹、くさり竹、仙人杖、切り株竹など取り混ぜて遣うべし。

第九十三図

立花 松除真

見越竹 桑原次郎兵衛
松 苔 梅 竹 柘植 椿 菖菘 枇杷 嫩



立花の心、竹太く葉付きよく、しだれ長き時は、
一本立てても苦しからず。

竹太きは葉久しく枯れず、細きは葉はやく枯
れるなり。

竹は切りて根をやきて立つべし。又上の節を
ぬきて水を入れて立つべし。

葉しおるる時は酒をふき、塩水をふく。外に
口伝あり。

学海に曰く、竹は八月を以て春とす、とあれど、
立花には五月六月を賞翫とする物なり。

竹に苔はうつりよし。晒木はうつらさず。

第九十図、九十三図は「秘曲の図」の内の「竹の胴」と「見
越竹」と名前のついた立花図である。胴や見越に竹の枝
を使うことで花形に厚みをつくっている。第四十六図で
は砂物らしく太い竹の株を見せたところに筍が伸び上が
り、自然表現の面白みを存分に感じることができる。器
の砂鉢が竹の根株を連想させる。



第四十六図
一株砂物 筍真
寺田清左衛門
筍 竹 百合 松 苔 熊笹 嫩

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづぎ)

仙人杖

非祝言。

本草綱目に云う、筍たけのこ竹に成らんと欲すとき、立ちて死する(枯れる)者なり。俗に云う、竹子おいどまりの枯れたるなり。立花、砂物によろし。

鬼鍼きしん

非祝言。

竹のくろ根という。竹のかぶなり。砂物に専ら用いる。

鞭竹むちのたけ

非祝言。

竹の根ふちに笹の付けるなり。水ぎわに低く用いる。竹五本とも遣いたる時は用つべし。二本三本の内にては用捨ようしゃあるべきなり。

唐ささ くまざさ

祝言。水ぎわ。

やきばささとも云う。水際はかりに用いて、前置にはならずと云う説あれど、今様には前置に用いるをよしとす。両説なり。口伝。笹は水をあげがたし。一日も間のある花ならば

用捨ようしゃすべし。冬はくるしからず。又笹の先切る事一枚はゆるす。二枚と切るべからず。

第二十九図

立花 竹除真

除真の内草の花形 桑原次郎兵衛

竹嫩 枇杷 水仙 松 椿 栢植 梅 著菘



先年、竹文化振興組合の季刊誌に竹について寄稿したので転載します。

「立華時勢粧」から

桑原専慶流十五世家元
桑原仙溪

いつだったか、馴染みの竹屋さんのTシャツに印刷されている数字を見て、びつくり仰天したことがある。「創業1688年」。その同じ年に、桑原専慶流の流祖・桑原富春軒仙溪が「立華時勢粧」を出版しているのだ。なんとという偶然だろう。そんなご縁を思い出したので、「立華時勢粧」のことを書きたいと思う。

江戸時代の貞享5年、すなわち元禄元年に出版された「立華時勢粧」は木版による8冊本で、118の立花図が納められた「立花時勢粧」3冊と、立花の教えが詳しく書かれている「立花秘傳抄」5冊からなっている。

「立花秘傳抄」5冊のうち3冊には、立花に使われる花材の解説が述べられているが、その内容は次のようになっている。

常磐木の部(35種)
松、檜、柳、楓など。

花の部(23種)
桜、梅、桃、つつじなど。

実の部(14種)

水木、梅擬、おもなど。

通用物の部(30種)

竹、牡丹、藤、南天など。

草の部(82種)

杜若、百合、蓮、菊、水仙など。

このようになってはいるが、ある時は和歌を引用し、またある時は中国の文献から生花について述べ、それぞれの花材をどのように使うべきかが事細かく書かれている。

さて、それでは「竹」について何が書かれているかを一部ご紹介してみよう。

竹

祝言。上中。

竹の字、形に象りてこれを作る。

本草綱目に云う、竹葉必ず三つあり。枝必ず二つあり。その根好んで東南に行く。

戴凱之の竹譜に云う、植物(う

ゆるもの)の中、名あり、竹という。剛からず、柔ならず、草にあらず、木にあらず、云々、これ通用の證文なり。

戴凱之は中国南北朝時代(420~589)の植物学者で、現在の湖北省の人。「竹譜」という書物に竹の生花を詳しく書き残している。

その竹譜から引用しつつ、竹は「通用物」に入ると書かれている。

この通用物とは、江戸時代の花材

の分け方の一つで、草にも木にもなる花材のこと。

立花では

「木を山と見なし、草を野と詠め」

という教えがあるが、竹は山にも野にもなる重宝な花材というわけだ。

他にも竹の使い方として、

「葉は後ろ角へなびかせ、上の節より四五分の中にて一文字に切る」

「下は水際より四五分にて必ず節を見せる」

「竹の前に苔晒木の太く直なるを立てること古来より嫌う。竹をかくすのみならず、竹の直なると同意にて悪しし」

「竹の子は砂の物によるし。立花に立てる時は竹の真より高く立のぼすべし」

「砂の物には大竹を賞断とす。太き竹に葉の付きたるなき時は、生竹にても枯竹にても太きを立ておき、さて細き竹の葉茂りたるを立て添えて真に用うべきなり。三本つかう時は、さび竹、くさり竹、仙人杖、切株竹など取り混ぜて使うべし」

「竹は切つて根を焼きて立つべし。又上の節を抜きて水を入れて立つべし」

以上はごく一部だが、竹に対する

思いの深さを感じる。

仙人杖(おい止まりの枯れたもの)

や、鬼鍼(竹のくる根)、鞭竹(竹の根ふちに笹のついたもの)も用いるとも書かれているが、私はまだい

けたことがない。

さて現在、私のいけばなにおける竹については恥ずかしながらそれほど多くの経験がない。近頃は花屋に頼んで金明竹を時々いけているが、

金明竹は切つていけても葉が萎れにくく有難い。しかしながら、竹林が身近にない暮らしの中で、自分で竹を切つていける事は皆無に等しい。

「先祖様に申し訳ない限りだが、竹を交えた立花の幽玄さは、実際にいけてみないと味わえない。これから私の挑戦課題である。

「温故知新」という言葉があるように、私はこの「立華時勢粧」を読み返しながら、「自然」と向き合う上での、新たな教えに出逢う楽しさを、今感じている。

最近私が特に感動した教えについて紹介しておきたい。

それは立花秘傳抄の中の「立花色の事」に出てくる。

立花 色の事

師に問う。立花色と云うはいかなる所を云うや。師の曰く、これ花道の奥義、出生玄妙体を瓶にうつすを仮に名付けて色と云

う。その玄妙体とはいかなる所を云うや。師の曰く、柳は緑、花は紅。問うて曰く、いかがして指し得べきや。師語りて曰く、草木我が心にまかする時は工に貪著するゆえ、必ず出生の景気得がたし。

また我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは植に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体頭かなるべし。

囊駝曰く、古文「能く木の天に順ひて、以て其の性を致すのみ」(註①)

この語、花道の奥義によく相叶なり。誠に微細の教導、向上の一路なり。この境をよくよく工夫して修練止まざる時は、覚えずして色あるべし。

この中の「囊駝の教え」は中国中唐の文字者、柳宗元の「種樹郭橐駝傳」(註②)の引用だが、中国で生まれた千数百年前の珠玉のメッセージを、流祖を通じて受け取ったみたいなのが、不思議なご縁を感じている。多くの人に知ってほしい内容なので。

「種樹郭橐駝傳」はインターネット上の、「小林益夫・風幡亭雑記帳」にその全文が紹介されているので、一読をお勧めすることで、寄稿の締めくくりと致します。気付きを共有できますことを祈つて。

註① 意識「木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導くことをしているだけである。」

註② 全文を「テキスト632号」に掲載しています。

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

牡丹

祝言。上中。

異名 木芍藥もくしやくやく 百両金ひやくりょうきん 国色こくしよく 醉西施すいせいし

和名 ふかみ草 はつか草 てるほ草

名とり草

万葉

名ばかりは咲ても色もふかみ草花咲くならばなににしてまし

藏玉集

折人の心なしとや名とり草花見るときはとかくすくなし

群花品の中に牡丹をもつて第一とす、ゆえ花王という。その花芍薬しやくやくに似て、宿幹しゆくかんは木に似て、もつて木芍薬と名付く。通用の証文なり。

牡丹、毎年十二月の数に応じて花のしべ十二

あり、閏年うるうとしには十三あり、故に十三紅という。牡丹は午うまの時に花殊ことに盛んなり。故に猫を繫つなぎ置きて時を知る。

歌に

六つ丸く五七玉子に八と四は梯のきねなり九つ針

第九十四図

立花 牡丹除真
牡丹の心(真) 桑原次郎兵衛
牡丹 藤松 柘植 躑躅 細苔 熊笹 鳶尾



桑原次郎兵衛

牡丹は花王と云い、名を貴び、高位高官の御方にて宗匠のほか、門弟の指すことをゆるさず。古代は花大切なるゆえ、木を残して茎より切り、筒に入れ、胴どうに用いて請副うけまへに使わず。誠に立花の道理でもあるべきことなり。しかれども近代、心請添しんけいぞえに用いるは、世上沢山にて時相応なるべし。

藤の花

祝言。上中。

紫藤 むらさきのはな 招豆藤 しやうまめとう 珠藤花 しゆとうか

和名 二季草 春より夏に咲からるによりてい

う 松見草

蔵玉集

夏色の花や侍らん二木草松の下枝にかか
る名なれば

同

そよやけふおりあふ春もくれにけり松見
草にも花咲きにけり

本草綱目に草木の部を除いて藤のぞの部に入た
り。又歌書にも草の部に入る。徒然草には草

は藤、山吹などあり、立花の上にては通用
に使うなり。すべて蔓の類は皆通用なり。ほ
かこれに比なぞえて知るべし。

第九十二図

立花 藤除真

藤の心(真) 一步子(初版では富春軒)

藤 松 檉木 躑躅 柘榴 小菊 鳶尾 嫩



比なぞえて||なぞらえて

藤にいたみたるは藤に(よつて)傷んでしまった。

藤に立てる松は、心、請、副、控枝にかぎらず、幹みきくるい枝葉古めき老いたる松の、藤にいたみたる風情ならでは景気うつりがたし。これ一つの習いなり。

藤は木にたより、松にまといて生える物なれば、瓶に立てるにもその姿を専らにする。心請、控枝、の内いずれの枝にても、一重二重まわして出生をあらわす。しかれども松、藤、の二木取り合いよくかない、自然の景気うつらば、一重二重にかぎるべけんや。

松に藤をまといせんと思わば、藤のつるを多くあつめ、松の幹にとり合わせ景気相応したるを用い、扱さ花は木かげよりあしらい出して、たよりたる体を指さず。

藤のしだれ、瓶の口より下がりても苦しからず。一切のしだれ物、指し合いなり。紫藤を指す時は杜若は白きを用うべし。



牡丹が貴重な花なので、短く切って使うべきなのを承知の上で、近年は栽培が盛んになったので真に使っても良いのではと、独自の判断を述べている。九十四図が秘曲の図の中の「牡丹の心」である。藤は5つの図に見られ、「牡丹の心」にも白藤が使われている。
九十二図も秘曲の図で「藤の心」と名がつく。S字に昇る蔓を真にして中段に白藤が下がる。赤とピンクのツツジが彩りを添えている。

二十七図は松枯れの真に藤の枯れ蔓をまわりつかせ、自然の厳しさを感ずる独特の景色が見事だ。副と見越に紫の藤が垂れ下がり、流枝と請を兼ねた松が立ち昇る。その対比に植物の命が漲みなぎっている。

第二十七図

立花 藤除真
除真の内草の花形 坂田任性
藤 晒木 松 柘植 躑躅 檜木 小羊園

沈括筆談 夢溪筆談 (北宋の沈括による隨筆集)。

立華時勢粧りっかいまいようすがたを読む ④5

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

南天

祝言。上中。

その実赤うて燭火のごとし。ゆえに南燭なんしよくと名付く。

本草綱目に曰く、その種しゆこれ木にして草に似たり、ゆえに南燭なんしよく木草と名付く。

沈括筆談しんかつひつだんに曰く、南燭は草木木草および伝記説くところ人少なく識者云々。これ立花通用に使うの証文明らかなり。

異名 南天竹 蘭天竹 草木の王

南天は心請副しんじよふに立てる時、かならず風をもたすべし。口伝。

南天の正心は葉の廻りちいさき実の自然と立ちたるを用うべし。



松尾清尢衛門

第五十三回

立花 松除真

松尾清左衛門

松 南天 柘植 水仙 檜木 千両 柏 嫩

南天の実を使うは一瓶に三房五房、あるいは七房八房つかう時は、長短前後たて横となびかし使うべきなり。

ある師の曰く、南天と竹と、しだれ物にて嫌うといえど、しだれざる実を使う時は苦しからずといえり。しかれども竹は四季の景物なり。南天は当季の珍花なり。竹の緑のなびきたるを愛して、南燭の紅にしだれたるをわざとに立て見んも、花道の正道にあらず。

南天の胴作りという事は、古人も指しもらしたる花形なり。しかるに出生を考え、法度をよけ、花形あしらい等を工夫してあらたに指しそむるものなり。



第七十一回

立花 南天除真
竹葉軒治兵衛
南天 松 晒木 菊 小菊 柘植 椿
檜木 嫩

わざとに立て見んも花道の正道にあらず。|| わざと立ててみないのは花道の正道ではない。

「南天は真、請、副に立てる時、かならず風をもたすべし」とはどういう意味だろう。風を感じるように空間を空けるということか。絵図を見してみると、南天の葉や実がたとえ風に揺れても、他の花に当たらないくらいの場がとつてある。

「南天の胴」は前例が無かったけれど、花形やあしらいを工夫して始めて立ててみた、と富春軒は書いている。そしてその絵図が第九十一図である。胴の南天はおそらく前方へ出ている。その出口を柏で隠すのみのシンプルな胴である。南天の葉の広がりや実の姿をすっきりと見せている。また、胴の南天の葉が広がるので、請上がりにして空間を空ける工夫がされている。さらに請と控枝の南天はどちらも変化のある曲がり方をしており、中央で構える南天の胴との対比に面白みがある。そのあたりが、「南天の胴」の肝ではないかと思う。

参考になっている「沈括筆談」について調べてみた。沈括（1031、1095）は中国、北宋の科学者、政治家で浙江省の出身。博学に加えて、従来の知識人がほとんど注意を払わなかったり、記録しておかなかった事柄にも多様な関心を持って多くの著述を残した。「沈括筆談」の内容は多岐にわたるが、特に自然科学と技術の記述は、中国科学技術史上、注目すべき内容と価値を持つ。沈括が晩年を過ごした江蘇省鎮江の夢溪園の名をつけて「夢溪筆談」とも呼ばれる。沈括も富春軒仙溪も、自然を自ら感受しその真理をつかもうとする姿勢が共通しているように感じる。



第九十一図
立花 松除真
南天の胴 富春軒
松 伊吹 晒木 南天 柘植 小柏
小菊 著我

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

小しだ

祝言。水ぎわ。

小貫衆こしだ(多識)。虎巻しだ(同上)。齒朶しだ(同上)。

小しだ通用に立てる。道理いかんと云うに、出生小草にして四時しほまず。春若葉を生ずといえど、古葉おちずして下葉より次第に枯れる。常に山木岸頭がんどうにはえまじりて、郊野こうや沢辺に生ぜず。これ草にして木にまじゆるの道理顕然なり。しからば何ぞ草にまじゆるや。いわく、出生もと草なるゆえこれをゆるす。古来の法なり。

小齒朶は三ヶの前置のその一つにして、秘伝あまたあり。今度に記しがたし。

小しだは立花第一のたすけにして四時用ゆるに、するどなる苔晒木をよくやわらげ、黄楊つげ引



第八十八図
立花 晒木直真
小しだ前置 桑原次郎兵衛
晒木 伊吹 梅擬 松 苔 柘植 小羊齒
躑躅 嫩 柏 檉木

「小しだ前置」は「おもと」「小しだ」「松」の「三ヶの前置」の一つで、「立花時勢粧下・秘曲の図」の中の第八十八図がそれにあたる。
小羊齒は立花第一の助けとなつて四季に使い、苔木や晒木の鋭さを和らげ、強々しい柘植や松の艶となり、窮屈な水際をくつるがせ、だらしなさを引き締めてくれる。木にも草にも相性がいよい優れものとしている。

松のこわごわしきにはつやとなり、水ぎわしま

りたるに優ゆうをあらせ、くだけたるをかたくな

し、裏の白きは下草の色を切り、木にあい、草

によるしく、水ぎわに指さで叶わずは小しだな

り。東国のかたには小しだのなき里もあるとき

けば、水ぎわこそとおもいやり待る。

前置には七枚九枚および十一枚まで用うべ

し。常の水ぎわには、二枚三枚遣うて意気はづ

みを専らに指す流もあり。又五枚七枚遣うて、

自然体を専らに指す流もあり。その変わりあり

といえども、妙所一にして修練なくては指し得

がたし。

小しだとくま笹と両方に指す時は、小齒朶表

ならばくまざさ裏葉を見すべし。景気同意なる

事を嫌う。

しだ火にてよくだまるものなり。葉三枚遣う

時は一本に一枚二枚ずつ付けて遣うべし。五枚

七枚も又この如し。裏表共に葉のなびきを見て、

さかしまにならぬ様に遣うべし。

萩

祝言。上中。

順和名、茅ぼうの字を用う。

和名、月見草。鹿鳴草。玉見草。秋遅草。

天智天皇

けふやかて露も色有初見草きのうの夢の

萩とおもへは

花尽異名

花咲はつれなき人も紅染草色にめてつる

けふやとふらん

藻塩草に顕昭法師の云う、万の草は枯れて、

春よりもえ出て花もさくに、古枝に葉もめぐ

み花も咲、それを木萩という。万葉集に真萩

と書きて木の部に入たり（下略）。これ通用

の証文なり。

通用の証歌

宮城野の露もいろある古枝草此年の秋も

花はさきけり

酴醾やまひぎ

祝言。上中心にならず。

順和名草の部に入。

異名、棣棠花。地棠花。

和名、かがみ草。面影草。

古歌

古里の面影草の夕はえやとめしかか見の

同

名残ならまし

おもかけをたかいにとめし鏡草忘れ衣の

形見ならまし

多識曰く、款冬かんとうは露ふきの臺とうの事なり。しかれ

ども古人万葉集中におおく山吹を詠して款冬

の字を用いる。又朗詠集これに同じ。あやま

りなりとぞ。

庭桜

祝言。上中。

心にならず。本草綱目、朱桜。

てまりのはな
粉団花

祝言。上中。心にならず。玉繡花

小手まり

同前。

こめやなぎ
米柳

祝言。上中。心にならず。

小米花

同前。

黄梅

祝言上中。心にも用いる。

連翹

上(右)に同じ。

第三十七図は真に黄梅の枝垂れが大胆に使われている。副の個性的な紅梅との対比で、黄梅をより優美に見せている。花材の個性を存分に生かす工夫を感じる。富春軒が大切にした「自由」がここにある。



第三十七図

立花 黄梅除真

東湖軒(初版は富春軒)

黄梅 水仙 柘植 椿 梅 ひさかき 苔

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④7

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

みむらさき

祝言上中。心にも用いる。

つる水木

祝言上中。心に用いる。

えびついでばら

非祝言。水ぎわ。

仙蓼せんりょう

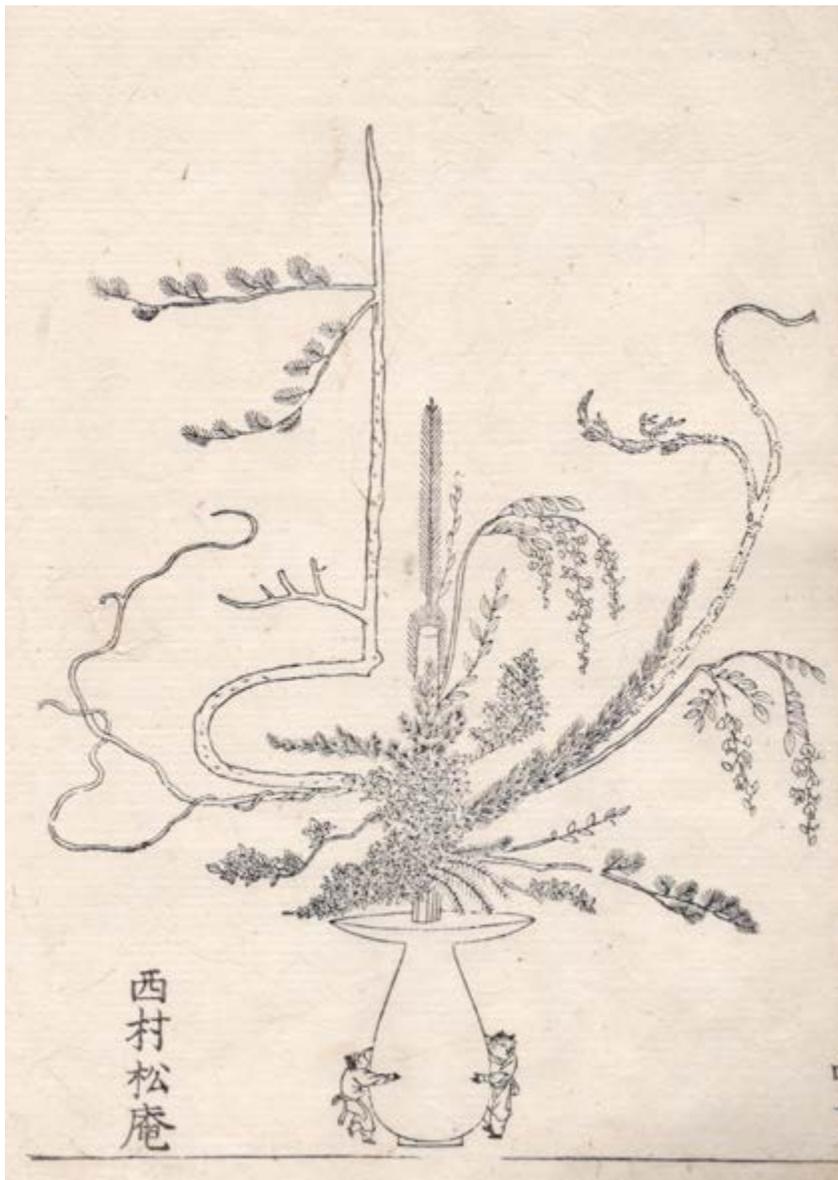
祝言。水ぎわ。

下野

祝言水ぎわより中迄上る。

きじの尾

祝言。水ぎわ。



第六十図
立花 松除真
西村松庵
松 藤 苔 伊吹 柘植 躑躅 小羊齒 嫩

藤が使われた立花図5つのうち残り2つを紹介しておく。第六十図の真の松の異形さには目を見張る。こんな曲がった松が本当にあったのだろうかと思いが、実際の自然は変化に富んでいる。おそらくこのような姿の松があったのだろう。「草木自然の形をそのままに」使い、役枝やあしらいを工夫して呼応させ、それにびつたりの器で受け止めている。中から仙人が出てきそうだ。

しのぶ

非祝言。水ぎわ。

矢筈やはず

祝言。水ぎわ。

磐梨いわなし

非祝言。水ぎわ。

がんそく

非祝言。水ぎわ。

白丁花はくちやうけ

水ぎわ。

岩檜葉いわひば

祝言。水ぎわ。卷栢いわひば（多識）。

異名、万歳ひやうそく、豹足ひやうそく。長生不死草と云う。

ひとつば

非祝言。いわかしは。石葦せきい。



第六十三図

立花 苔除真

服部三郎右門（初版は作者名なし）
藤 苔 松 躑躅 柘植 著我

第六十三図は苔のついた枯れ松の真が立ち昇り、内副に松とそれに絡まる藤の花が美しく優しい曲線を見せている。超然とした六十図と比べてみると面白い。

次頁に通用物の竹の項目に続いて書かれてあった熊笹が使われた二株砂物（第三十八図）を載せておく。特徴のある砂鉢に腰低く丁寧につくられた風景。自然の息吹を見つめる眼差しが感じられる。

荔枝れいし

祝言。水ぎわ。五色の物あり。砂の物ばかりに用うべし。

薔薇しょうび

祝言。水ぎわ。順和名集に波々良、草の部に入。

本草綱目に云う、この草蔓柔らかく牆に依り援けられて生ず、故に牆靡となつくと云々。立て様、椿に同じ。

右通用の出生、和漢の証文明らかなり。通用に二義あり、出生と景気となり。藤、竹、牡丹、萩、南天の類は出生の通用なり。景気の通用と云うは、小しだ、忍しのぎじの尾の類は山草にして、常に木にまじわり生えるゆえ、景気を以て通用とす。この類数多あまたあり。なぞらえて知るべし。

立花秘傳抄二の終

第三十八図

二株砂物 伊吹真

桑原次郎兵衛

伊吹 梅 苔 水仙 嫩 椿 熊世



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④8

立花秘傳抄 三

草之部

草初めて生ずるを艸つうと云う。古文に艸そうの字につくる。艸は百草そうみょうの惣名そうみょうなり。説文註曰く、草の字を用いるは非ひなり。草は計櫟とれきの実なり。今の俗、艸木の艸と為す。艸そう通じ用いる事久し今改むべからずなり。

説文に枝柱しちゆうなり。枝莖しきより生ず、故に枝柱と云う。又曰く、草を莖えいと云う、竹を筒とうと云う、木をば枝と云う。

花爾雅じがに云う、木これを華はなという。草これを榮えいという。花実はならざるを英えいという。
あだはな

金錢花きんせんか

祝言。水ぎわ。金錢花きんせんか(形によりて名付く)。

異名、長春菊ちようしゆんく(花のさかり久しきにより名付く)。

惣名ニ総稱。

説文ニ説文解字。中国最古の漢字字書。後漢の許慎の著。

計櫟とれきニ？。

爾雅じがニ中国最古の辞書。

この花四季ともにあるといえど、霜ふり月の頃より二月ふたつきまでは、ことさらに葉も茂り花もかつ咲きて、前置、草どめによろし。水仙一色の前置に専らこれを用いる。針金を莖えいに通し遣うべし。

露花ふきのとう

祝言。水ぎわ。

異名、款冬花かんとうか(冬にいたりて花さけばなり)。

虎鬚草とらのひげくさ(かたちによりて名付く)。立て様前におなじ。

著莖しやが

祝言。葉是水ぎわより中まで上る。花を中まで上る時は、下に葉をあしらうべし。仮葉かりはの時は上までも用うべし。

異名、故蝶花こちようか。和名、こやす草。

著莖は四時しばまざる草にて木にあしらい、草にまじえて、重宝なる物なり。古人も著莖は立花たすけの輔たすけなりといえり。然れども近代の人、檜

扇を専らと遣うて、著莖を用いざることは、至りて面白き所あることを知らざるものか。

著莖の葉を水仙、杜若にかり用いる時は、三枚とつぎきたるをそのまま仮るべからず。一枚づつもぎ葉にして借るべし。三枚とつぎきたる時は、著莖の気色にみえて水仙、杜若の葉とは見ゆべからず。

著莖の借葉かりはは鶏頭花けいとうげ(一枚高く用いる古法)、水仙、杜若あやめ、菖蒲あやめ、一八、花菖蒲、似たるをもつて借るべし。

著莖の葉先あしくとも裁ちつくりて用いる事大いに嫌う。

ぬけしやがと云うは、胴、正心に木を立て、副請に草を立てる時は草の縁えんきれるなり。然るに正心の前に著莖を高く立てのぼすときは、両方の草これ著莖を媒なやかたとして縁切れる事なし。

控葉ひかえというは、葉のあつきをえらび、白根の少し上より切り、似たる葉二枚とりあわせ、生竹の皮目をうすくひらめに削り、根もとのあわせめある所より指し込み、小刀の刃を筋違すじかいにて折り付けて用いるなり。



著莖の出生は外葉長く中ほど短し。名付けて鳶尾草えんぴという。瓶に立てる時そのまま用いるはとびのお作意なきゆえ、一枚つつもぎて、扱出生の道理にかなうように立てるを生著莖と云う。出生にそむきたるを死著莖という。三枚立てる時は立葉必ず用うべし。葉先枯れたるもおもしろし。

高麗菊

祝言。水ぎわ。春の立花には賞翫の物なり。



第三十九回

立花 松除真

桑原次郎兵衛

松柏 著莖 芍薬 柘植 要 熊世 小菊

針金を通して遣うべきなり。

鴨脚花

祝言、中より遣いて水ぎわまで下る。

異名、紫羅傘。

この花出生直なるゆえ横へはいだすべからず。自然横へ出すべき景気の花ある時は、まず一本すぐなるを立て置き、横へも出すべし。杜若、あやめ、莞草、鶏頭花、すかし百合草、姫百合草、水仙、女郎花、藤ばかりかま、きすげ、しおん、あふひ、がんび、せんろう、紅花の類いづれもこれになぞらえて知るべし。

あやめ

祝言。前に同じ。あやめとは菖蒲をいえど、

俗専らこれをあやめと呼ぶなり。



第四十図

立花 梅擬除真

桑原次郎兵衛

梅擬 薄松 柘植 椿 夏櫨 柏 著莪

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ④9

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

美人草

祝言。前同。虞美人花と云う。(虞氏とい

う美人の塚より生ずる故なり)

異名、麗春。

芥子花けしのはな

祝言上に遣いて中より下る。

異名、嬰粟花おうぞくか。米囊花。

この花散りやすき物なれば、所によりて用捨あるべし。紅白紫いろいろ取り混ぜ指す時は、一種一種立て分け、色取りよく花ごとに働きあるように立つべきなり。

うつぼ草

祝言。水ぎわ。

和名、うるぎ。

春菊

祝言水ぎわより前置のすこし上まで用うべ

し。

異名、蒿菜花。

第二十八図

立花 伊吹除真

除心の内草の花形 相田湛流

伊吹 杜若 薄 柏 姫百合 榿木 柘植

夏櫛 著我 檜

全118図のうち、杜若は30作に使われている。春のツツジやシャクヤク、夏のユリ、秋のケイトウ、キクとの組みあわせがある。第二十六図は「除心草の花形」の中の一つ。初夏の立花。



銀宝珠

非祝言。水ぎわ。法師に詞通ずるゆえに祝言にあらざるなり。

異名、玉簪花。大菊大蘭。白羈仙。

花は中まで立てのぼせ、葉は水ぎわにあしらう。裏葉、表葉、やれ葉、大小とりまぜて三枚ばかり遣うべし。尤も陰陽の心得あり。水ぎわにて茎きれいに見するを第一とす。

杜若

祝言上中に使う時はかならず水ぎわにも遣うべし。これ水草なればなり。

本草綱目図する所は、日本のかきつばたにあらず。藕敬そけいが本草の註に劇草かきつばた、一名馬蘭と云々。順和名集に劇草の字を用いる。

異名、紫菊。かほよはな。

齋宮花尽の異名の歌

夏草のおほかる中にかほよはな折袖までもむらさきになる

杜若真の一色というは、前置までも残らず杜

若にて立てるなり。然れども前置になる杜若なき時は、ほかの草花をもつて前置にする。これを草の一色と云う。口伝。

杜若の一色すずきに薄の葉を借り用いる時は、一枚ずつもぎ葉にして二枚を二所に借るべし。葉二



第九十七図

立花 杜若一色

杜若一色(の真)

杜若 著我 ※ () 内は初版

寺田清左衛門

枚と付けたるは陰陽そなわりて、全体薄と見ゆることを嫌うなり。

杜若一色を立てんとおもわば花多く調え、白き、紫、つぼみ、中ひらき、盛りの花茎の曲直、葉の能をえらんで、同意長くらべという事を第一と心得て指すべし。然りといえど師伝と巧者の二つかけては指し得がたし。

同一色には白き花をすくなく、紫をおおく用うべし。紫は正色、白きは変色なり。花の彩つづき面白く、混乱せざるように立てるを第一とす。

杜若正心に用いる時は花より葉を高く、花より葉を多く用うべし。

杜若の花数すくなき時は、一八、花しようぶなどをかるに、一本かる時は大き方にひかれて杜若となるなり。二本かる時は杜若にならず。

かきつばた紫白の種かわりたりといえど、祝

言の花の時は紫白合わせて、四本六本立てることを嫌う。他これになぞらえて知るべし。

杜若の葉はひらめによく見ゆるように指すべし。又葉を横へ遣う時は、茎の中ほどに付きたる葉をえらんで、茎をためて思うように遣う時

第九十八図

立花 杜若一色

杜若一色(の行) 桑原次郎兵衛

杜若 河骨 著我 ※ () 内は初版



は、水をよくあげ葉もしおれざるなり。茎のためようは両手にて押し寄せ、すこしねぢつため、そのため口へ頭より竹くぎを打ち込む時は、ためもどらざるもの也。



杜若ためようによりいろいろにくるうなり、口伝。

杜若盛りの時分ならば、正心、請、副に用うべし。四季咲き又は残花などには立てようあり。



「立花時勢粧下」に秘曲の図として掲載されている7つの「一色」の一つに「杜若一色」がある。杜若一色では前置を変える場合、杜若が水草なので同じ水草の河骨こぼねが使われている。茎の撓め方が詳しく書かれている。両手で押し寄せながら少しねじって撓めたところへ、竹くぎを刺すと撓めがもどらない。さらに撓めによって色々に狂う（花茎が曲がる）ことを教えてくれている。

第九十九図

二株砂物 杜若一色
杜若一色の砂の物 西村松庵
杜若 河骨 著我

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑤

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

きすげ

祝言。中より水ぎわまで。

一名、金萱花。

姫萱草ひめかんぞう

祝言。中より水ぎわまで。

石竹せきちく

祝言。前置の少し上より水ぎわに用いる。

異名、瞿麥くはく。千葉なるを洛陽草なでしこといい、万葉なるを四時草なでしこという。

和名、日暮し草。袖むれ草。

古歌

から国に有けることはいさしらすあつま
のおくに生る石竹

薊あざみ

非祝言。水ぎわ

異名、千針草せんしんそう。姫あざみ。

はりのなきをいう薊あざみと眉まゆと二草二名か
未だ考えず。

第四十七図

立花 松除真

桔梗屋平右衛門

松 杜若 芍薬

要 小菊

薄 柘植 躑躅



桔梗屋平右衛門

綽約||姿がしなやかで優しいさま。

花菖蒲

祝言。上中に使う時は水ぎわまで下げる。

異名、白昌はくしやう。水宿。

和名、吹喜草ふきく。

万葉集

大内や玉の軒ふくふきく草おほくの千世
にひかれてやこん

花遣い葉つかい杜若に同前。

芍薬

祝言。上中。

本草綱目に云う、芍薬は綽約、猶花なほの形綽

約より以て名となす。又牡丹を花王と云い、

芍薬を花相と云う。(花相は撰政関白の位な

り)

順和名、衣比須久須里えびすくすり。ふかみ草。はつか草。

かほよ草

芍薬は花の色おおき物ゆえ取りまぜ遣つかいて苦

しからずといえど、今様これを用いず。白き花

は白き花、紅は紅とその種をえらび三色にても

五色にても、縁つづきありありと混乱せざるよ

うに立てるを吉とす。

芍薬を立てる時はやわらかなる心を用うべ

し。芍薬美花なるゆえ、ふとくいやしきは不相

応にて見悪なり。

第四十八図

立花 松除真

大坂屋五郎左衛門

松 晒木 芍薬 柏 栢植 要 小菊

杜若 薄



芍薬の葉 古代はしげく付けて立てるを本意とす。然るに近代は大輪なる花多く用いるを規模とするゆえ、おのづから葉つかい薄し。ただし一方あつくは一方うすく景気よろしく立つべきなり。

花のうつむきたるを遣うとも、葉は出生のごとく天をうけさせて遣う時は死花にあらず。

芍薬水ぎわまで下らずといえども、残花になりては控枝のあたりまでも苦しからず。諸花しよかざん残になりては短く咲くゆえなり。

芍薬みじかきを高く遣う時は、筒をこしらえ遣うべきなり。又芍薬遠方より求め来たらば、根をやき箱に入るべし。すこししほるとも水に入ればものごとくなり。

「立花時勢粧 下 秘曲の図」に「草花」の立花図がある（第九十五図）。春の訪れと共にいつの間にか草が顔を出している。茎を伸ばし葉を広げ花を咲かせる。そんな草花の生命力を感じる立花図で、彩りの要に2種の芍薬が生き生きと描かれている。

第九十五図
立花 芦除真
草花 僧光清（初版は富春軒）
芦 薄 百合 芍薬 杜若 小菊 熊笹
紫苑 著我



立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑤

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

早百合草さゆり

祝言。真に立てず。また出生、直ならざる
ゆえ正心に立てず。請、副より遣い下げて控
枝までさがるなり。

この花早く咲くをもってこの名有り。

笹百合草。(その葉笹に煮たるをもって名
付く)

本草綱目に云う、専ら百病を治す、故に百
合草と名付くと、云々。

この花たおやかに葉つき面白し。一瓶に五本
七本つかうとき同じようにならず。ひらきたる
花、つぼみ、中ひらき取りませ、請の花空にむ
かいたらば副はうつぶき、右の方後ろむきたら
ば左は前にむかわせ、葉出生そむに背かず取り合
て一面に見る時、花々よくおもいあいたるをよ

しとす。もし一輪にても、外の花と不相応なる
を独遊どくゆうとて嫌うなり。
じりあそび

早百合草は花のしべの黄なるをとらざれば花
そまりて見ぐるし。



第四十二回

立花 松除真

濱崎九左衛門

松 晒木 百合 柏 夏はぜ 柘植

小菊 小羊歯 杜若 著我

葉たれさがる事あらば、竹のはりを指して葉並びをつくろうべし。たむるには針がねを用いる。

姫百合

祝言。

上より遣いさげては、水ぎわまでさがるといへど短く指すことを嫌うなり。

異名、山丹花。さんたん 連珠。れんしゆ 紅花菜。こうかせい

和名、ひかり草。

古歌

夏の野を心しつかにわけ行は花とおとろく日かり草かな

姫百合やわらかなる物ゆえ、正心に立てる時は物にたよらせて立つべし。惣て草の正心には後ろより松をあしらう師伝なり。

洗百合草すかしゆり

祝言。心に用いず。上中。

越後すかし。べにすかし。そとの浜洗。心に用いる百合草はこの三色ばかりなり。

あたご百合草
祝言。上中。

さかりゆり

祝言。上中。



三好理兵衛

第四十三回

立花 晒木除真

三好理兵衛

晒木 松 百合 薄 菊 檉木 夏はぜ

檜扇 小羊齒 伊吹

ためども
為朝百合草

祝言。上より中まで。

鬼百合に対して名付く。富士ゆりとも、うたゆりとも所に替わりて名異なるなり。

鹿子百合草

祝言。上中。

この百合草水ぎわに遣うことを嫌うといえど苦しからず、口伝あり。然るに当世は習いもなく遣いさげる。似たることの似ぬ事なり。この花にかぎらず大輪なる花、遣いさげて苦しからず立てようあり。師に会つてたづねるべし。

百合が使われているのは13作。そのうち3作を紹介する。第42図は再掲載となるが、太い松の幹と晒木に百合と杜若が添い出ている。第43図は百合、菊、檜扇が太い晒木と共に立てられている。どちらにも晒木が使われて、山間の草地で咲く花の風情をよく捉えている。第44図、45図は床脇の棚の上下2作で、棚の上の胴束と呼ばれる小型で横長の立花に百合が使われている。棚の下のどっしりとした株分け砂物には杜若がいけられている。棚の下に杜若、上に百

合という配置は、麓の水辺から山中へと続く景色の移り変わりを感ぜさせる。

百合の蕊は取るように書かれているが、現在ではきるだけ残して自然を損なわないようにしている。

第四十四図(上)

胴つか(胴束) 檜除真

知休

檜 松 百合 檉木 夏はぜ 著我

第四十五図(下)

二株砂物 松真

中川常意

松 檜 苔木 伊吹 晒木 杜若 柘榴

熊笹 小菊 著我



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑤②

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

葦あし

祝言。上中より下まで用いる。

初めて生なざるを葎かと云う。蘆ろは未いまだ秀ひいでざるを云う、成長したるを葦あしという。花を蓬ほうのう蘩ふと云う。

和名、氷室草。なには草。さどれ草。

古歌

難波にはあしというなるひむろ草代々の
ためしにかかる葉もなし

芦は出生直なる物なれど、除心に用いる時は
ふとき針がねを通してたむるなり。請、副には
大よ用に葉の茂りたる物、又みきくるいたる物
など取り合いよし。心の出し所、著我、檜扇の
陰よりやわらかに出したる景気面白し。

芦の心は風をもちたる景色あらば、瓶にのせ



第七十六図
二株砂物 苔真
谷久兵衛
芦 松 晒木 苔
杜若 夏はぜ 熊笹
柘植 檜扇 童胆

ざるもおかし。葉長くしおれたらば断ちつくり
い、又しだれたらば竹針にて茎へとちつけてよ
し。

芦は出生しげき物なれば、二本三本を以て心
とす。上より遣いくだしては流枝にも用いる。
或る人の云わく、芦は流枝までは下げ用いずと、
然れども出生水辺の物なれば、当代専ら流枝に
用いる。

古歌

あさき江にねはあらわれて流れ芦のしほ
のみちひにたよりまちける

芦をたむれば茎くだくる物なり。その上を紙
にて巻き、さいさい水をかけざれば、はやくし
ほるるなり。

蒲がま

祝言。上中。

香蒲たけのこと云い、筍ほじやくを蒲弱ほじやくと名づく。花の上の

黄粉ほおを蒲黄ほおと名づけ、又蒲槌ほつという。

和名、花かつみ。

古歌

東路とうろやいかほの沼ぬまのはなかつみかつみし
人に恋こひやわたらん

蒲は先に勢いなきにより流枝に用いず。

第五十八図

立花 蒲除真

十二屋善兵衛

蒲 夏はぜ 松 苔 杜若 栢櫃

桔梗 熊笹 著我



葉遣い薄すすぎに同じ。茎に付きたる葉を以て思おもうように使うべし。なびきあしき時は小刀のむねを以て、しごく時は自由に靡なびくなり。

つくも

非祝言。上より中まで。

本草綱目、三稜さんりょう。

和名、江浦草えうそ。丸すげ。大蘭ともいへり。

古代用いずといえども、このころこれを立つ。

針金を入れて遣うべし。

葦あし、蒲がま、つくもと水辺の植物が続く。

葦は6作で使われ、その内4作は葦の真しんである。第76図は半ば朽ちかけた松の陰から葦や杜若かまつばらが生えている。葦と松が片方へ長く伸び広がるのを、太い晒木とぐいと曲がった太い松でバランスをとっている。もはやどれが請でどれが流枝といったことではなく、自由で絶妙な調和がある。

蒲は2作で使われている。第56図は蒲の真しん。蒲の葉が上方で伸び広がっているので、他の役所は変化を抑えているが控枝の苔木にこぶしをきかせている。

第36図は二株砂物でつくも（太蘭ふとらん）の真しんである。現在では真しんで直ぐな印象のつくもだが、自然に曲がったものを採取して立てたものと思われる。



第三十六図

二株砂物 太蘭真

富春軒

太蘭 芍薬 松 晒木 杜若 小菊 著我 嫩

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑤③

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

蓮れん
はすのはな

非祝言。一色の外用いず。

花を芙蓉ふきようという。葉を荷葉かようと云い、茎くきを茄かと云い、その本を密みつと云い、未だ開かざるを菡萏かんたんと云い、その実を蓮れんと云い、てき中を蓮肉れんにくと云い、実ぬけたる跡を蓮房れんぼうと云い、花の中のしべを蓮蕊れんすいという。根を藕くうと云う。

本草綱目に云う、花葉常に偶生ぐうしょうす、偶ならざれば生ぜず、故に藕くうという。

異名、芬陀利花ふんだりけ。風露良ふうろうりょう。

和名、露瓊草つゆたぐさ。池見草いけみくさ。つまなし草。

古歌

影うつす花やくもらん池見草波にかかり
て青葉そひつ
なひきつつ花や咲らん露瓊草折ぬ枝にも
風のためれば

てき||無漢字(草冠に的)



蓮花は水中出生の物なれば草木に立てまぜては池中の景気瓶上けいけいびんじょうにうつらざるゆえ、一色物いちしきものならでは立てる事なし。然れども蓮花一色にて立てるを真の一色といひ、水草を立てまじゆるを草の一色と云う。

第百図

立花 荷葉一色
荷葉一色(真) 桑原次郎兵衛
蓮

蓮に立てまげて苦しからぬ物、芦、蒲、つくも、杜若、河骨、一切水草のたぐいこれを用いる。又古来菊を前置に用いる。水に縁あるゆえか、このほか陸物を立てまげる流儀もあるといえど、花道の正理にあらず、景気もあしければ当流に用いず。

蓮花は浄土の莊嚴仏心の譬喩たり。しかれば立花にも三世不可得の理をそなえて秘伝とす。蓮花のみにかぎらず、もろもろの花三世の理あらずという事なし。蓮花に限りてその名あること。立て様秘伝なり。



しもく葉の事、うき葉の事、花つかいの事、

葉遣いの事、蓮肉つかいの事、伝受あまた有り。

蓮の一色は開き葉多く、巻き葉少なく立てること池中の景気なりといえど、開きたる葉はしおれやすくして賞翫薄し。古来より巻葉半ひらきを以て一色を成就する物なり。ある師曰く、



第百一図
立花 荷葉一色
荷葉一色(行) 富春軒
芦 蓮 小菊

半日の客には立つべし。終日には遠慮すべしとぞ。

蓮の一色立てんとおもわば、自ら池辺へいきて開葉、中ひらき、巻葉、やれ葉、こげは、蓮肉、花は赤白、或いは茎風流なるを見立て切るべし。しからずば立花に心得ある人を遣わすべし。花屋といえど巧者なくては切るべからず。

蓮を立てるには先ず込みの真ん中に細き竹を一本つよく立て置き、初め四五本は竹へ結び付け後は竹針を以て茎より茎へとじ付けて立つべし。すぐなるは竹を通し、横へさすは針金を入れて自由に遣う。込みへ茎を指すことなく、こみきわより立て、竹はりがねの余りたる所を二寸ほどにして指し込むなり。

7つの一色の内、杜若、菊、水仙、松は一色以外にも多く使われているが、蓮、紅葉、桜の3つは他の絵図には見られない。紅葉と桜は特別な存在なので。蓮は水中で生育するという出生を重んじて。ただし芦や蒲、つくも、河骨など同じ水草の類は立て混ぜても良いとしている。また古来より菊だけは前置に使うことがあるとして、実際に絵図にも使われている。

第百二図
一株砂物 荷葉一色
荷葉一色砂物の物 寸松軒（初版は富春軒）
蒲蓮



しからずば二寸ほどなければ

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑤4

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

河骨

非祝言。水ぎわ。

異名、水鏡草。金蓮子きんれんし

はりがねを入れて遣いてよし。葉しおれやすき物なればつはの葉をかり用いる。惣じて

水草水ぎわに遣うに口伝有り。

蓮花、河骨、水あおいなどは池にて切る時

糸にて茎をつよく結び置いて、その下より切るときは久しくしおれざるなり。

紫苑しおん

非祝言。花は上、葉は下、広葉の類さし合

いなり。

之於爾しおに。

異名 返魂草へんこんそう

和名 おにのしこくさ ひとしくさ

花を正心に用いる時は下にならず葉を遣うべし。花ばかりは遣わぬなり。葉ばかり遣う時は胴より上へは用いず。出生直なるゆえ、副、請に用いず。葉を遣う時は大小をとりまじえて、陰陽を遣いわけてよし。葉使い柏の意気と同前なり。

萱草かんそう

祝言、心にも用いる。上中。

時珍曰く、萱本諼に作る、諼は忘なり。さるによつて和名にもわすれ草と云う。

一名宜男きなん。懷妊婦人その花を佩おびれば則ち男を生ずと云う。

忘憂草。人の憂いを忘れんと欲するにこれを服す故に之を名付く。

ある書にこの花を祝言にあらざると云えり。忘るといふ名をいむか。この花名の由来をしらざる故なり。療愁草としてその徳ある草なれば目出

河骨は杜若一色の下段に使われている。それらの絵図を見ていると、まさに沼や池の景色が目につく。河骨の花の黄色が、杜若の紫色と白色によく映っている。



第九十八図

立花 杜若一色

杜若一色(の行) 桑原次郎兵衛

杜若 河骨 蒼我 ※()内は初版

度きものなり。

萱草膏より立て置く花ならば、明日開くべき花を指すべし。ひらきたるはしほみ、つぼみは開くことはやきものなり。必ず下に葉をあしらうべし。

萱草を真にした立花図には萱草の葉と共に紫苑の葉が効果的に使われている。手彩色のされた図を見ると、萱草の黄色に桔梗の紫色、嫩葉の赤色が効いている。

第十六図

立花 萱草除真
除心の内行の花形 中流枝立 寺田清左衛門
萱草 苔 松 桔梗 檉木 小菊 紫苑
著我 嫩葉



第九十九図

二株砂物 杜若一色
杜若一色の砂の物 西村松庵
杜若 河骨 著我

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑤⑤

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

葵あおい

祝言しんげん、心にも用いる。中迄下る。

側金盞花そくきんざんか、蜀葵からあおい。

和名、かたみ草。

古歌

我思ひうつりて花の咲ならばかたみ草と
は何をいはまし

葵の心しんは赤白をまじえ、正心ともに三本或いは五本立つべし。出生直にして働きなきものなれば、請、控枝、流枝にて花形風流に取り組むべし。

葵の花は下より早く開きて、上ほど次第につばみにつづきて見事ならず。正心に用いる時は中ひらきの花のあたりより茎をきり、その切り

目見える時は、うつむきたる花を竹はりをもつてあおのかせ、切り目みえざるように、花の精よろしく指すべきなり。横へ遣つべからず。

第六十八図

- 立花 芦除真
- 寺田八郎兵衛
- 芦 葵 松 柘植 擬宝珠 要 小羊齒
- 小菊 杜若 百合 檜 鳶尾



桔梗ききょう

祝言、心にならず。

上中下。

異名、利女。房図。

古歌

木の葉をもうらにうたはや一重草葉もう
すやうの露はおけとも

この花里に作りたるは、花しげく莖ふとく、
野にはえたるは花すくなく莖ほそく立花によ
ろし。白、むらさき、八重、一重、それぞれ
に縁おもしろく、直なるは立てに遣い、たお
やかなるは横につかうに、針金をそえてたむ
る。急にたむれば早くしおれるなり。

女郎花おみなえし

祝言、正心にも用いる。

上より遣いさげて前置の上まで下る。花莖
の上に咲いて高くはえる物は、短く指すべか
らず。ほかこれになぞらえて知るべし。

和名、女倍之おみなえし。おもひ草。

雁緋がんぴ

祝言。中横に遣わず。

異名、剪羅花せんらか（葉ならび生じて剪のごとし）。

又花の形まどかにしてはさみなすがごとし、

第五十八図

立花 梅擬除真

西村松庵

梅擬 薄 松

桔梗 檜扇

仙翁花 栢植 熊笹 柏



故に名付く。

松本仙翁花

右に同じ。

仙翁花

祝言、正心より中まで下る。

漢宮秋。嵯峨の仙翁寺より始めて出る故に
名付くと云えり、覚束なし。

和名、紅梅草。

古歌

秋の野の紅梅草の色みれは春の心をまか
せつるかな

右の三花は、本一草なれども時節遅速あり、
花も多少あるゆえ後人これを名付けならし。
この花、瓶に指して水を欠くれればしおるる也。

正心に用いる時小輪なるは宜しからず。二本
にても三本にてもくみあわせて立つべきなり。



第十図

立花 松除真
除心の内行の花形 流枝持立 富春軒
松 苔 百合 仙翁花 著我 木槿
栢植 嫩 小羊齒 桔梗

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑤6

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

檜扇ひのうぎ

祝言。心に用いる。上中下。

射干からすおろぎ (弓の長竿の形のごとくなるによりて名付く)。

扁竹 (その葉偏生にして根竹のごとし)。

鬼扇きせん 他人掌しやう 鳳翼ほうよく (みな形によりて名付く)。

藏玉集

よもぎふはさることなれや庭の面から
す扇のなと茂るらん

檜扇瓶毎に用いるといえど、能く遣う人まれなり。初心の内はかこいに用い、間あきをふさぐ物とのみおもうにより替わりたる手もなく、意気はづみも出きざるなり。巧者は心を付けて指すべき事なり。



草花砂物草

中野氏

第百十八図
 一株砂物 檜扇真
 草花砂の物草
 中野氏 (初版は富春軒
 溪)
 檜扇 芦 杜若
 仙翁花 百合
 擬宝珠 小菊 桔梗

檜扇を多く遣いたる立花には、大葉はたらかず、又芍薬に取り合いよろしからず。よくよく心を付けて用いるべし。

薄^{すすき}

祝言。上より遣い下りて中までも下る。通用にあらず。

蕉草。大きなるを芭蕉と云い、小さきなるを石笔と云う。

和名、尾花。袖波草。乱草。

立花名、萩すすき。冬薄（冬がれせぬすすきなり）。

高倉院齋合歌

我宿の庭にまれなる露會草かたよるはかり風やわたらん

天智天皇花尽異名

水はなし風にこそたつ波はたたた^{しき}沢波草を折にまかせよ

薄の心は葉付き面白を見立て、もしはたらきなき時は二本合わせて一本に見ゆるように細工して指すべし。又心にうら葉ばかり見ゆる時は、

表葉を外にあしらうべし。

薄は葉多く付きたりとも、茎一本に見ゆる時は陰陽不合とてこれを嫌う。たとえ葉一枚立てるとも茎を見せずして立てる時は二もとど見なし



第十九図

立花 薄除真

除心の内行の花形 左流枝立 林昌

薄 菊 松 梅擬 熊笹 柘植 小菊

夏はぜ 小柏 著我

てこれをゆるす。



薄ひらめに遣うをよしとす。副ばかり、請ばかりに遣うを片なびきという。心、請、副と両方に立てるを両なびきと云う。片なびきは古風なり。もろなびきははたらきあり。さりながら法度にあたる事多し。

薄二枚三枚遣うとも、茎一本に葉をいまいづつ付けて遣えば、葉のはたらき自由なり。又茎をたむる時は頭より竹釘をさせばためもどらず。

すすきは副、請の物とばかり思いて遣う時はわかりたる手もなし。つや、あしらいなどに遣

う時は珍しきもあらかし。

唐黍

祝言。上中。

玉蜀黍。蜀黍とうきび。葉使い薄に同じ。



第六十四図

立花 梅擬除真

筑摩九郎右衛門

梅擬 薄松 松笠 菊椿 柏水仙 嫩

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑤7

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

鶏頭花けいとうげ

祝言。心、正心。

鶏冠花けいとうげ、掃帚そうしゆう、扇面せんめん、瓔珞等ようらくの名あり。皆この花の形を以て名付く。

鶏頭自然と横へ生えたるあらば、副にも用いる。心、正心にかぎらず、三本立てる時は二本は同色、一本は色かわりても苦しからず。三本ともに色をかゆる事をきらう。

鶏頭は花おもき物ゆえ、心に用いる時はひくく立つべし。正心に用いるは扇面を取りまぜ遣うべし。花の丸きばかりははたらきなし。梅もどぎ、水木などに立て合わせる時は、白色黄色を用うべし。

旋覆花おくるま

祝言。水ぎわ。

多識に、かまのつぼ (小車高き草なりといえども古来水ぎわに用い来る。)

直心立之内草之花形



第六図

立花 鶏頭直真
直心立の内草の花形 桑原正栄 (初版は
富春軒仙溪)
鶏頭 柳 梅擬 菊 夏はぜ 擬宝珠
檜木 檜扇 伊吹

黄精おうせい

祝言。水ぎわ。

和名、おほえみ。あふし。

蒲公英たんぽぽ

祝言。水ぎわ。

多識に、たんぽぽ大丁草。

異名、きんざんそう金簪草。

紅花

祝言。中より水ぎわまで。

多識、紅藍花。

和名、すえつむ花。

だんどく花

非祝言。心に用いる。上中。

心に立てる時は正心に立て、或いは副下、

請下へ葉ばかりをあしらうべし。うこん草同

前なり。

第五十図

立花 鶏頭直真

恭圓

晒木 檉木 柏 檜 蒼莪
鶏頭 芦 菊 薄 梅 擬 柘 植 松



恭圓

黄精 鳴子百合?

だんどく花 カンナ の原種

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑤⑧

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

菊

祝言。心しんに用いず。大輪は上より中まで。

中輪は中より水際まで。小輪は水際ばかり。

菊の字本鞠じもとまきくに作り鞠まきくに従う。鞠まきくは窮きゆうなり。

秋に至りて万花窮まなはきゆう尽しんす故之を菊と曰まをすう。

異名、隠君子いんくんし。紫毬しきゆう。

和名、かわらよもぎ。百夜草。契草しぎくさ(古事

を以て名づく)。菊草あきしべくさ。星見草。

承和菊そがきくと云うは黄菊なり。これ菊の正色な

るゆえ帝愛し給うとぞ。

蔵玉集

長月の九日に咲いので草花は八重にてよ

ろず代や経ん

浅ちふもましる草葉もかるるまで野にの

こりける秋しべの花

名にしあふあつまの野べのこかね草これ

窮尽きゆうじん＝きわまる (心に用いず＝菊一色以外では真に用いないという意味か?)



第百三回

立花 菊一色

菊の一色(真) 桑原次郎兵衛

菊 小菊

もみつきの数につままし

一色の心はふとく葉茂り枝多きをよしとす。大輪の菊にはまれなる物ゆえ、古来中菊をゆるして今も指すことにこそ。然れども大輪小輪上下相そむき、出生の景気うつらず。当流これを用いず。

一色を立てる時、流枝になる菊まれなる物なり。胴作りには葉菊とて猩々、加賀紅、大津物ぐるい、などの花さかぬ葉ばかりの茂りたるを用いる。これをしかみ葉とも云う。

菊の一色、近代は初心の人もみだりにこれを指す。誠に似たる事の似ぬ事なり。たとえ裏菊をさしたりとも、いかなる道理あると云う事を知べからず。又道理を知りたりとも一瓶の菊、ことごとく意気はづみ、色、つや、うつりよく大中小花の品々をわかち、一種一種の色どりよく、うすからず、あつからず、しかも花形風流に指し得る事かたかるべし。惣て一色物は、師伝と修練との二つかけては叶うべからず。



第四百四図
立花 菊一色
菊の一色(行) 富春軒
菊 小菊

一種の菊を請、副に両方へ遣う時、縁のつづけ様口伝あり。

菊の葉遣い綺麗に見せんとて、一枚一枚糸もてくくりつくろいたるは、さぞや造作ならめと見る目もいとくるし。名ある人のせざることなり。

菊は花より葉の能しを賞翫とす。葉しおれたらば一夜さかしまに井に釣るべし。茎にゆがみあらば火にてため、或いは竹を結びそえ、横へ出すは針金を用いる。小菊は紙をまきてその上をたむる。



第一百五図
立花 菊一色
菊の一色砂の物 専定寺(初版は眞春軒)
菊 小菊

立華時勢粧りつかい まようすがたを読む ⑤⑨

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

寒菊

祝言。水際。

霜見草。秋無草。残り草。

藏玉集

幾代へし松の木陰の霜見草うへけるととき

をたれも知らねは

水仙一色の前置に必ず用いる。口伝。

われもこう

祝言。上中。

かるかや

祝言。上中。

この二草を通用に遣うは誤なり。

おほなこか草かる岡のかるかやはしたお

れにけりしとるもどろに

このふた草は、花も咲かず冬もなければ、た
おやかに幽美にして名高き草なれば、木にあ
しらひ、草にまぜてつやとなり、色と成りて
景気面白き草なり。指す人よくよく心を付く
べし。

第五十七図

立花 松除真

圓音

松菊 小菊 梅擬 晒木 柘植

柏 熊笹 嫩



粟

祝言。上中。

食物は立花に嫌うといえど、粟はやさしき物にして古来草花立てなどに用いる。常の花にはさのみ好むべからず。

古歌

ちはやふる神のやしろのなかりせは春日
の野へに粟まかましを

駒つなぎ

祝言。水際。

異名、狼牙。ろうが

沢ききよう

祝言。水際。

かよの出生ひくく横へばかりはゆる物は、水際によこへばかり長く出しても苦しからず。

花材解説もあと少しとなったので、掲載できていない立花図を紹介していく。第五十七図はおもに松と菊と柏で構成されているが、特に控枝の松の太さが目を引く。

第八十九図は「立花時勢粧・下 秘曲の図」の内の「松の前置」の立花図である。葉の短い、いわゆる良く締まった松を水際だけに使い、中段から上は檜の世界となっている。松の後ろに広がる幽玄の世界という趣である。ここでも控枝（定位置とは逆側）がいい味を出している。立花時勢粧の立花図には、控枝に重点を置いたものが少なからずある。作者の意図を想像するのが楽しい。



第八十九図

立花 檜除真

(松の前置) 富春軒

檜 晒木 沢水木 水仙 松 苔

枇杷 檉木

立華時勢粧りつかいまいようすがたを読む ⑥

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

犬子草えのこ

祝言。水際。

古歌

えのこ草おのかころほに出て秋置露
の玉やとるらん

瀆木綿はまゆわ

祝言。水際。

蘭らん

祝言。前置の上まで。

和名集、水香。本草、沢蘭さわらん。

藤ばかま

祝言。中段。

通用にあらず、横へ出す。



第二十八図
立花 梅除真
除真の内草の花形 中塚半之丞
苔 梅 嫩 松 蘇鉄 椿 柘植
水仙

蘇鉄が請、胴、控枝に使われた珍しい立花。紅梅、水仙、白椿が色を添え、真に苔木（梅）を大きく使うことで、蘇鉄の存在を生き生きと際立たせている。
正心の真後ろに立ち昇る傘松も珍しい見越の立て方で、それによって蘇鉄の葉の働きが強調されている。

古歌

朝またき誰きてみよとふちばかま玉ぬく

露のさかりしつらん

鼠尾草 みぞはぎ

非祝言。水際より控枝まであがる。

宿魂草 しゆくこんそう

古歌

誰もたたけふや折らん年毎に水かけ草の

露のまにまに

龍膽 りんどう

非祝言。水際。

一説通用、一説に通用にあらず。

本草綱目にいう、龍葵の如し、味苦くして

胆たんの如し、因んで名となす。俗に草龍膽と呼

ぶ。又云う山龍膽あり、葉霜雪に枯れず。

和名、くだに。おもひ草。

龍膽、熊笹に取り合いよし。前置の時かな

らず用いる。

第五十九図

立花 やつで除真

西村松庵

やつで 松 菊 柘植 熊笹 嫩

著我 狗子柳 銀杏

ヤツデが真と胴に使われている。他の役枝がヤツデの大きな葉の広がりと同化してしまわないように、異形の松と菊で副、請をつくり、控枝の玉形の柘植でぎゅっと全体を引き締めている。



同松庵

よろいとおし

非祝言。水際、控枝によし。

よろいとおし
白芷。

唐車前とうおほぼこ

祝言。水際、前置にも用いる。

茉苳おほほこ（詩経）。

あわ雪

非祝言。水際より前置の上まで上る。

花つる

祝言。上中、心にならず。

この花近代出て立花の賞翫となれり。請

副、つや、あしらいもつとも美なり。これ鳥

かぶとの変じたるものか。

第七十回

立花 芭蕉直真

桑原半兵衛

芭蕉 菊 小菊

檜 苔 夏はぜ 著我

松 梅擬 柘植 椿

芭蕉（系芭蕉？）の葉が真に5枚、あしらいに1枚使われている。上半分を芭蕉と菊の2種でまとめ、下半分を松や梅擬などでしっかりと作り込んでいる。上下で景色をがらりと変えているところに、芭蕉への特別な思いを感じる。かなり大型の立花と思われる。



立華時勢粧りつかいまようすがたを読む

立花秘傳抄 三

⑥1

草之部 (つつき)

犬子草えのこ

七重草

非祝言。水際。

葱草

同前。

きんき草

非祝言。水際。

矢筈

同前。

秋海棠

非祝言。水際。



第六十五図

立花 松真水際指分

菱屋六兵衛

松 晒木 梅 竹 柘植 椿 嫩 水仙

柏

二つ真のように水際から一直線に空間が空けられているが前置で左右が繋がっていること、真はあくまでも一つである。この左右を合体させたならそのまま幽美な立花となる。夫婦仲睦まじく寄り添う姿に見えてくる。例えば金婚式のお祝いに立てるならこんな立花がいい。

いさや

祝言。下。

野かいどう

非祝言。下。

けまん

同前。

茜草

祝言。下。

莎草こうぞ

祝言。下。

桜草

祝言。下。

虎尾

同前。

つち草

祝。上。



第八十八図

立花 二真

(初版には 二ツ真 眞春軒)

竹 松 梅 檜 嫩 水仙 椿 千両

伊吹 柘植 枇杷

水際指し分けとは全く違ふ世界感で立てられている。異なる二つの真を持ち、左右それぞれ別の景色が垂直の空間を隔てて作られ、しかも全体が調和している。何と言っても中央のあきがつくる強いなにものかに圧倒される。時空を越えて二つの世界が調和する不思議な立花だ。

金玉花

祝言。下。

にし木々

非祝言。下。

うつほ草

祝言。下。

山茨菰やまほおづき

祝言。下。

ばれん

非祝言。中。

仏生花

同前。

岩芭蕉

非祝言。中。



第八十五図

立花 松合真

(初版には 合真 富春軒)

松 梅 檜 栢 植 椿 伊吹 熊笹

嫩 枇 杷

真には相生真、合真、二つ真、直真、除真の五つあり、その一つ「合真」は二本の若松をびつたり合わせて真に立てた立花で、婚礼の席で立てられる。若松を新郎と新婦に見立てた特別な立て方。紅梅と白椿の紅白がハレの日にふさわしい。器にも縁起のいい瓢箪が見える。

卑湿＝土地が低くしてじめじめしていること

立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑥2

立花秘傳抄 三

草之部 (つつき)

水仙花

祝言。上中下。

本草綱目に云う、この物卑湿ひしつのところによろし。水欠くべからず故ゆえに水仙と名づく。

異名、雪中花、玉玲瓏ぎょくれいろう。一重なるを金盞銀きんせんぎん台花だいかと云う。千葉なるを真水仙まんだいせんと云う。

水仙は五二色ごにしきのその一つなり。一色のみにかぎらず、常の立花にも一に水仙、二におもとして云い伝えて、最上の秘事なり。又水仙の座とて瓶の中にさす所と指さぬ所とあり。葉遣い秘伝あまた数多あり。

水仙を正心に用い、あるいは中に遣うとも、葉は水際までさげて遣うべし。

水仙の一色、早咲きの時分ならば枯葉を立つ

べからず。仲秋のころよりは二、三枚遣うべし。春になりては三、五枚にても苦しからず。祝言の花ならば枯葉遣うべからず。

水仙の葉、水際に長く遣う時は、葉のあつき勢いあるを竹をほそくけつり、なかば指し通して、二枚取り合わせ、葉先すこしちがえて、一

第百六八図

立花 水仙一色
水仙一色真 富春軒
水仙 金盞花 蒼莪



度にためて遣うなり。針金を用いるべからず。

このごろの人の水仙を遣うを見るに、針金を指し通して葉先をまげ、あるいは小刀のむねをもって、しごきて勢いあらせるを専らと好む。これ大いに出生の道理に背く。見ずや水仙の葉の幽美なることを。師の云う、水仙の葉つよくなづる時は、生得のつやうせて、自然の景気なすと云えり。誠に名人の教えありがたき事にこそ。

立花秘傳抄の三終

「立花秘傳抄三」は水仙の解説で終わっている。三卷にわたる花材解説は水仙で最後となる。

水仙は秋から冬の花材として多くの立花図に使われている。「常の立花にも、一に水仙、二に万年青と云い伝えて最上の秘事なり」と書かれている。

「水仙一色」の図が三つある。直真立花、除真立花、株分砂物のそれぞれに自由奔放な水仙の姿が描かれている。これらは葉に針金を通して形作つたものではなく、すべて元々の姿であり、自然に曲がりくねった水仙を集め、役枝に配することで絶妙な花形を生み出している。

一本ごとの水仙を見ると、行儀の悪い扱いがたい

姿をしている。でもそういう姿こそ、雪に倒れ風に翻弄されても葉を伸ばす自然本来の姿なのだ。富春軒はそういう自然を特に好んで立花を立てている。自然本来の姿を立花に生かす醍醐味を後世に伝えるために。



第一百七図

立花 水仙一色
水仙一色行 桑原次郎兵衛
水仙 小菊 著我

なかんずく〓とりわけ

如かず〓およばない

恨むらくは〓残念なことには

梓に鏤める〓版木に刻む

劔刷氏〓版木の彫り師

5年を要して立花時勢粧全八巻の内容を紹介してきた。八巻の最後には次の跋文がある。

この書長く朽ちざらんことを、ここに於いて書す。

貞享戊辰五月良日

洛陽後醫

西村氏義價

第一百八図

二株砂物 水仙一色

水仙一色砂物 義價（初版は桑原次郎兵衛

水仙 小菊 露の臺 著我

夫れ花は目を悦ますの事のみに非ざるなり。又、あに気を養うの謂いなからんや。なかんずく、瓶花の風雅たるや、遊賞なんぞこれに如かん。故に世々これを伝えて、流派大いに漫れり。今世洛下に富春軒仙溪という者あり。幼より今に至るまで二十余年、花を嗜んで最も勉めたり。この故に、諸流の奥儀を窮め、自然の花の妙を探るなり。適、花をあつむるに当たつて、奇ならずというもの無し。殆ど造化の手を仮るに似たり。これに因つて、隣里郷党の影慕うるもの、その幾許と云ふことを知らず。予また、その門に入りて、これを効うこと已に久し、唯恨むらくは未だ測り易からざるものあることを。仙やこの頃、編する所の書数巻、予をしてこれを見せしむ、その作たるや真画と妙解を与う。誠に巻を出ずして花法を知るものか。因て梓に鏤めんことを請う。仙曰く、この書、人のためにするにあらず、ただ平日の戯翫のみと。予、強いて劔刷氏に命ず。謂うに予も亦、彼の花蹊に満つと云うものと何ぞ異らんや。ただ願わくば、



花伝書を読む

仙溪

立華時勢粧りっかいまよすがたを読む ㊸

立花時勢粧 下

識語

楽天は竹の描きがたきを歌に残し、金岡は筆を捨て松に名づく。嗚呼葉しげり枝重なり景気の微細なる所うつしがたき事か。しかはあれど花影のあらたなるにまかせては人を選ばず。ここに図するものなり。

辰の九月日

書林 中野氏編集



『立花時勢粧 下』より

一昨年までの5年間で「立華時勢粧」を紹介した時、この識語（本の由来や年月を記したものを）を抜かしていたので、ここに掲載する。

楽天とは中国唐代中期の詩人、白居易（772~846）の字。自然や暮らしの中の輝きを謳った詩は日本にも影響を与え、源氏物語にも多く引用されている。

金岡とは巨勢金岡のこと。平安時代前期の絵師で、熊野権現の化身と絵の腕比べをして負かされた「筆捨松」の伝承がある。

この識語もだが、「立花時勢粧」には「種樹郭蒙駝傳」（テキスト632参照）など中国、日本の古典からの引用が多い。序文の次の箇所、

されば瓶上へいじょうに南山なんざんの美をつくし、砂鉢さひつに西湖ふうしよくの風色をうつす。ちからをもいれずして高き峰、深き溪たにを小床こしじに縮む。至らずして千里ちさとの外の勝景をみることに、その術諸芸の及ぶところにあらず。
 （立花時勢粧序 テキスト612参照）

この印象的な部分にある「ちからをもいれずして」はもともと紀貫之による

古今和歌集の序文に使われている。

やまと歌は、人の心を種たねとして、万よろずの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事業ことわざ、繁しげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯うぐいす、水に住む蛙かわずの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠よまざりける。

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛たけき武士ものぶの心をも慰なぐさむるは歌なり。

（古今和歌集仮名序の前半部）

古今和歌集も立花時勢粧も、前回紹介した「文阿弥花伝書」の序文も、自然の輝きを伝える術として歌や立花の素晴らしさを語っている。

「季節の輝きを表現する」ことが原点なのだを教えてくれている。

立華時勢粧を読む⑥ 仙溪

立華時勢粧の立花秘傳抄には和歌が多く引用されていて花の異名※を知る事が出来る。松、竹、梅で流祖が選んだ歌を紹介してみよう。

松

蔵玉集

大内や百敷山の初代草※いくとし人のなれてそゆらん

同

春の野や雪げの沢の延喜草※花咲きにけり雪におわれて

竹

通用の證歌

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべきなり

古歌

秋風はまじなる竹にかよふなり
河玉草※をなにといふべき

月にきく夕玉草※の秋風に音はいつ頃寝覚めとはまし

梅

古歌

万代に咲るなかにも初名草※春をまたでや花を見るらん

深山には見雪ふるらし難波人浦風しほる香栄草※かな

山里の軒端にさける風見草※色をも香をも誰見はやさん

「蔵玉集」とは室町時代の歌学書で、草木・鳥獸・十二月の異名などを詠んだ歌を集めて解説を加えたもの。連歌の参考辞書のようなもので、その前には「莫伝抄」があった。
「蔵玉集」は二条良基(1320～1388)が、「莫伝抄」は源俊賴(1055～1129)がまとめたことされている。
源俊賴は平安時代後期の貴族、歌人で、歌論書「俊頼髓脳」はのちの歌人に影響を与えている。
二条良基は南北朝時代の公家、歌人、連歌の大成者とされている。

連歌とは日本古来に普及した伝統的な詩形の一つで、短歌の上の句(前句)5・7・5に別の人が下の句(付

句)7・7を即興的に詠んで完成させる短連歌と、発句5・7・5と脇句7・7を交互に複数人で詠み連ねていく長連歌がある。

先日、南座での顔見世歌舞伎興行に片岡仁左衛門さんが出演されたので見に行つたが、仁左衛門演じる元平戸藩主、松浦鎮信侯は連歌が好きで、歌の師匠・宝井其角を屋敷に呼んで家臣と連歌の勉強会のようなものをする場面があった。



歌舞伎「松浦の太鼓」の一場面
出典・こんびら歌舞伎オフィシャルサイト

時は元禄15年12月14日、赤穂浪士による吉良亭討ち入りの日の設定。松浦侯は赤穂浪士が仇討ちする様子も無く1年が経つ不甲斐なさに苛立っていた

ところ、其角から赤穂浪士との昨日の風流なやりとりを聞き、ちょうどその時間こえてきた陣太鼓の打ち方から討ち入りを悟り、自分も助太刀に向かうとする。松浦侯の喜怒哀楽の表情にどっと場内が沸いていた。

この歌舞伎の鍵となるのが連歌と陣太鼓だ。前日に赤穂浪士の一人、大高源吾が其角との会話の中で、「年の瀬や 川の流れと 人の身は」と其角が言つたあとを受けて「明日待たるる その宝船」と源吾が返したことを聞いた松浦侯。その意味するところを思案していたところ、聞こえてきた陣太鼓。「バン、ドンドンドンドンドンドン」それはまさに自分が学んだ山鹿流の太鼓であり、同門に大石内蔵助がいたことを思い出す。そして打ち手は内蔵助と確信し狂喜する。

話が立花時勢粧から逸れたが、「富春軒が花材解説に選んだ歌に「蔵玉集」という連歌の辞書からの引用があるのは、自らも連歌を嗜んでいたのだと思う。前句に対し即興で機知に富んだ付句を詠むのは、個性ある枝や花を自在に合わせて立てる立花と似ている。どちらともその時代の風流なのだ。